

2025 年 11 月

食料安全保障月報

(第 53 号)



令和 7 年 11 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2025 年 11 月食料安全保障月報(第 53 号)

目 次

概要編

I	2025 年 11 月の主な動き	1
II	2025 年 11 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2025/26 年度の穀物需給(予測)のポイント	4
IV	2025/26 年度の油糧種子需給(予測)のポイント	4
V	今月の注目情報「ブラジルのバイオ燃料向け穀物需給の動向」	5

(資料)

1-1~3	穀物等の主要輸出国の生産量(過去 10 年平均との増減比較)	1 1
1-4	穀物等の国際価格の動向	1 4
1-5	サプライチェーン等に関する状況	1 5
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 6
3	穀物等の期末在庫率の推移(穀物全体、品目別)	1 7
4	加工食品の主な輸入原材料(穀物等を除く)の状況	1 9
5	食品小売価格の動向	2 3
6	海外の畜産物の需給動向(ALIC 提供)	2 4
7	FAO 食料価格指数	2 5

今月のコラム

「マレーシアの食事情②:マレーシアの農業と食料安全保障」	2 6
------------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3%増加する見込み
	＜カナダ＞	2025/26 年度の輸出量は前年度から 5.2%減少する見込み(AAFC)
	＜豪州＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 5.5%増加する見込み(USDA)
	＜EU27＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 19.8%増加する見込み(EC)
	＜ロシア＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 6.0%増加する見込み
	＜ウクライナ＞	2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%減少する見込み
	＜中国＞	2025/26 年度の輸入量は前年度から 43.9%増加の見込み
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	2025/26 年度の生産量は、前年度から 12.5%増加する見込み
	＜ブラジル＞	2025/26 年度の生産量は、前年度から 3.7%減少する見込み
	＜アルゼンチン＞	2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0%増加する見込み
	＜ウクライナ＞	2025/26 年度の生産量は、前年度から 19.4%増加する見込み
	＜中国＞	2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.03%増加する見込み

3 コメ	1 5
------	-----

- <タイ> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%減少する見込み
- <米国> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.7%減少する見込み
- <中国> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.5%増加する見込み
- <インド> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%増加する見込み
- <ベトナム> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8%減少する見込み

II 油糧種子

大豆	2 1
----	-----

- <米国> 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.8%減少する見込み
- <ブラジル> 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.0%増加する見込み
- <カナダ> 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.7%減少する見込み (AAFC)
- <中国> 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%増加する見込み
- <アルゼンチン> 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1%減少する見込み

(参考1) 本レポートに使用されている各国の市場年度について (2025/26 年度)	2 7
(参考2) 単位換算表	2 7
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎)	2 8

【利用上の注意】

表紙写真: タイ・チェンライ県メーラオ郡の開花期を迎えたインディカ米の圃場。病虫害の被害もなく、生育は順調 (撮影日: 2025 年 10 月 29 日)

(概要編)

I 2025 年 11 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

11 月の米国農務省 (USDA) の需給報告によれば、2025/26 年度の状況について、品目別にみると、小麦については、パキスタンで収穫面積・単収ともに前年度から減少、イランで単収が減少し生産量が減少するものの、EU、インドで収穫面積・単収ともに前年度から増加、ロシア、アルゼンチンで単収が増加し生産量が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年3 月に史上最高を更新した小麦の国際相場は、同年8 月には侵攻前の水準まで低下したものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する4 者合意(黒海穀物イニシアティブ)については 2023 年7 月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU 向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、EU で収穫面積が前年度から減少、ブラジルで単収が減少し生産量が減少するものの、米国、ウクライナ、メキシコ、ザンビアで収穫面積・単収ともに前年度から増加、アルゼンチンで収穫面積が増加し生産量が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

大豆については、ロシアで収穫面積・単収ともに前年度から増加、ブラジルで収穫面積が増加し生産量が増加するものの、インドで収穫面積・単収ともに前年度から減少、米国、アルゼンチンで収穫面積が減少し生産量が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度から減少する見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表している食料価格指数については、主に穀物、乳製品、肉、砂糖の価格指数の低下が、植物油の上昇を上回ったこと等により、9 月の128.5 から、10 月(最新値)は 126.4 と低下(参考:2024 年 10 月 126.9、2023 年 10 月 120.7、2022 年 10 月 136.7、2021 年 10 月 133.2、2020 年 10 月 101.3)。海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、直近5 カ年の平均値より約1割高い水準で推移。



写真:豪州・ウェスタンオーストラリア州

収穫を目前に控えた小麦畑

撮影日:2025 年 11 月 13 日

撮影者:Anne Wilkins



写真:ロシア・クラスノダール地方

3葉期を迎えた小麦畑

撮影日:2025 年 11 月 4 日

ウクライナの生産・輸出動向

USDA の 11 月需給報告によれば、2025/26 年度のウクライナの小麦の生産量は、単収の減少を受け、前年度から 2% 減少し 2,300 万トンとなる見込み。また、輸出量は、生産量の減少等を受け、前年度から 5% 減少し 1,500 万トンとなる見込み。2025/26 年度のとうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに増加することを受け、前年度から 19% 増加し 3,200 万トンとなる見込み。また、輸出量は、生産量の増加等を受け、前年度から 22% 増加し 2,450 万トンとなる見込み。

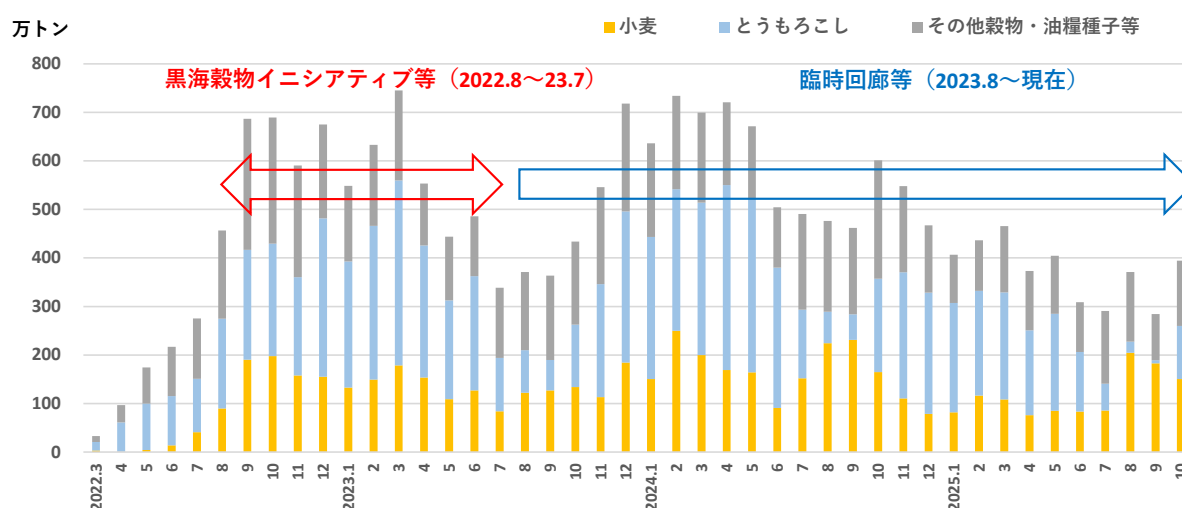
現地情報会社によれば、11 月 6 日現在、2025/26 年度の冬小麦及び春小麦の収穫はほぼ終了し、とうもろこしの収穫進捗率は 53% となっている。2026/27 年度の秋播き作物は 9 月初旬から作付けが始まっており、11 月 3 日現在、冬小麦の作付進捗率は 90%。10 月末現在、作付時期が早かった圃場では分けつ期を迎えており、その他の地域では出芽期から 3 葉期を迎えている。

臨時回廊からの輸出状況

2022 年 7 月 22 日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年 8 月以降、オデーサ港等 3 港からの輸出が再開したが、2023 年 7 月 17 日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023 年 8 月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われているが、臨時回廊からの輸出が大半を占めている。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022 年 3 月～2025 年 10 月）



出典：ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成
注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

1 米中協議(2025 年 10 月 30 日)の合意内容(農産物関連分野)

2025 年 10 月 30 日、ドナルド・トランプ大統領と習近平国家主席は韓国で首脳会談を行い、追加関税と輸出規制等を1年間停止することに合意した。農産物関連分野での主な合意内容は以下の通り。

【関税】米国側は、2025 年 11 月 10 日より中国に対する追加関税 20%のうち、10%を撤廃するとともに、相互関税 34%のうち、24%の適用停止を 2026 年 11 月 10 日まで延長し、10%を維持。また、2025 年 11 月 29 日に期限が切れる 1974 年通商法 301 条追加関税の適用除外措置を 2026 年 11 月 10 日まで延長する。中国側は、これに応じて実施している報復関税を調整し、11 月 10 日より小麦・とうもろこし・大豆の追加関税を 10%に引き下げた。

【数値目標】米国側は、中国が米国産大豆を 2025 年末までに少なくとも 1,200 万トン、2026～28 年に各年 2,500 万トン購入するという数値目標を公表したが、中国側は、農産品貿易拡大に合意したという言及に留まり、こうした具体的数値目標には言及していない。

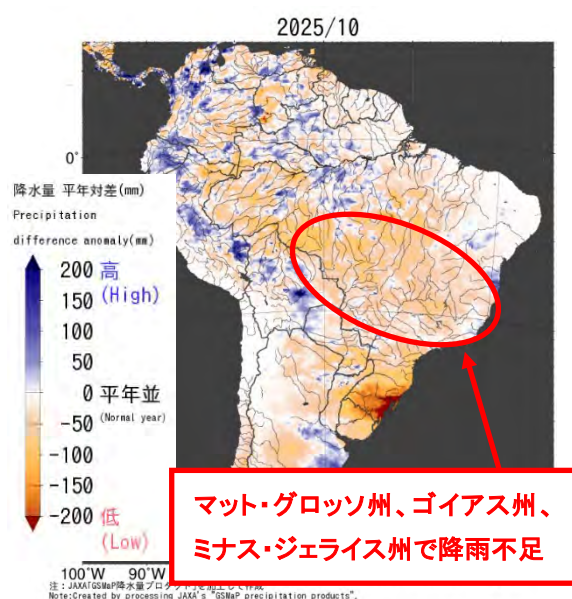
【入港手数料】1974 年通商法 301 条調査に基づく米国への中国船入港に対する手数料に関して、米国側は 2025 年 11 月 10 日から1年間徴収を停止する。中国側は、これに応じて実施している報復措置を1年間停止する。

2 ブラジル:2025/26 年度のとうもろこしの作付面積は前年度比4%増の見込み

ブラジル食料供給公社(CONAB)は 11 月 13 日、2025/26 年度の第2回目の生産予測を公表した。とうもろこしの生産量は、前年度から 1.6%減少し1億 3,884 万トンとなる見込み。これは、ブラジル産とうもろこしの需要増による価格上昇の期待から、第1期作とうもろこし(夏とうもろこし)の作付面積が前年度から 7.1%増加し、経済的に有利な大豆とうもろこしの二毛作の継続から、第2期作(冬とうもろこし)の作付面積が前年度から 3.8%増加すると見込まれるものの、天候に恵まれ例外的な高単収を記録した前年度から、単収が 5.4%減少すると見込まれることによる。現在、第1期作とうもろこしの作付作業が進んでおり、11 月8日現在の作付進捗率は 47.7%。前年同期及び過去5年平均と同様のペースで進展している。現在のところ、大部分の地域で降雨に恵まれ、作物は順調に生長している。第2期作とうもろこしの作付けは、12 月末以降に開始される。

大豆の生産量は、前年度から 3.6%増加し1億 7,760 万トンとなる見込み。これは、高い収益性によりコメなどの他作物から大豆に作付けがシフトすることや、新たな圃場の開拓により作付面積が前年度から 3.6%増加すると見込まれるため。現在、今期の作付作業が進展しており、11 月8日現在の作付進捗率は 58.4%と平年並みのペースで進展しているものの、ゴイアス州、ミナス・ジェライス州では降雨不足により作業の遅れが顕著となっている。マツ・グロッソ州では 10 月の不安定な気象により 10 月初旬に作付けされた地域で、発芽率や初期生育に悪影響が生じている。

図:ブラジルの降水量(平年対差)
(2025 年 10 月)



出典: 農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

Ⅱ 2025 年 11 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、10月末、190ドル/トン台半ばで推移。11月に入り、中国による米国産小麦の調達観測等を受け204ドル/トン近くまで上昇したものの、中国の米国産小麦の調達が限定的との見方や米国農務省需給報告で米国産小麦の期末在庫量が市場予想を上回ったこと等を受け下落し、11月中旬現在、190ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、10月末、160ドル/トン台後半で推移。11月に入り、中国による米国産大豆の購入期待を受け170ドル/トン台前半まで上昇したものの、その購入が限定的であったこと等を受け160ドル/トン台後半まで下落した。その後、米国農務省需給報告における2025/26年度の米国の単収見通しが大幅に引き下げられるとの観測から170ドル/トン台半ばまで上昇したものの、実際の引下げは小幅となったことを受け下落し、11月中旬現在、170ドル/トン台前半で推移。

コメは、10月末、370ドル/トン台前半で推移。11月に入り、世界的な供給増や世界第一位の輸入国であるフィリピンによる輸入禁止等を受け更に下落したものの、タイバーツ安を受け上昇し、11月中旬現在、370ドル/トン台後半で推移。

大豆は、10月末、400ドル/トン台前半で推移。11月に入り、米中関税の引下げ報道等を受け410ドル/トン台前半まで上昇したものの、中国による米国産農産物の購入が限定的であったこと等を受け400ドル/トン台前半まで下落した。その後、米国から中国への輸出再開の期待を受け410ドル/トン台半ばまで上昇したものの、中国向け大豆輸出成約低迷の懸念を受け下落し、11月中旬現在、410ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2025/26 年度の穀物需給(予測)のポイント

2025/26 年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度から 3.2%増の 29.46 億トン。消費量は、前年度から 2.3%増の 29.47 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度から減少し、期末在庫率も前年度を下回り 26.1%となる見込み(P16 資料 2 参照)。

生産量は、前年度から、小麦、とうもろこしは増加、コメは減少し、穀物全体では増加となり、29.46 億トンの見込み。

消費量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体では増加となり、29.47 億トンの見込み。

貿易量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体では増加となり、5.27 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.69 億トンと前年度より減少、期末在庫率も前年度より減少する見込み。

(注:数値は 11 月の USDA「PS&D」による)

Ⅳ 2025/26 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

2025/26 年度の油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.88 億トン。消費量は前年度を上回り 6.85 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り 20.8%となる見込み。

(注:数値は 11 月の USDA「PS&D」による)

V 今月の注目情報: ブラジルのバイオ燃料向け穀物需給の動向

ブラジルにおけるバイオ燃料向け穀物需要は、バイオ燃料の混合義務量の増加を主な理由として年々増加傾向にある。2025年8月には、およそ10年ぶりにガソリンへのバイオエタノール混合率が27%から30%へ引上げられ、ディーゼルへのバイオディーゼル混合率についても14%から15%へ引上げられた。これにより、近年バイオ燃料の原料として増加傾向にあるとうもろこし需給のタイト化などが予想されている。

ブラジルのバイオ燃料政策の動向と穀物需給への影響についてまとめた。

注: 文中の「2025/26 年度」等は市場年度で、ブラジルのとうもろこしは 2026 年3月から 2027 年2月。市場年度は国や作物によって異なる(品目別需給編参照)。

1 ブラジルのバイオ燃料政策の変遷

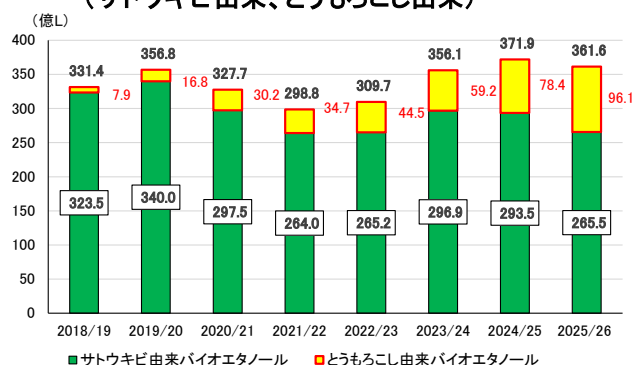
(1) バイオ燃料政策の変遷

ブラジルのバイオエタノール政策は、1931 年に、国際的な砂糖価格急落の対策として、サトウキビのバイオエタノール使用拡大を目的に輸入ガソリンに5%のエタノール混合を義務付けたのが始まりである。1973 年には第 1 次石油危機で原油の輸入依存が問題となり、1975 年に原油の輸入抑制とサトウキビを使用したバイオエタノール需要拡大を主目的とした「国家アルコール計画 (PROALCOOL)」が開始され、バイオエタノールの生産者買入価格や小売価格の固定等、政府による介入が行われた。これによりバイオエタノールの需要量及び生産量が拡大した。1980 年代の債務危機を経て市場原理主義に移行する中、1990 年に国家アルコール計画は終了したが、2003 年にはガソリンとバイオエタノールの任意の混合割合をドライバーが設定できる「フレックス車」が登場・普及するなど、バイオエタノールの更なる需要増が進んだ^{※1}。なお、2025/26 年度のバイオエタノール(サトウキビ由来、とうもろこし由来)生産量は、361.6 億リットルの見込みで、うち 265.5 億リットルをサトウキビ由来が占める。とうもろこし由来バイオエタノールの生産が本格化したのは 2010 年代後半に入ってからであり、CONAB によれば、2018/19 年度には 7.9 億リットルであったとうもろこし由来バイオエタノールの生産量は 2025/26 年度には 96.1 億リットルまで増加すると見込まれている(図1)。

※1 小泉達治(2012)「バイオエネルギー大国ブラジルの挑戦」日本経済新聞出版社を参考とした。

ブラジル政府は現在、砂糖とバイオエタノールの需給動向等を勘案の上、ガソリンへのバイオエタノール混合率を設定している(表1)。2025 年8月以降は30%の混合が義務付けられており、運転手がガソリンスタンドで給油する場合、エタノール(E100)かエタノール30%混合ガソリン(E30)を選択することとなる。現地の運転手の方によれば、エタノールの燃費はエタノール混合ガソリンの約7割であることから、エタノールの値段がエタノール混合ガソリンの値段の7割以下ならエタノールを選び、7割以上ならエタノール混合ガソリンを選ぶ傾向にあるという(写真)。

図1 ブラジルのバイオエタノール生産量の推移
(サトウキビ由来、とうもろこし由来)



※含水エタノール、無水エタノールを合算して作成

25/26 年度は予測値。

資料: CONAB「CanaSerieHist-Industria」をもとに農林水産省にて作成

バイオディーゼル政策については、1983 年に代替燃料促進計画(OVEG Projects)が発表されたが、当時はエタノール政策が優先されたためこの計画は進展しなかった。その後、2005 年にバイオディーゼル生産拡大による北東部・北部の農村雇用増等を目的に、2008 年1月から2%、2013 年度から5%のバイオディーゼル混合を義務づけることが規定されたが、2010 年に前倒しで5%を達成した^{※2}。その後は、燃料の品質及び大豆油価格のインフレ懸念等により混合率の一時的な引き下げはあったものの、2025 年まで段階的に引き上げられている(表2)。なお、ブラジルでは大豆油がバイオディーゼルの主原料となっている(図11)。

※2 小泉達治(2012)「バイオエネルギー大国ブラジルの挑戦」日本経済新聞出版社を参考とした。

(2)「未来の燃料法」

2014 年9月以降、ガソリンへのバイオエタノール混合率は、バイオエタノールと砂糖の需給動向等を勘案の上、「18%から 27.5%」の範囲で設定されることとされており、実際の混合率は27%に設定されていた。しかし、2024 年 10 月9日には、運輸部門の脱炭素化を目的に、バイオ燃料の利用拡大と新技術開発を促進する包括的枠組みである、法律第 14,993 号(Lei nº 14,993) 通称「未来の燃料法」が制定され、同法により混合率の設定範囲は「22%から 35%」へと拡大された。これにより混合率の引上げが可能となり、2025 年8月1日には混合率が従来の 27%から 30%へ引き上げられた。ブラジル鉱山エネルギー省(CNPE)によれば、混合率の 30%への引上げにより、5万人以上の雇用創出とエタノール生産施設等への 100 億レアル以上の投資が見込まれる。また、環境面では、年間で 300 万トンの二酸化炭素排出量削減が期待される。

ディーゼルへのバイオディーゼル混合率は2025 年3月1日から毎年 1 ポイントずつ引き上げ、2030 年に20%を達成する計画となった。大豆油価格のインフレ懸念により一度引上げが延期されたものの、2025 年8月1日に混合率が 14%から 15%へ引き上げられた。CNPEによれば、混合率の 15%への引上げは大型輸

表1 ブラジルのバイオエタノール混合率の推移
(2006 年以降)

年月	混合率
2006.1	E25
2006.3	E20
2006.11	E23
2007.6	E25
2010.2	E20
2010.5	E25
2011.10	E20
2013.5	E25
2015.3.16	E27
2025.8	E30

資料:USDA「Biofuels Annual」をもとに農林水産省で作成

写真 ブラジルのガソリンスタンドの価格表示
(2025.10.6 撮影)



撮影者:筆者

マツ・グロッソ州のガソリンスタンドの価格表示。上から E がバイオエタノール(E100)、G がバイオエタノール混合ガソリン(E30)、D がバイオディーゼル混合ディーゼル(B15)となっている。

表2 ブラジルのバイオディーゼル混合率の推移

年月	混合率
2008.1	B2
2008.7	B3
2009.7	B4
2010.1	B5
2014.8	B6
2014.11	B7
2017.3	B8
2018.3	B10
2019.9	B11
2020.3	B12
2020.9	B10
2020.11	B11
2021.1	B12
2021.3	B13
2021.5	B10
2021.9	B12
2021.11	B10
2022.1	B10
2023.4	B12
2024.3	B14
2025.8	B15

資料:USDA「Biofuels Annual」等をもとに農林水産省で作成

送部門の脱炭素化に寄与し、年間 120 万トンの二酸化炭素量排出削減、4,000 人以上の雇用創出、大豆压榨施設等への 50 億レアル以上の投資が期待されている。

2 ブラジルのとうもろこし及び大豆の生産動向

(1)とうもろこし

米国農務省(USDA)によれば、ブラジルは世界第3位のとうもろこし生産国であり、2025/26年度の生産量は 131.0 百万トンと、世界のとうもろこし生産量(1,286.2 百万トン)の 10.2%を占めている。

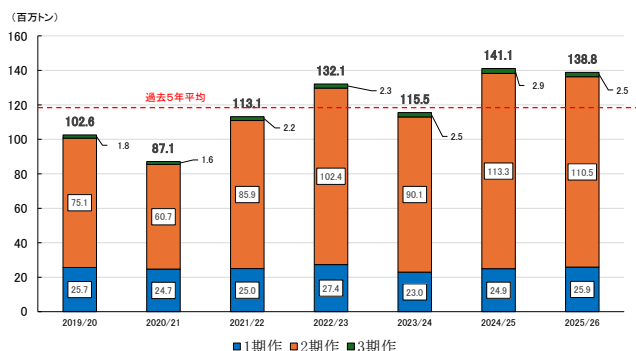
ブラジル食料供給公社(CONAB)によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の減少を受け前年度から 1.6%減となるものの、過去5年平均(117.8 百万トン)から 17.9%増の 138.8 百万トンの見込み(図2)。

夏とうもろこし(第1期作)の実産量は、コメなどの他作物から収益性が高いとうもろこしに作付けがシフトすることによる作付面積の増加を受け、前年度から 3.7%増の 25.9 百万トンの見込み。作付進捗率は 11 月 8 日現在 47.7%と前年同期及び過去5年平均と同程度。なお、夏とうもろこしは、大豆とほぼ同時期の概ね8月～翌年1月に作付けされ、2～6月に収穫される。また、ブラジル南部～北東部が主要生産地となっている(図3)。

冬とうもろこし(第2・3期作)の実産量は、単収の減少を受け、前年度から 2.7%減の 113.0 百万トンの見込み。冬とうもろこしは、主にマツト・グロッソ州を含むブラジル中西部で、大豆収穫後に作付けされている(図4)。

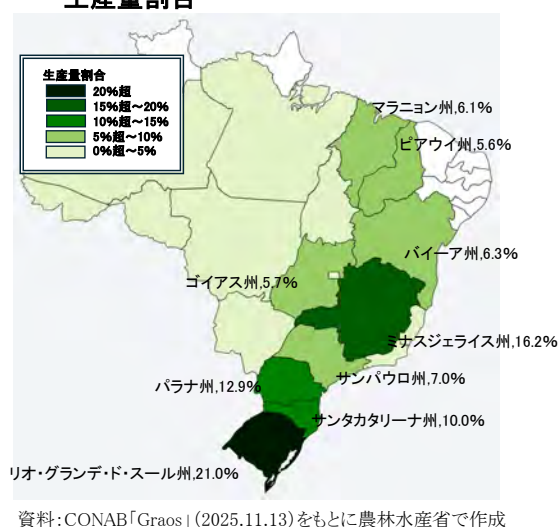
かつてブラジルでは南部での夏とうもろこしの生産が主であったが、ブラジル農牧研究公社(Embrapa)によれば、1980 年代初頭、南部パラナ州において、畜産農家の飼料用とうもろこしの需要拡大や、夏とうもろこしの供給ピークを避けた端境期での販売が可能であったことなどを背景に冬とうもろこしの作付けが拡大した。その後、中西部での作付けが 1990 年代以降に拡大し、中西部のインフラ整備に伴い、輸出も促進された。また、ブラジルエネルギー研究公社(EPE)によれば、2011 年以降、大豆収穫後のとうもろこしの作

図2 ブラジルのとうもろこし生産量の推移



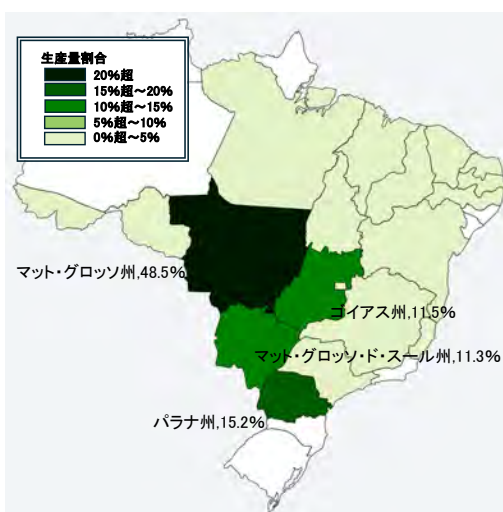
※生産量の合計は、1期作、2期作、3期作の合計
資料: CONAB「Graos」(2025.11.13)をもとに農林水産省で作成

図3 ブラジルのとうもろこし(第1期作)の州別生産量割合



資料: CONAB「Graos」(2025.11.13)をもとに農林水産省で作成

図4 ブラジルのとうもろこし(第2期作)の州別生産量割合



資料: CONAB「Graos」(2025.11.13)をもとに農林水産省で作成

付けが一般的となったことで作付面積が拡大し、中西部での生産量はさらに増加している。近年は、中西部での冬とうもろこし生産量の増加に伴い、同地域でのとうもろこし由来バイオエタノールの生産量が増加している(図5)。

(2) 大豆

USDA によれば、ブラジルは世界第1位の大豆生産国であり、2025/26 年度の実産量は 175.0 百万トンと、世界の大豆生産量(421.8 百万トン)の 41.5%を占めている。

CONAB によれば、2025/26 年度の実産量は、コメなどの他作物から収益性が高い大豆に作付けがシフトすること等による作付面積の増加を受け、前年度から 3.6%増、過去5年平均(150.6 百万トン)から 17.9%増の 177.6 百万トンと史上最高の見込み(図6)。作付進捗率は 11 月8日現在 58.4%と平年並みのペースで進行している。なお、大豆は、主要生産地であるマツ・グロッソ州を含むブラジル中西部で主に作付けされている(図7)。

3 ブラジルのとうもろこし及び大豆の輸出動向

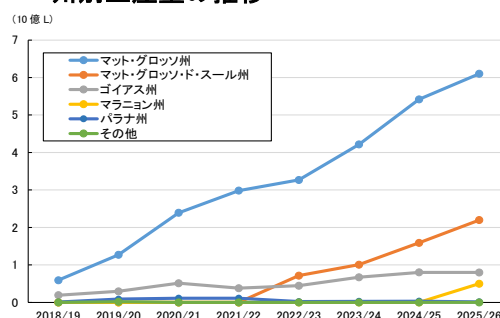
(1) とうもろこし

USDA によれば、ブラジルは世界第2位のとうもろこし輸出国であり、2025/26年度の実輸出量は前年度から 4.9%増、過去5年平均(40.5 百万トン)から 6.2%増の 43.0 百万トンとなる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～10 月の輸出量は、前年同期(2,418.5 万トン)に比べ 2.5%増の 2,478.7 万トン。輸出先国別には、イラン 468.3 万トン(18.9%)、エジプト 412.2 万トン(16.6%)、ベトナム 249.1 万トン(10.1%)の順となっている(表3)。

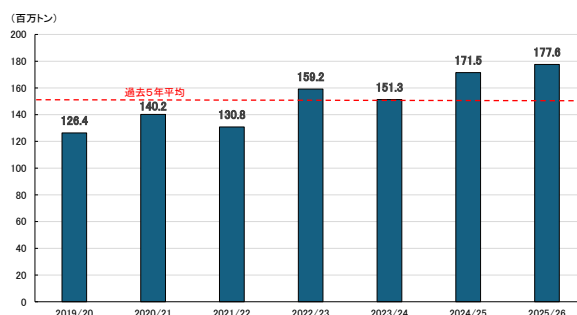
USDA によれば、中国政府が国内農家の利益を守るための輸入抑制を行っていること等により、2023/24 年度の実中国向け輸出が減少した。また、日本及び韓国向け輸出は、ブラジル国内での飼料及びバイオエタノール需要の増加により輸出余力が減少したことや米国産の供給が潤沢で価格競争力が弱まったことを受け、減少している。

図5 ブラジルのとうもろこし由来バイオエタノールの州別生産量の推移



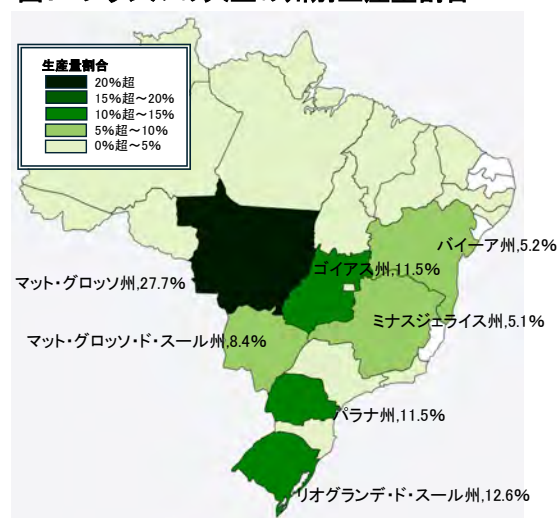
資料: CONAB「CanaSerieHist-Industria」をもとに農林水産省で作成

図6 ブラジルの大豆の実産量の推移



資料: CONAB「Graos」(2025.11.13)をもとに農林水産省で作成

図7 ブラジルの大豆の州別生産量割合



資料: CONAB「Graos」(2025.11.13)をもとに農林水産省で作成

表3 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2022/23年度 (2023年3月～2024年2月)		2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)		2023/24年度 (2024年3月～2024年10月)		2024/25年度 (2025年3月～2025年10月)	
国名	輸出量 (万トン)	国名	輸出量 (万トン)	国名	輸出量 (万トン)	国名	輸出量 (万トン)
中国	1,647.1	エジプト	601.1	エジプト	283.4	イラン	468.3
日本	489.2	イラン	535.7	ベトナム	276.0	エジプト	412.2
ベトナム	449.6	ベトナム	450.9	韓国	229.0	ベトナム	249.1
イラン	329.0	韓国	243.3	イラン	201.3	中国	148.4
韓国	297.0	日本	214.3	日本	195.8	サウジアラビア	136.4
その他	2,192.4	その他	1,772.8	その他	1,233.1	その他	1,064.2
合計	5,404.3	合計	3,818.2	合計	2,418.5	合計	2,478.7

資料: ブラジル貿易統計をもとに農林水産省で作成

(2)大豆

USDA によれば、ブラジルは近年世界第1位の大豆輸出国であり(図8)、2025/26 年度の大豆の輸出量は、生産量の増加等を受け前年度から 9.1%増、過去5年平均(92.7 百万トン)から 21.3%増の 112.5 百万トンと史上最高となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度の輸出量は 10,313.8 万トンで主な輸出先国は、中国、スペイン、タイの順(表4)。2025 年 10 月の中国向け輸出量は、前年同月の 352.2 万トン(全体の 74.8%を占める)から 74.9%増の 616.6 万トン(同 91.7%)となっている(図9)。中国は大豆の輸入について、米中貿易摩擦による影響で米国から主にブラジルへ輸入先をシフトさせており、報道情報によれば、ブラジル産大豆の在庫量減少に懸念が示されている。

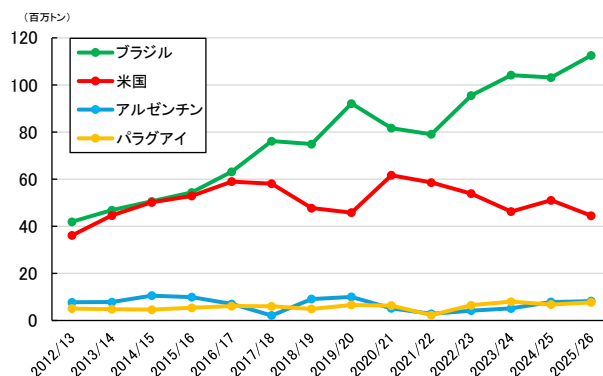
4 とうもろこし及び大豆の需給への影響

(1)とうもろこし

CONAB によれば、2025/26 年度のとうもろこし由来バイオエタノールの生産量は、前年度から 22.6%増の 96.1 億リットルと史上最高の見込み(図1)。主にマツ・グロッソ州での冬とうもろこしの生産量の増加に伴い、とうもろこし由来バイオエタノールの生産量が近年急増している(図5)。現在マツ・グロッソ州を中心にとうもろこし由来バイオエタノール工場の建設が急速に進行しており、ブラジルとうもろこしエタノール生産者協会(UNEM)によれば、2025 年9月時点で稼働中の施設が 24 か所、建設許可済みが 16 か所、計画が 16 か所となっている(図 10)。報道情報によれば、とうもろこしは、バイオエタノールの主原料であるサトウキビに比べ保管可能期間が長く、輸送コストも低いこと等により、サトウキビの端境期においても安定的なエタノール供給が可能である。このため、国内エタノール需要の増加に伴い、今後もうとうもろこし由来エタノールの生産量が増加していくとみられている。

USDA「Grain and Feed Update」(2025.8.1)によれば、E30 への引上げを受け、ブラジル国内におけるとうもろこし由来バイオエタノールの需要はさらに増加する見込み。アナリストによれば、今後、とうもろこし由来バイオエタノールの生産量は、2024/25 年度の 82 億リットルから 2033/34 年度には 184 億リットルまで増加す

図8 大豆の国別輸出量の推移



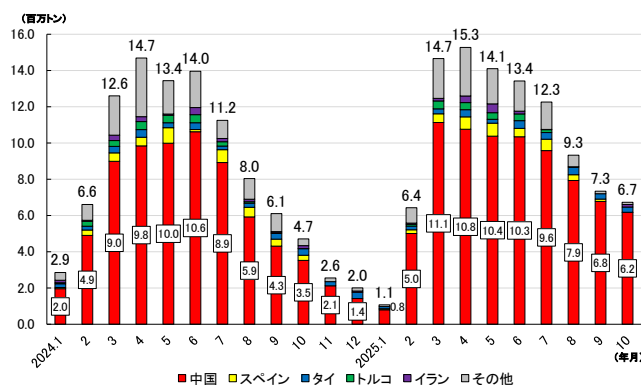
資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

表4 ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月)		2025/26年度 (2025年10月)	
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	7,968.8	77.3	中国	352.2	74.8
スペイン	396.3	3.8	タイ	36.5	7.8
タイ	365.5	3.5	スペイン	28.3	6.0
トルコ	184.8	1.8	ロシア	19.9	4.2
イラン	146.3	1.4	イラン	16.3	3.5
その他	1,252.1	12.1	その他	17.6	3.7
合計	10,313.8	100.0	合計	471.0	100.0

資料:ブラジル貿易統計をもとに農林水産省で作成

図9 ブラジルの大豆の輸出量の推移(2024.1～2025.10)



資料:ブラジル貿易統計をもとに農林水産省で作成

図 10 ブラジルのとうもろこし由来バイオエタノール工場の州別内訳



資料:UNEM の HP 掲載の図を翻訳

る可能性がある」と試算されている。

なお、とうもろこし 1 トンあたり 417 リットルのエタノール^{※3}が生産されると仮定すると、4,000 万トンを超えるとうもろこしが必要となる計算となる。

報道情報によれば、今後数年間でとうもろこし由来バイオエタノールの国内需要増により輸出量が減少し、国際価格の上昇圧力になる可能性が指摘されている。

※3 USDA「Biofuels Annual」に基づき、原料重量 1 トンあたりのエタノール生産量を 417 リットルと仮定。

(2) 大豆

ブラジル植物油産業協会 (ABIOVE) によれば、2024 年の大豆油由来バイオディーゼルの生産量は、前年 (52.2 億リットル) から 28.0% 増の 66.8 億リットルと史上最高の見込み。バイオディーゼル全体に占める大豆油由来バイオディーゼルの割合は、およそ 70% 前後で推移している (図 11)。

ブラジル農牧研究公社 (Embrapa) によれば、大豆はブラジルのほぼ全土で生産されており一部地域における気象リスクをカバーできることや、先進技術の導入による高い生産性等により、大豆油がバイオディーゼルの主要原料となっている。

ブラジルバイオ燃料生産者協会 (APROBIO) によれば、2025 年のバイオディーゼルの地域別生産能力は、大豆主要生産地である中西部及び南部で高くなっている (図 12)。

USDA によれば、2025/26 年度のブラジル産大豆の搾油用需要は、B15 引上げによる大豆油需要の高まり等を受け前年度から 1.7% 増の 5,900 万トンとなる見込み。今回制定された「未来の燃料法」では、2030 年までに B20 まで引き上げることが計画されている。大豆油の生産量が増加する中、主要原料が大豆油であるバイオディーゼルの混合率引き上げによる大豆の国内需要の動向が注目される。

5 おわりに

USDA によれば、ブラジルではバイオ燃料混合率引上げにより、とうもろこし及び大豆の国内需要の増加が予想されている。ガソリンへのエタノール混合率の引上げは、2015 年 3 月 16 日以降見送られていたが、UNEM 関係者によれば、とうもろこし由来バイオエタノールの増産が E30 実現につながったとのことである。また、今後もうとうもろこし由来バイオエタノールの生産量は増加していくことが予想されている。大豆油はバイオディーゼルの約 7 割を占める原料であり、バイオディーゼル混合率の引上げによって、原料である大豆油の国内需要の増加が予想される。ブラジルは、世界第 2 位のとうもろこし輸出国、世界第 1 位の大豆輸出国であるため、同国のバイオ燃料混合率の引上げはとうもろこし及び大豆の国内需要に影響を与えるのみならず世界の穀物需給に影響を与える可能性があることから、今後の動向について注視していきたい。

図 11 ブラジルのバイオディーゼル生産量の推移

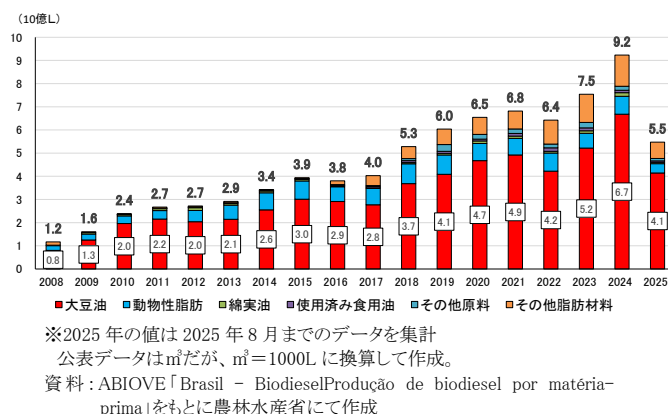
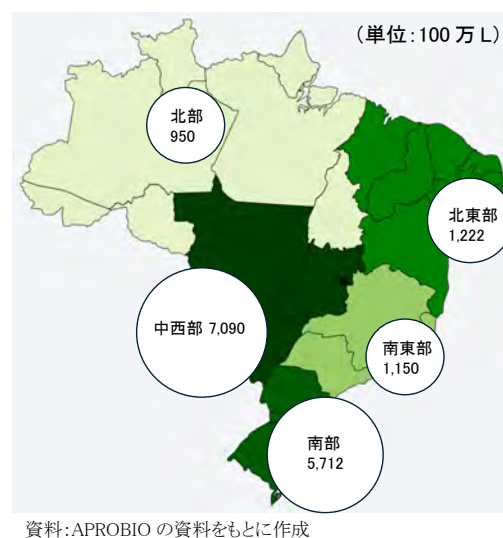
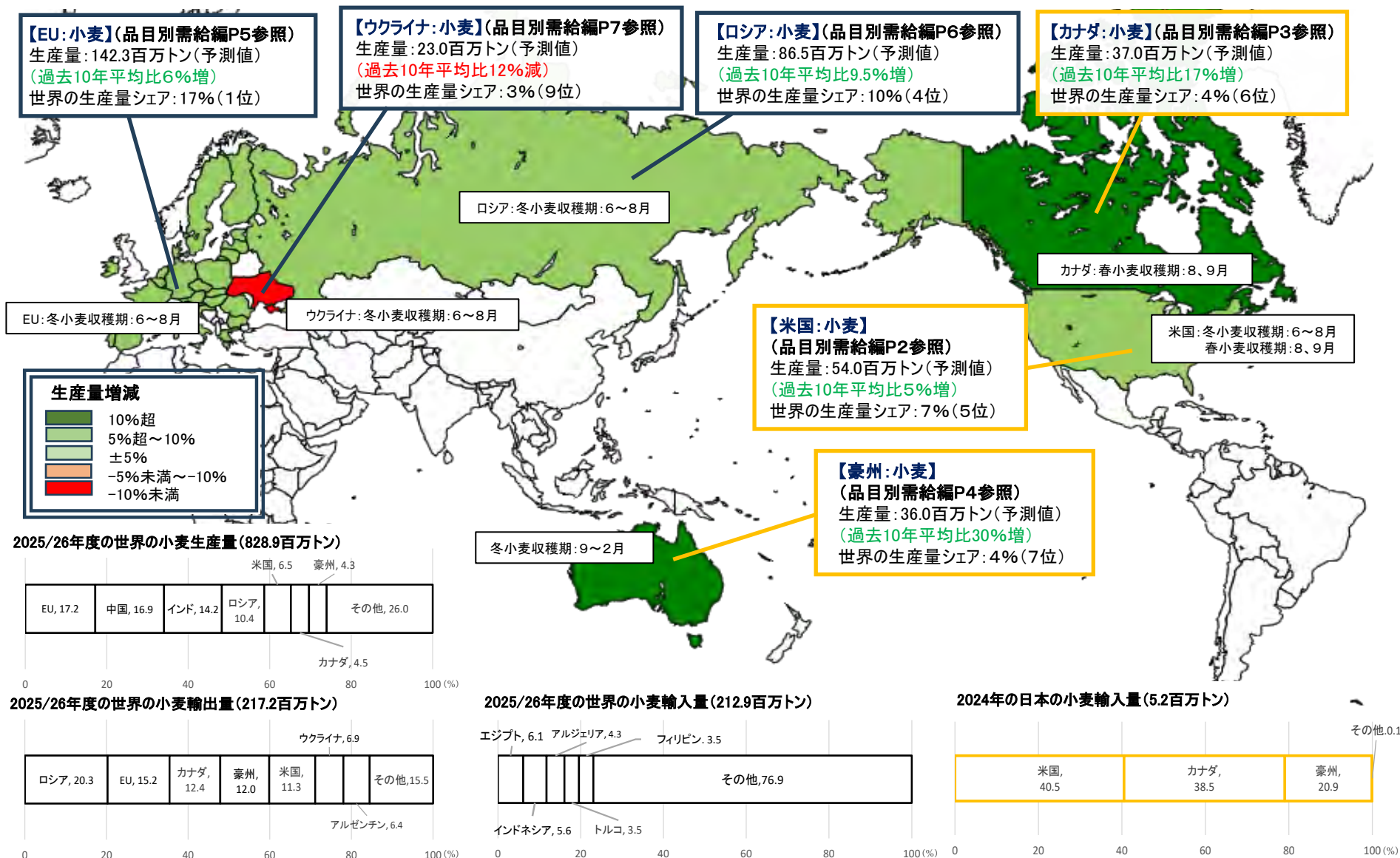


図 12 ブラジルの地域別バイオディーゼル生産能力



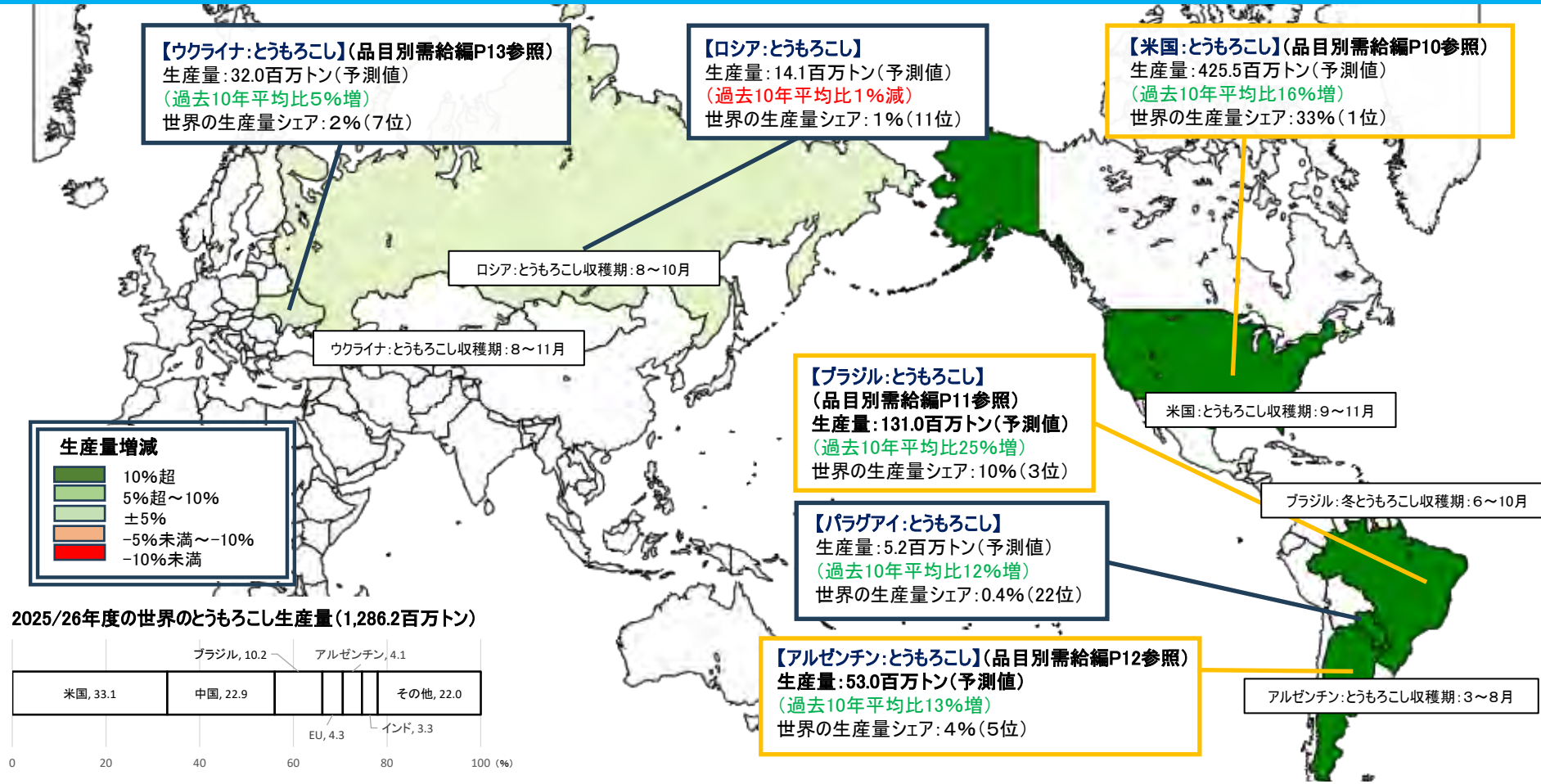
資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(11月版)



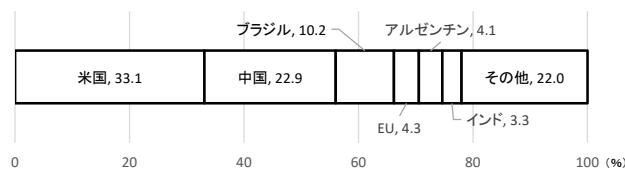
- 2024年度の日本の小麦輸入量は533万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(650万トン、うち食用は512万トン)の82.0%を占める。
- 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は256kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の11.4%を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.11)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

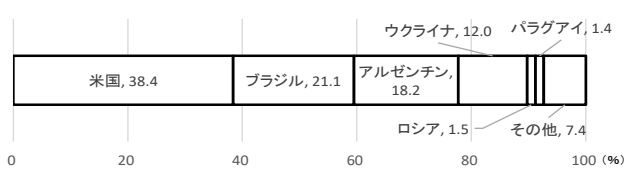
資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(11月版)



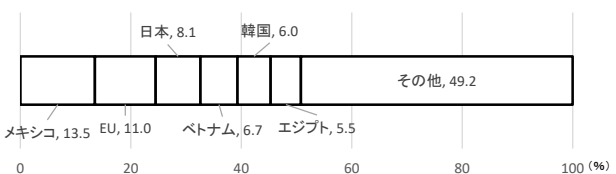
2025/26年度の世界のとうもろこし生産量(1,286.2百万トン)



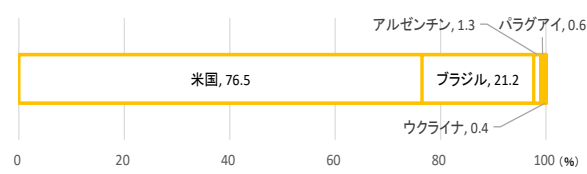
2025/26年度の世界のとうもろこし輸出量(203.5百万トン)



2025/26年度の世界のとうもろこし輸入量(191.1百万トン)



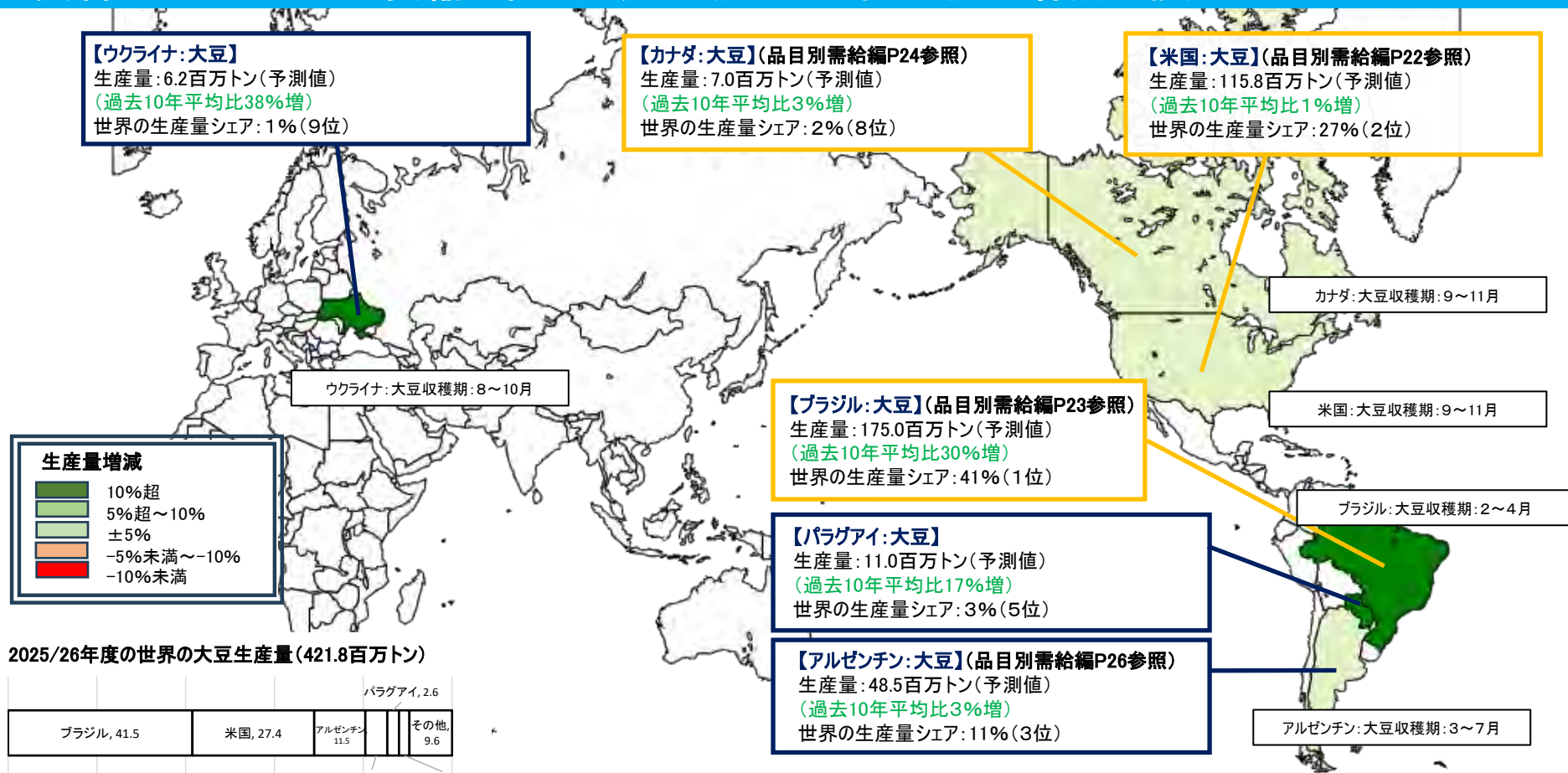
2024年の日本のとうもろこし輸入量(15.3百万トン)



○ 2024年度の日本のとうもろこし輸入量は1,522万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,518万トン、うち飼料用は1,194万トン)のほぼ全量を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.11)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(11月版)



2025/26年度の世界の大豆生産量(421.8百万トン)



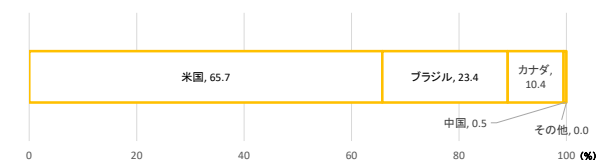
2025/26年度の世界の大豆輸出量(188.0百万トン)



2025/26年度の世界の大豆輸入量(186.4百万トン)



2024年の日本の大豆輸入量(3.17百万トン)



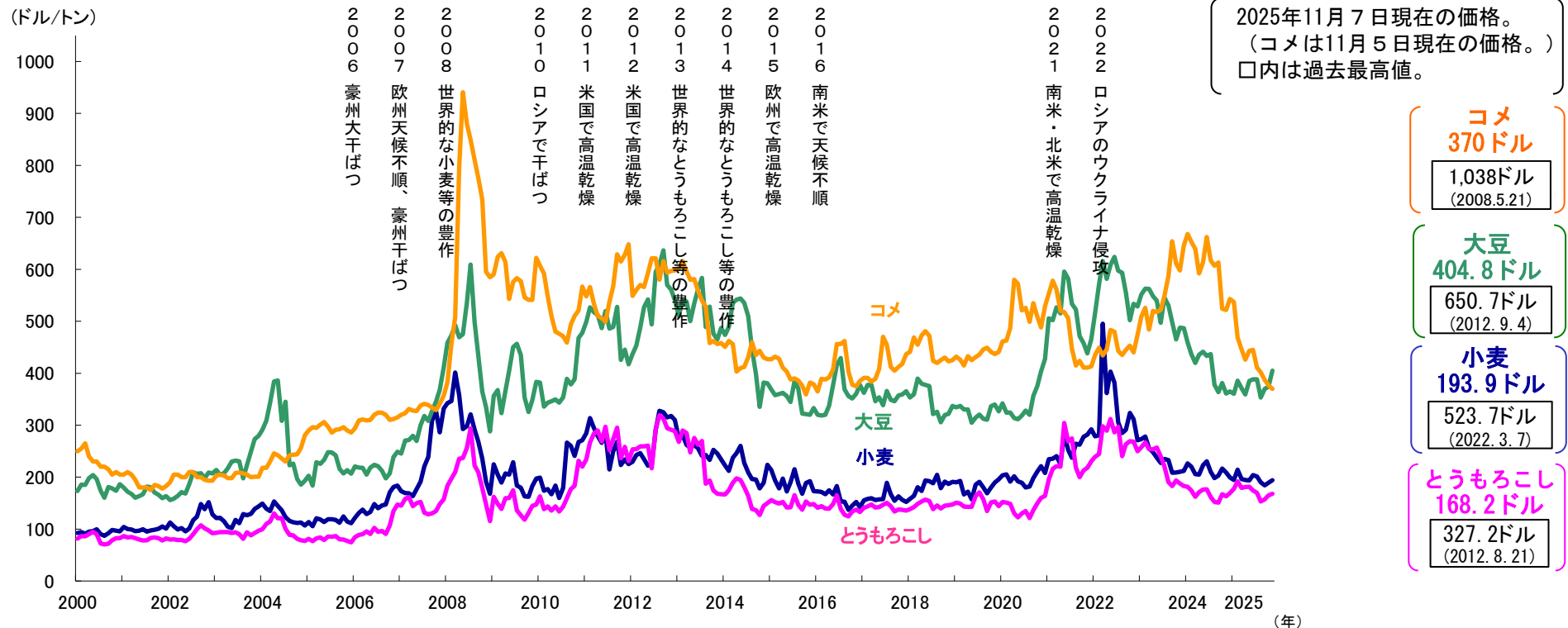
- 2024年度の日本の大豆輸入量は309万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(359万トン、うち大豆油などの加工用は256万トン、食用は88万トン)の86.2%を占める。
- 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は58kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の2.6%を占める。

出典:USDA「PS&D」(2025.11)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料 1－4 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料 1-5 サプライチェーン等に関する状況

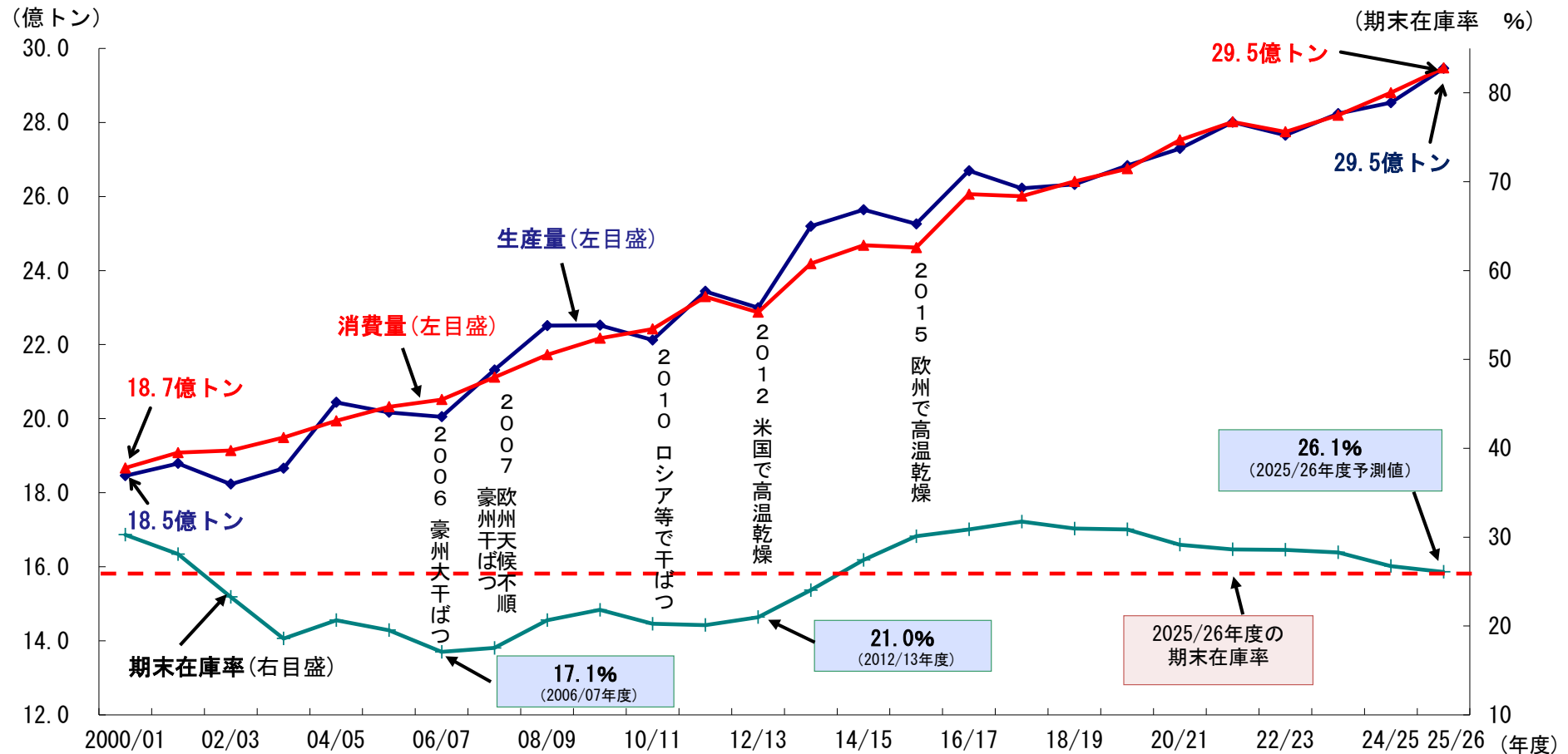
○サプライチェーン等に大きな影響を与える情報は特段なし（2025年10月28日時点）

生産国の情報	チョークポイント情報	その他
○米国 ①ミシシッピ川では、10月初旬まで降雨不足が続き、水位低下により<u>10月第2週にははしけの通行が制限され、とうもろこし及び大豆の輸送が停滞するおそれがあるとしていたが、米国連邦政府機関の一部閉鎖により通航制限等の情報は発表されていない。</u> ②2024/25年度は、米国のとうもろこし、大豆及びソルガムが記録的な豊作となる見込みであり、<u>貯蔵施設不足の懸念。</u>大豆及びソルガムは中国向け輸出需要が低迷し、保管が必要となる。輸送費や保管料も上昇中。 ○ブラジル ①<u>主要河川の流量変動によるサプライチェーンへの影響に関する情報は特段なし。</u> ②トランスノルデスティナ鉄道は、2025年10月にピアウイ州ベラ・ヴィスタ〜セアラ州イグアト間で大豆、とうもろこし、大豆粕等の試験輸送を開始。 ③国家陸運庁(ANTT)が、本年10月6日に運用を開始した<u>新たなオンライン監視制度により、最低運賃の順守と保険加入が義務化された。</u>これにより大豆輸送費は最大15%上昇する可能性があり、輸出競争力への影響も懸念される。 ④2025/26年の穀物の豊作予測により、<u>道路・鉄道・港湾の容量、ドライバー、保管能力の不足のリスクがあると警鐘。</u>特に収穫期の集中による輸送需要の急増が、輸送費高騰や港湾混雑を招き、輸出競争力を損なうおそれ。 ○アルゼンチン 10月24日、<u>パラナ川でははしけの通航に通常10〜12フィートの水深が必要なところ、9フィートの水深しかなく、はしけの積載量を25%削減して通航している。</u>水位低下が続くと11〜12月には通常の3分の1の積載量となる可能性があり、一部区間では航行不能になるおそれ。水位低下により陸路への迂回が必要となり、コスト上昇、供給遅延、港湾混雑などのサプライチェーン全体への影響も懸念される。	○パナマ運河 ①<u>パナマ運河の通航に関し特段問題なし。</u>9月のパナマ運河通航数は、1日平均34.2隻と前月32.2隻、前年同月32.4隻と比べ増加。 ②パナマ運河公社は、次世代型長期スロット割り当て「LoTSA 2.0」プログラムを発表し、通航予約システムを大幅に改定。近年の水不足や世界的な輸送パターンの変化に対応し、利用者に確実性、柔軟性、価値を提供することが目的。主な変更点は、予約期間を12か月サイクルから、2つの独立した6か月サイクルに短縮。 ○スエズ運河 2024/25年度、スエズ運河の通航量は、紅海の地政学リスクの高まりにより、前年比で52%減少し、過去2年間で収入は約90億ドル減少。スエズ運河庁は通航料割引などの支援策を講じているものの、<u>船舶数と貨物量の大幅な落ち込みが続いている。</u> ○バブ・エル・マンデブ海峡周辺 イスラエルとハマスのガザ停戦合意を受け、<u>一部のコンテナ船社が紅海通航を一部再開。</u> ○喜望峰 アジア⇄欧州の喜望峰経由航路が増加し、西アフリカの各港が超大型コンテナ船の新たな寄港地候補として浮上。	○関税措置 <u>米国及び中国は、米中貿易協議での合意に基づき、相互の関税率を引き下げ（11月5日現在）。</u> ○ラニーニャ現象 ラニーニャ現象が太平洋赤道域で再び発生し、北半球の冬まで続く見通し。アジアでの降雨増加や南米の乾燥が予想される。 ○積み荷拠点の混乱 欧州の主要な港湾でストライキが実施され、物流の混乱が発生。港湾労働者の賃金は3年間で17〜20%引き上げられる見込みであり、物流コスト増加のおそれ。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2025/26年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2025/26年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.1%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

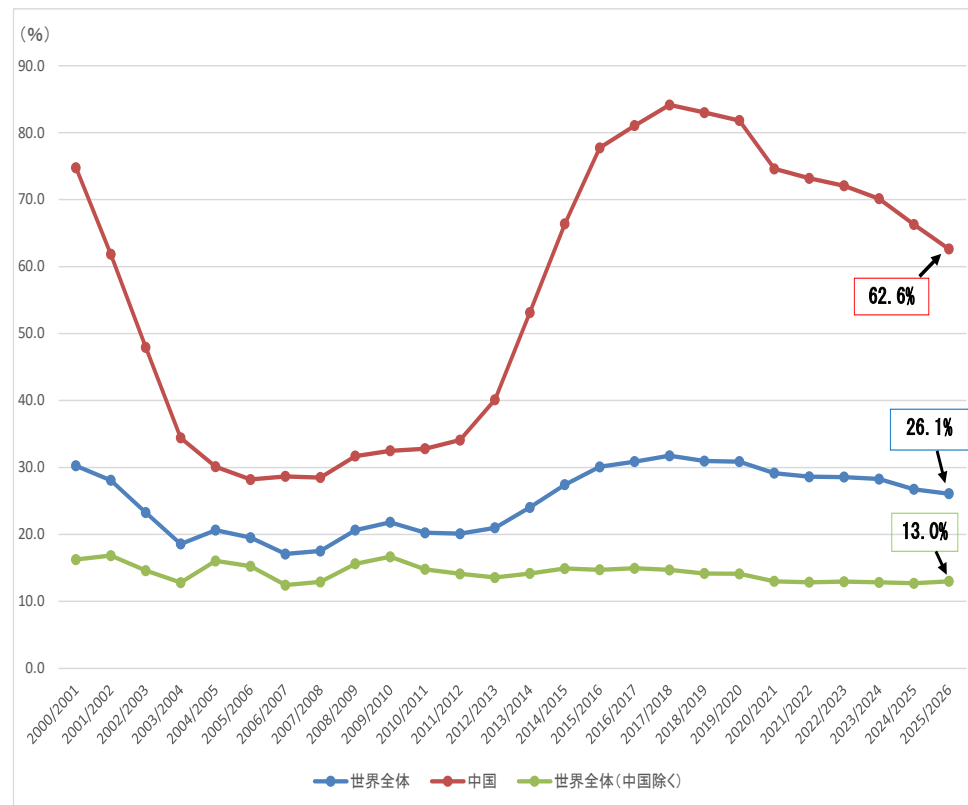


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 2025)、「PS&D」

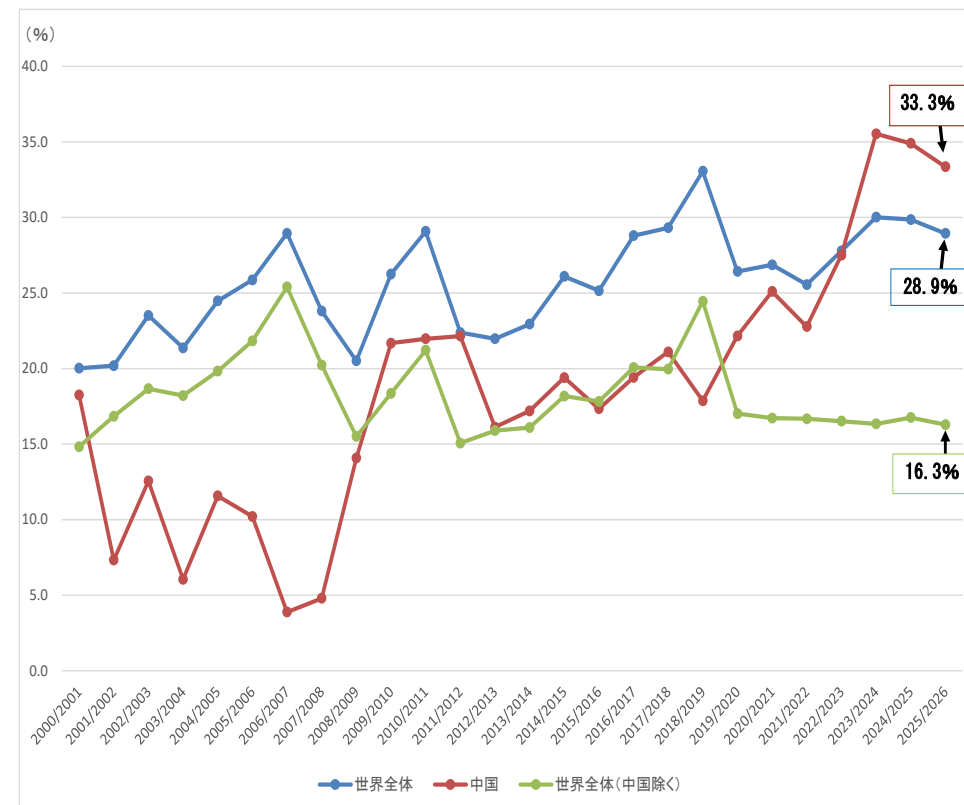
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(November 14, 2025)

注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

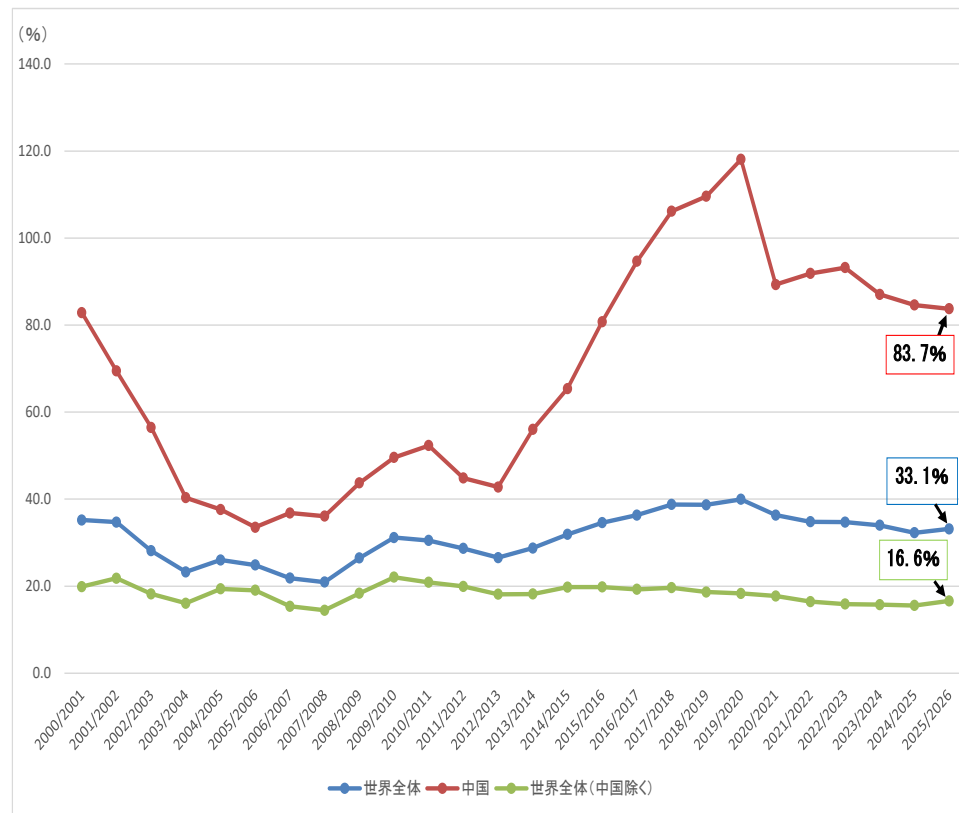
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

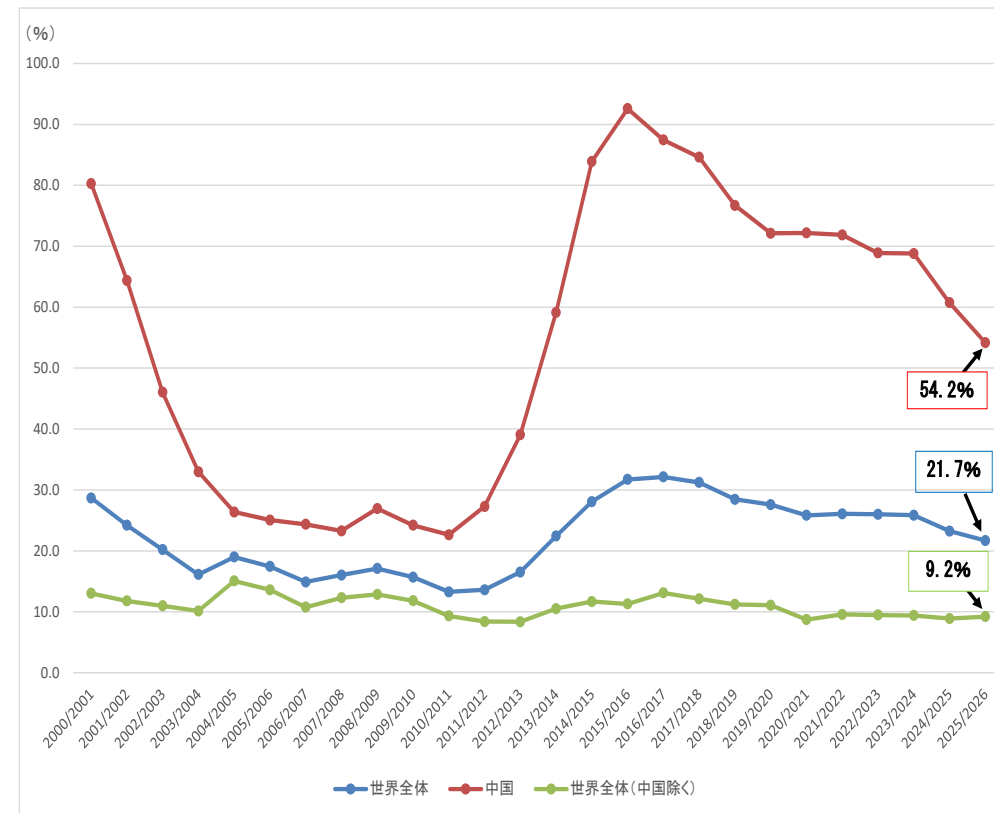
4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(November 14, 2025)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

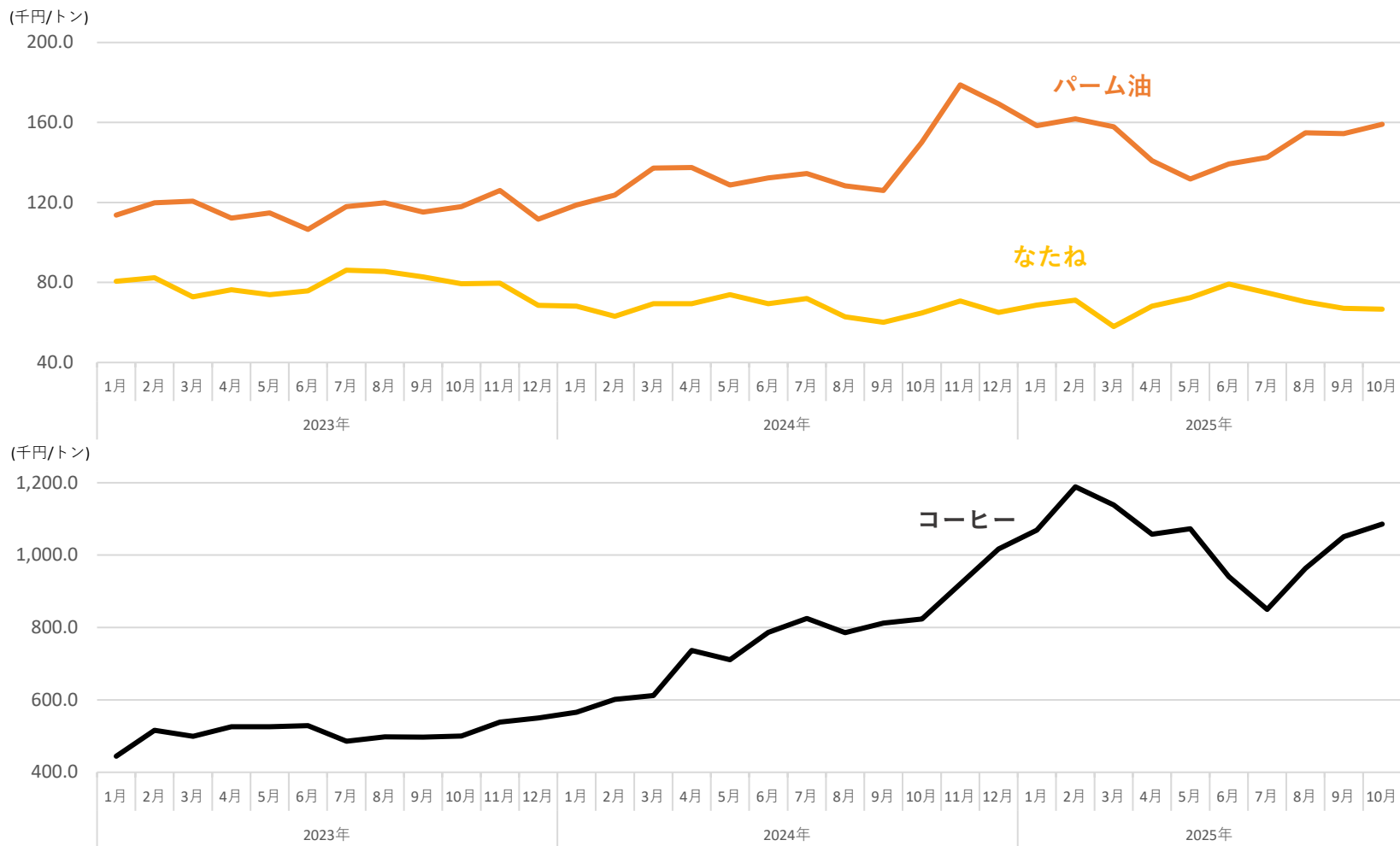
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月以降上昇したが、その後マレーシアとインドネシアのパーム油生産量増加や在庫の増加見通し等により下落。直近では、インドからの堅調な祝祭需要等により上昇傾向にある。
- なたねについては、概ね安定している。
- コーヒーについては、ブラジルにおける天候不順による収穫量減少等により、2024年以降上昇していた。直近ではブラジルの生産増加見込み等により下降傾向であったが、米国の関税政策をめぐる不確実性等により、上昇に転じている。



2025年11月20日現在
□内は2023年1月以降
の最高値。

パーム油
159.0千円/トン

178.8千円/トン
(2024.11)

なたね
66.7千円/トン

86.2千円/トン
(2023.7)

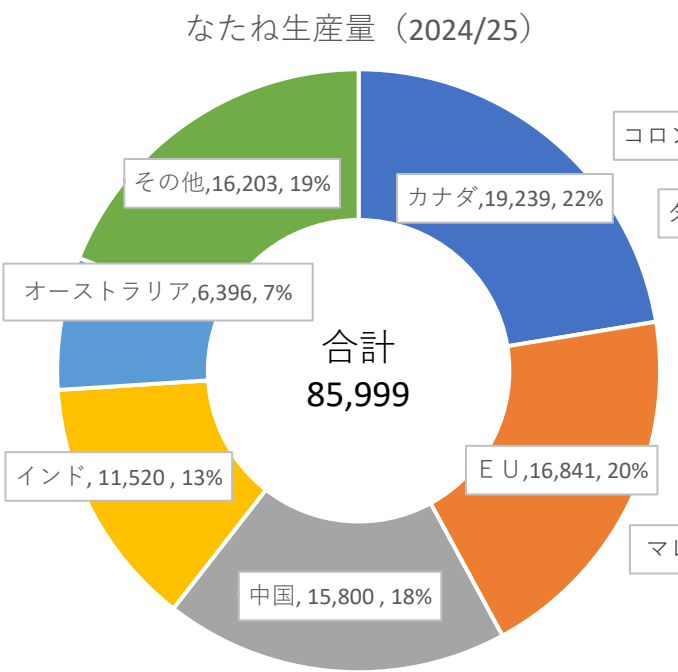
コーヒー
1085.8千円/トン

1188.8千円/トン
(2025.2)

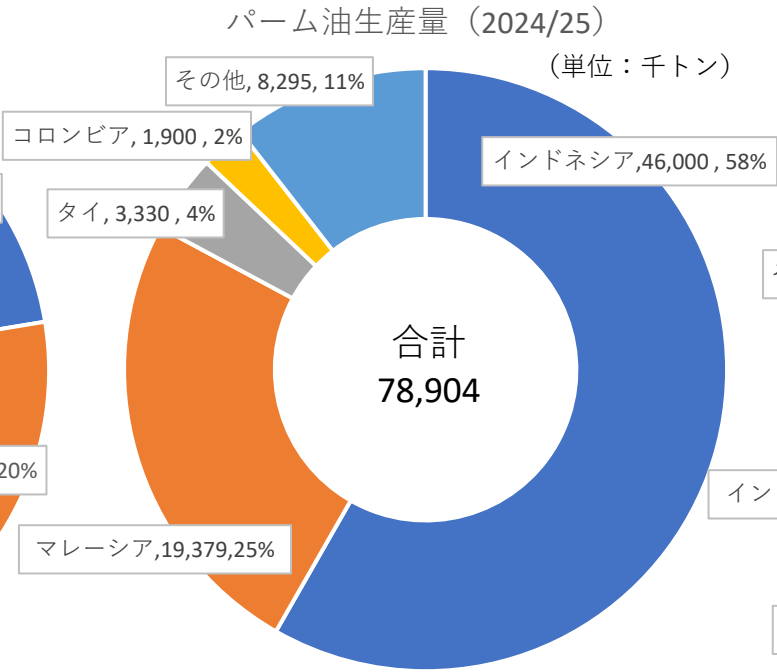
※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

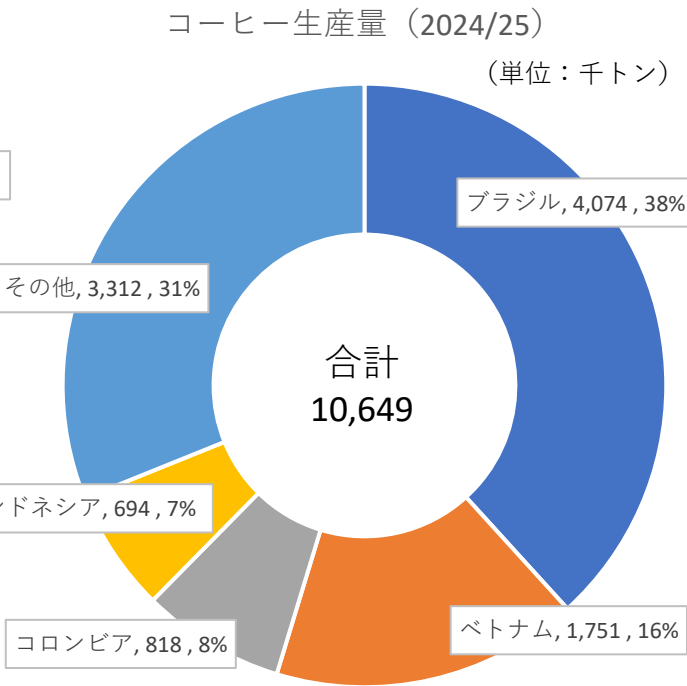
○主要生産国の生産状況（単位：千トン）



※米国農務省（PS&D）
2025年11月時点



※米国農務省（PS&D）
2025年11月時点



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2025年7月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2024年））

なたね	輸入量	割合
オーストラリア	1,141	54.2%
カナダ	963	45.8%
その他	0	0.0%
合計	2,104	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	561	85.6%
インドネシア	94	14.4%
その他	0	0.0%
合計	655	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	130	36.1%
ベトナム	97	26.9%
コロンビア	36	10.0%
その他	97	26.9%
合計	360	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0	68.2	72.4	79.2	74.9	70.4	67.0	66.7		
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4	117.6	106.3	109.4	94.6	93.9	95.2	99.6		
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5	98.3	98.0	114.2	104.2	112.1	111.4	103.0		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8	140.9	131.7	139.2	142.5	154.8	154.5	159.0		
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6	89.2	93.5	105.7	102.3	108.7	99.8	102.9		
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0	102.5	102.3	105.3	106.0	120.7	122.6	106.0		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8	1138.7	1057.4	1072.9	940.6	850.2	963.0	1050.9	1085.8		
前月比	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2	95.8	92.9	101.5	87.7	90.4	113.3	109.1	103.3		
前年同月比	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8	186.2	143.5	150.9	119.6	103.1	122.6	129.4	131.9		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料 5 食品小売価格の動向

○ 令和7年10月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は119.2～163.5（前年同月比は0.7%～15.9%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）
（令和7年5月～令和7年10月）

【参考】
食品価格動向調査（農林水産省）
（令和7年5月～令和7年11月）

	R4	R5	R6	R7						
品目	年平均	年平均	年平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	110.2	118.7	122.0	127.4	127.8	127.4	127.0	126.5	126.3	3.8%
即席めん	107.6	119.7	122.4	121.0	119.3	120.5	120.6	119.1	119.2	0.7%
豆腐	105.3	114.6	118.2	120.6	121.8	121.8	122.0	121.9	122.7	2.8%
食用油 (キャノーラ油)	144.4	160.2	148.6	149.3	149.8	150.0	144.7	147.0	150.3	2.3%
みそ	101.2	108.1	113.6	118.0	117.7	118.3	118.1	118.7	125.4	8.8%
マヨネーズ	125.6	149.5	153.1	153.7	151.8	153.0	152.3	159.0	163.5	7.0%
チーズ	107.5	131.1	133.0	138.6	137.0	139.9	145.1	144.5	144.3	7.2%
バター	99.2	108.6	119.7	125.9	126.6	133.5	137.6	138.4	139.2	15.9%
生鮮食品を除く食料	104.1	112.6	116.9	124.6	125.4	126.0	126.4	126.7	127.7	7.2%

	R4	R5	R6	R7									
品目	年平均	年平均	年平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	107.8	114.5	117.9	124.0	124.2	125.3	124.7	124.9	123.8	124.5	0.6%	6.0%	
即席めん	105.6	117.5	118.8	117.3	116.1	118.5	119.1	116.1	117.9	117.3	-0.5%	-1.0%	
豆腐	103.7	113.0	116.4	119.8	119.8	118.5	119.3	118.9	120.2	120.2	0.0%	0.8%	
食用油 (キャノーラ油)	140.7	159.4	145.8	140.3	141.6	141.3	142.2	142.9	143.8	144.1	0.2%	0.8%	
みそ	100.1	105.9	109.5	110.4	111.7	113.6	113.1	114.2	123.8	126.7	2.3%	14.6%	
マヨネーズ	117.7	139.8	141.2	140.3	139.6	139.6	139.9	145.4	149.2	149.2	0.0%	7.6%	
チーズ	105.7	126.5	127.0	134.7	130.3	134.2	138.2	139.2	138.7	136.2	-1.8%	6.2%	
バター	99.1	108.0	119.3	127.1	127.3	136.2	138.5	139.4	139.8	140.1	0.2%	17.0%	

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

注1:令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料6 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html）で公表

○2025年12月号（11月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

◆牛肉

（EU）枝肉価格の記録的な高値が継続

（豪州）牛肉輸出量、主要輸出先がけん引し四半期ベースで過去最高

◆豚肉

（米国）25年8月の豚肉生産量は前年同月比7.6%減、一部州でPRRSの発生続く

（カナダ）25年の豚肉生産量、と畜頭数の増加から前年比で2.4%増の見込み

（中国）豚肉供給量の増加から豚肉価格は下落傾向で推移、豚肉輸入量はわずかに減少

◆牛乳・乳製品

（EU）バター価格が引き続き下落も、生乳取引価格は高水準で推移

（豪州）生乳生産量は減少、輸出量はバターとバターオイルを除き増加

（NZ）25/26年度の生乳生産量は前年度を上回って推移

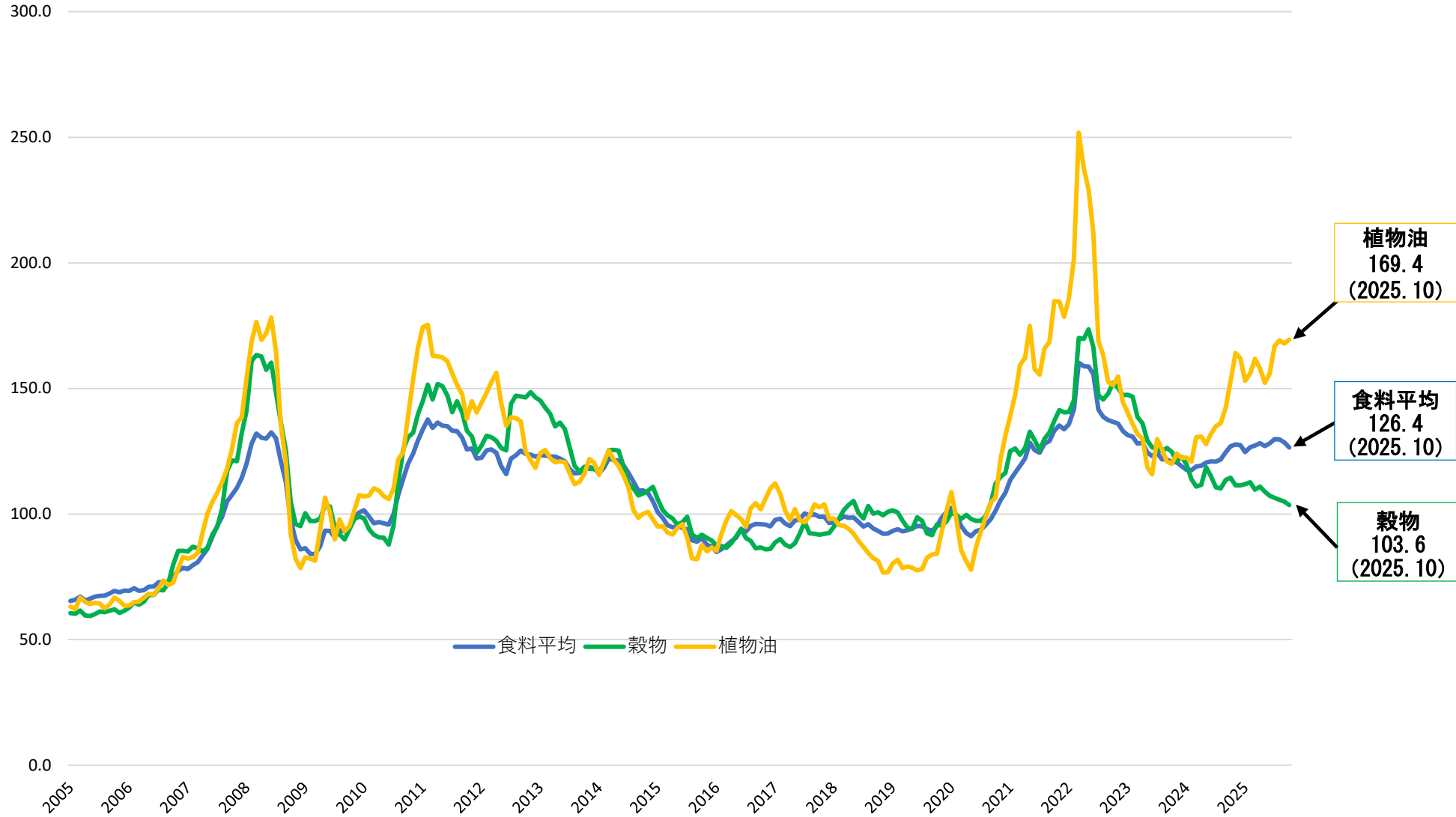
（アルゼンチン）25年1～9月の生乳生産量は前年同期比増も、生産者乳価は緩やかに上昇

◆飼料穀物

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2025.10)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

マレーシアの食事情②: マレーシアの農業と食料安全保障

1. はじめに

マレーシアは、東南アジアの中でも工業化が進んだ中所得国であり、サービス業や製造業がGDPの大部分を占めています。一方で、パームオイルやゴム、木材などの一次製品の輸出も依然として重要であり、農林水産業は外貨獲得と雇用の両面で一定の役割を果たしています。しかし、国民の食卓を支えるコメや肉、野菜などについては国内生産だけでは需要を賄いきれず、輸入への依存が続いており、食料安全保障はマレーシア政府にとって重要な柱の一つとなっています。



写真1: マレーシアの地図

2. マレーシアの農業

農林水産業では、パームオイル、ゴム、木材等の生産と輸出が盛んではあるものの、工業化の進展や石油・ガス資源の開発など非農林水産分野の発展により、GDPに占める農業分野の割合は約6%程度と、かつてに比べて低下しています。また、農林水産業従事者数は154万人(2022年)、全就業人口(1,539万人)の約10%を占めています。

国土面積約3,300万haのうち、約5割超の1,800万haは森林で占められており、ボルネオ島(サバ州・サラワク州)を中心に豊かな熱帯林が広がっています。耕地面積は約780万haで、そのうちの約7割に当たる560万haがパーム油(アブラヤシ)プランテーションです。パームオイルはインドネシアに次いで世界第2位の生産量・輸出量を誇っており、主要生産地はボルネオ島にあるサバ州およびサラワク州です。

【今月のコラム】

1960年代以降に急速に拡大したパームプランテーションは急速に拡大し、外貨獲得や農村所得向上に大きく貢献してきました。一方で、その過程で天然林の減少や生物多様性の損失といったトレードオフも生じています。マレーシア政府は、1992年のリオサミットで「国土の少なくとも50%を森林または樹木被覆として維持する」ことを表明しており、現在もこの目標を維持しています。土地利用の制約の中で、いかに農業生産を拡大していくかは大きな課題となっています。

3. 食料自給率

パームやゴム、木材等の輸出により、農林水産業の貿易収支は輸出額が輸入額を上回っていますが、国民の食を支えるコメや肉、野菜は輸入に頼っている面もあります。特に、国民の大部分の主食であるコメの自給率は2023年時点で56%に過ぎません。2016年には70%に達しましたが、その後徐々に低下しており、さらに2023年には算出方法をFAO基準に合わせて修正したこともあり、数値が一段と下がりました。主要な輸入元はベトナム、パキスタン、インド、タイなどです。また、高温多湿の気候や、農地の多くがプランテーションに充てられているため大規模化が進みにくい等の構造的な要因から、野菜や牛肉、乳製品も十分な量を国産で賄えていません。

National Agrofood Policy 2021–203 (NAP2.0)では、各品目に対して2030年における食料自給率目標が設定されており、この目標値は、本年発表された第13次マレーシア計画(13MP)でも引き継がれています。しかし、2023年の実績値をみると、コメは56%、野菜は45%、牛肉は16%、生乳は67%と、目標値との差は大きい状況です。

Major Food Commodities	2019	2025	2030
Rice	63.0%	75.0%	80.0%
Fruits	78.2%	80.0%	83.0%
Vegetables	44.6%	70.0%	79.0%
Food Fish	93.0%	95.0%	98.0%
Beef	22.3%	50.0%	50.0%
Poultry Meet	104.1%	120.0%	140.0%
Poultry Egg	119.1%	114.0%	123.0%
Fresh Milk	63.0%	100.0%	100.0%

表1 マレーシア政府が2021年に発表した Self Sufficient Level(SSL)の2025年、2030年目標値

【今月のコラム】

4. マレーシアの食料安全保障政策

(1) コメ

コメは、半島北部に位置するケダ州が一大産地となっています。特に、ケダ州とペルリス州にまたがる Muda 地区は国内最大の水田集積地帯で、水源となるダムや灌漑・排水施設といった水管理インフラが整備されており、国全体コメ生産量の約4割を供給しています。政府は、これら地区を中心に、灌漑施設の近代化、品種改良、スマート農業技術の導入等を通じて生産性向上を図っています。また、Muda 地区をモデル地区として、2年5期作栽培体系の確立・普及を目標に掲げ、既存の稲作地の生産性の向上を進めています。

さらに、コメ需給安定と価格の安定を図るため、政府が設立した BERNAS 社がコメの流通・在庫管理および輸入を一元的に担っており、国外からのコメの輸入は同社のみが許可されています。

(2) 畜産

畜産分野では、鶏肉・卵の自給率はすでに高く、輸出余力の拡大も視野に入れた生産性の向上が目標とされています。しかし、2022 年頃には鶏肉の供給不足と価格高騰が発生し、鶏肉・鶏卵への補助金導入や、鶏肉の輸出禁止などの措置が取られました(輸出禁止は 2023 年に解除)。

一方、牛肉(水牛含む)については自給率が 2023 年で 16%と低い状況です。これは、高温多湿の気候が牛の育成に適さないこと、飼料の海外依存、土地制約や小規模投資の構造、さらにインドからの安価な水牛肉の流通が国内市場を形成していることなどが要因とされています。これに対し、政府は繁殖プログラムや放牧地の整備などを進め、国産牛肉の増産を目指していますが、対策は限定的です。

牛乳・乳製品については、国内に大手メーカーが存在することもあり、政府は 2020 年に National Dairy Industry Development Programme を策定し、酪農バレーの構築等の取組を推進しています。

また、豚肉については、ムスリムは摂取しないものの、マレーシアの人口に占めるイスラム教徒の割合は 65%であり、国内では一定の豚肉需要があります。豚肉の自給率は、以前は 90%以上でしたが、2022 年以降のアフリカ豚熱が発生・蔓延により、2023 年には約 70%と急減しました。政府は、飼育施設の高度化などの対策を進めていますが、課題は依然残っています。

【今月のコラム】

(3)野菜・果実

野菜については、クアラルンプール近郊のキャメロンハイランドなど、都市近郊での生産が中心となっていますが、多くを中国等からの輸入に頼っている状況です。これに対し、政府は、いくつかの野菜について農家への助成や農地開発を進めるプロジェクトを打ち出しています。

果実については、ドリアンやマンゴー、パパイヤなどの熱帯果実では高い自給率を達成しています。一方、オレンジ等の温帯果実については輸入依存度が高い状況です。今年7月から、政府は、輸入果実に対して6%の売り上げサービス税(SST: Sales and Service Tax)の課税を開始しました。

5. おわりに

マレーシアは、パームオイルやゴム、木材等の一次産品で世界市場において存在感を示す一方で、主食であるコメをはじめ、野菜や牛肉、乳製品等の自給率には課題を抱えています。そのため、食料自給率の向上を重点目標として各種政策を展開しており、これらの取組は、日本とマレーシアとの関わりや日本の食料安全保障政策を考える上でも重要な示唆を与えるものです。

文責: 古林 五月 (在マレーシア日本国大使館 一等書記官)

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います。

(品目別需給編)

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2025/26 年度

「前月比」は 2025 年 9 月予測との比。

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・英国等で下方修正されたものの、カザフスタン、アルゼンチン、EU、米国、ロシア、豪州等で上方修正され、9月から上方修正された。史上最高の見込み。

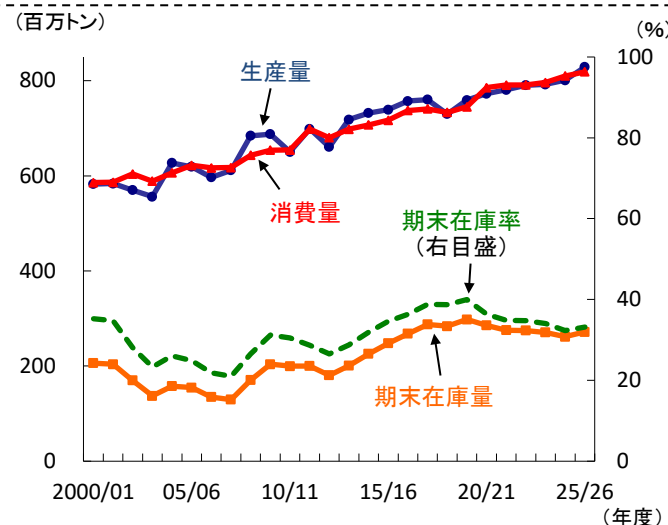
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・英国等で下方修正されたものの、ロシア、EU、カザフスタン等で上方修正され、9月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ロシア等で下方修正されたものの、豪州、アルゼンチン、カザフスタン等で上方修正され、9月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省にて作成

◎世界の小麦需給

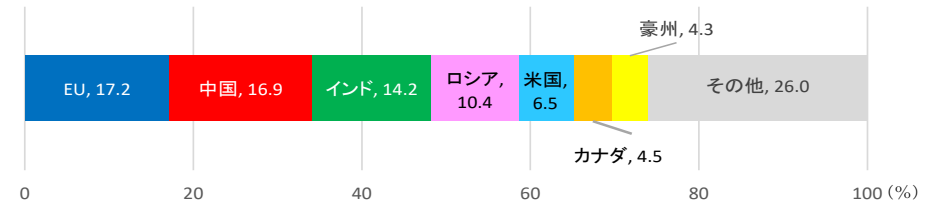
(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	792.3	800.8	828.9	12.7	3.5
消費量	796.3	810.1	818.9	4.3	1.1
うち飼料用	158.5	157.2	161.5	3.3	2.7
輸出量	222.2	209.7	217.2	2.5	3.6
輸入量	223.2	200.2	212.9	2.4	6.3
期末在庫量	270.7	261.4	271.4	7.4	3.8
期末在庫率	34.0%	32.3%	33.1%	0.7	0.9

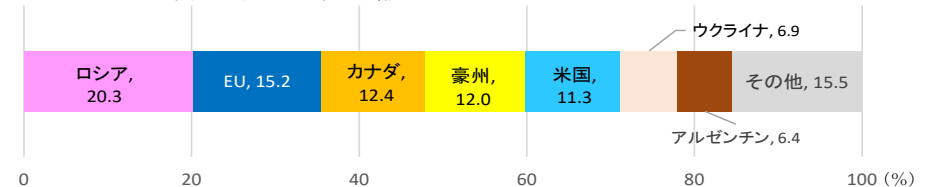
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(14 November 2025)

注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

○ 2025/26年度 世界の小麦の生産量(828.9百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸出量(217.2百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸入量(212.9百万トン)



(2)国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、収穫面積及び単収の引上げを受け9月予測から 1.6 百万トン上方修正され、収穫面積は減少するものの、単収の増加を受け前年度から 0.3%増、過去5年平均 (48.4 百万トン)から 11.5%増の 54.0 百万トンとなる見込み(図)。

同「Crop Production」(2025.11.14)によれば、2025/26 年度の実産量は、前年度から 3.6%減の 1,507 万ヘクタールとなる見込み。種類別には、冬小麦が前年度から 2.7%減の 1,032 万ヘクタール、デュラム小麦を除く春小麦も同 7.5%減の 389 万ヘクタールとなる一方、デュラム小麦が同 4.3%増の 86 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の実産量は前年度から 0.3%増の 5,401 万トンとなる見込み。種類別には、デュラム小麦を除く春小麦が前年度から 8.7%減の 1,352 万トンとなる一方、冬小麦が同 3.5%増の 3,814 万トン、デュラム小麦が同 7.7%増の 235 万トンとなる見込み。冬小麦は、前年度と比べ降雨が多く、単収が増加した。一方、春小麦は、乾燥により作柄が悪化した。

同「Crop Progress」(2025.8.25、9.22 及び 11.17)によれば、2025/26 年度の実産量の収穫進捗率は、冬小麦が8月 24 日時点で 98%、春小麦が9月 21 日時点で 96%と、それぞれ収穫はほぼ終了。2026/27 年度の冬小麦の作付進捗率は、11 月 16 日現在、92%と前年同期 94%及び過去5年平均 95%を若干下回っている。また、作柄評価は、「良～優良」の割合が 45%と、前年同期 49%を若干下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、9月予測からの変更はなく、前年度から 8.9%増、過去5年平均(22.2 百万トン)から 10.2%増の 24.5 百万トンと、5年ぶりの高水準となる見込み(図)。同「Wheat Outlook」(2025.9.16)によれば、世界全体では米国の輸出量は依然として第5位と予想されている。ロシア、EU、カナダ及び豪州では生産量の増加が見込まれており、主要な市場において米国産と競合するとみられる。

同「Global Agricultural Trade System」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年6～7月の輸出量は、前年同期 (339.7 万トン)に比べ 18.5%増の 402.4 万トン。輸出先国別には、メキシコ 67.0 万トン(16.7%)、フィリピン 46.2 万トン(11.5%)、ナイジェリア 45.1 万トン(11.2%)の順となっている(表)。

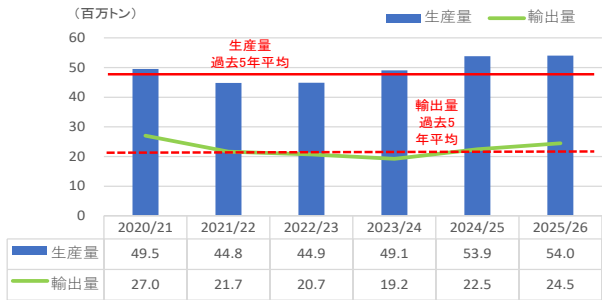
USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げを受け9月予測から 1.6 百万トン上方修正され、前年度から 5.9%増の 24.5 百万トンとなる見込み。

小麦－米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年6月～26年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.1	53.9	54.0	1.6	0.3
消 費 量	30.2	31.2	31.4	-	0.5
うち飼料用	2.3	3.2	3.3	-	3.2
輸 出 量	19.2	22.5	24.5	-	8.9
輸 入 量	3.8	4.1	3.3	-	▲ 19.3
期末在庫量	19.0	23.2	24.5	1.6	5.9
期末在庫率	38.4%	43.1%	43.9%	2.8	0.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.01	15.63	15.07	0.27	▲ 3.6
単収(t/ha)	3.27	3.45	3.58	0.04	3.8

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」(14 November 2025)
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

図 米国の小麦生産量及び輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

表 米国の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年6月～2025年5月)			2024/25年度 (2024年6月～7月)			2025/26年度 (2025年6月～7月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	400.8	18.3	メキシコ	65.4	19.2	メキシコ	67.0	16.7
フィリピン	245.0	11.2	韓国	39.8	11.7	フィリピン	46.2	11.5
韓国	238.7	10.9	フィリピン	32.6	9.6	ナイジェリア	45.1	11.2
日本	215.1	9.8	日本	28.8	8.5	日本	33.2	8.3
台湾	103.5	4.7	台湾	15.2	4.5	韓国	19.7	4.9
タイ	93.2	4.2	インドネシア	15.1	4.4	台湾	18.3	4.6
その他	897.2	40.9	その他	142.8	42.0	その他	173.0	43.0
計	2,193.5	100.0	計	339.7	100.0	計	402.4	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

< カナダ > 2025/26 年度の輸出量は前年度から 5.2%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2025.11.24)によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.9%増、過去5年平均(32.4 百万トン)から 13.0%増の 36.6 百万トンとなり史上2番目の生産量となる見込み。種類別には、普通小麦は前年度(29.6 百万トン)から 1.8%増、過去5年平均(27.2 百万トン)から 10.6%増の 30.1 百万トンとなり史上2番目の生産量となる見込み。デュラム小麦も前年度(6.4 百万トン)から 2.4%増、過去5年平均(5.2 百万トン)から 25.6%増の 6.5 百万トンとなる見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引上げを受け9月予測から 1.0 百万トン上方修正され、収穫面積及び単収が増加することを受け前年度から 2.9%増、過去5年平均から 14.1%増の 37.0 百万トンとなる見込み。同「World Agricultural Production」(2025.9.12)によれば、2025 年の夏、プレーリー3州は単収向上となる降雨に恵まれ、大部分の地域で作物の生長が促進された。

カナダ穀物委員会(CGC)「Harvest and Export Quality (HEQ)Reports」(2025.11.12) によれば、2025/26 年度春小麦の品質は、No.1 が 73.2%、No.2 が 18.1%、No.3 が 3.4%、飼料向け 5.2%と、前年度を上回る品質となっている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、堅調な輸出を受け前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、史上最高の前年度から 5.2%減となるものの、27.7 百万トンと史上2番目の輸出量となる見込み。種類別には、普通小麦が前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、前年度から 3.8%減の 22.5 百万トン。デュラム小麦も前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、同 10.7%減の 5.2 百万トン。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、9月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度から 7.8%減となるものの、過去5年平均(24.4 百万トン)から 10.7%増の 27.0 百万トンとなる見込み。

CGC によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～9月の輸出量は、前年同期(332.6 万トン)に比べ 6.8%増の 355.4 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期(294.1 万トン)に比べ 7.6%増の 316.4 万トンで、輸出先国別には、バングラデシュ 42.3 万トン(13.4%)、日本 34.6 万トン(10.9%)、スペイン 30.2 万トン(9.6%)の順。デュラム小麦は前年同期(38.5 万トン)に比べ 1.2%増の 39.0 万トンで、輸出先国別には、モロッコ 6.2 万トン(15.9%)、イタリア 5.2 万トン(13.3%)、スペイン 4.5 万トン(11.5%)の順(表)。AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け前月予測から 0.1 百万トン下方修正されるものの、前年度から 24.0%増の 5.1 百万トンとなる見込み。

小麦－カナダ(春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年8月～26年7月)			
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)	
生 産 量	33.4	35.9 (35.9)	37.0 (36.6)	1.0 (-)	2.9 (1.9)	
消 費 量	9.0	8.4 (8.0)	9.4 (8.0)	- (▲0.2)	10.9 (0.9)	
うち飼料用	3.8	3.1 (3.3)	4.0 (3.5)	- (▲0.2)	27.8 (5.3)	
輸 出 量	25.4	29.3 (29.2)	27.0 (27.7)	- (0.3)	▲7.8 (▲5.2)	
輸 入 量	0.6	0.6 (0.1)	0.6 (0.1)	- (-)	▲1.6 (23.5)	
期末在庫量	5.3	4.1 (4.1)	5.4 (5.1)	1.0 (▲0.1)	30.4 (24.0)	
期末在庫率	15.3%	10.9% (11.1%)	14.7% (14.3%)	2.8 (▲0.3)	3.8 (3.2)	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.71	10.65 (10.65)	10.70 (10.66)	- (-)	0.5 (0.1)	
単収(t/ha)	3.12	3.37 (3.37)	3.46 (3.44)	0.09 (-)	2.7 (2.1)	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、PS&D(14 November 2025)

AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(24 November 2025) ※()書き。

注:USDAIにおける「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

○普通小麦

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～9月)			2025/26年度 (2025年8月～9月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	243.2	10.3	インドネシア	37.3	12.7	バングラデシュ	42.3	13.4
中国	206.1	8.7	日本	35.4	12.0	日本	34.6	10.9
日本	191.0	8.1	ナイジェリア	24.6	8.4	スペイン	30.2	9.6
ペルー	164.2	6.9	ペルー	21.9	7.5	インドネシア	26.4	8.3
コロンビア	143.1	6.0	コロンビア	17.5	6.0	中国	17.6	5.6
その他	1,419.1	60.0	その他	157.5	53.5	その他	165.3	52.2
計	2,366.5	100.0	計	294.1	100.0	計	316.4	100.0

○デュラム小麦

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～9月)			2025/26年度 (2025年8月～9月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
アルジェリア	156.8	27.2	モロッコ	14.3	37.0	モロッコ	6.2	15.9
モロッコ	124.2	21.5	米国	7.7	20.1	イタリア	5.2	13.3
イタリア	83.8	14.5	日本	3.6	9.3	スペイン	4.5	11.5
米国	51.0	8.8	アラブ首長国連邦	3.6	9.2	米国	3.8	9.7
日本	22.7	3.9	イタリア	2.8	7.1	日本	3.4	8.8
その他	138.2	24.0	その他	6.6	17.2	その他	15.9	40.7
計	576.7	100.0	計	38.5	100.0	計	39.0	100.0

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.5%増加する見込み(USDA)

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、単収の引上げを受け9月予測から 1.5 百万トン上方修正され、前年度から 5.5%増、過去5年平均(33.8 百万トン)から 6.7%増の 36.0 百万トンとなり、史上3番目の生産量となる見込み。同「World Agricultural Production」(2025.9.12)によれば、2025/26 年度シーズン当初は、非常に乾燥した状態から始まり、特に豪州の小麦作付面積の約 27%を占めるウエスタンオーストラリア州(WA 州)で顕著であった。6月上旬に恵みの降雨があり、7月～9月上旬にも適時の降雨があり、生長が促進された。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2025.9.2)によれば、2025/26 年度の実生産量は、収穫面積及び単収の引上げを受け前回予測(6月)から 3.2 百万トン上方修正され、前年度から収穫面積が減少することを受け前年度(34.1 百万トン)から 1.0%減となるものの、過去5年平均(33.8 百万トン)と同水準の 33.8 百万トンとなり、史上4番目の生産量となる見込み。州別には、WA 州は 1.7 百万トン上方修正の 12.7 百万トン(前年度から 0.4%増)、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)は 1.0 百万トン上方修正の 10.7 百万トン(同 17.1%減)、サウスオーストラリア州(SA 州)はわずかに上方修正され 4.2 百万トン(同 53.1%増)、ビクトリア州(VIC 州)は 0.2 百万トン上方修正の 4.0 百万トン(同 14.3%増)、クイーンズランド州(QLD 州)は 0.2 百万トン上方修正の 2.1 百万トン(同 8.1%減)と、全土にわたり適度な降雨により前回予測から生産見通しが改善した(図)。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、9月予測から 1.0 百万トン上方修正され、生産量が増加することを受け前年度から 9.8%増、過去5年平均(25.3 百万トン)から 2.7%増の 26.0 百万トンとなる見込み。

ABARES によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.5 百万トン上方修正され、期首在庫量が増加することを受け前年度から 9.6%増となるものの、過去5年平均(25.0 百万トン)から 2.1%減の 24.5 百万トンとなる見込み。

同「Trade dashboard」によれば、2024/25 年度の輸出量は、前年度(1,980.8 万トン)に比べ 19.4%増の 2,364.8 万トン。輸出先国別には、インドネシア 449.8 万トン(19.0%)、フィリピン 352.9 万トン(14.9%)、タイ 171.0 万トン(7.2%)の順で、中国は生産量の増加により 105.7 万トン(4.5%)と大きく輸入量を減少させている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け9月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度から 25.3%増の 5.6 百万トンとなる見込み。ABARES によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 4.6%増の 5.9 百万トンとなる見込み。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

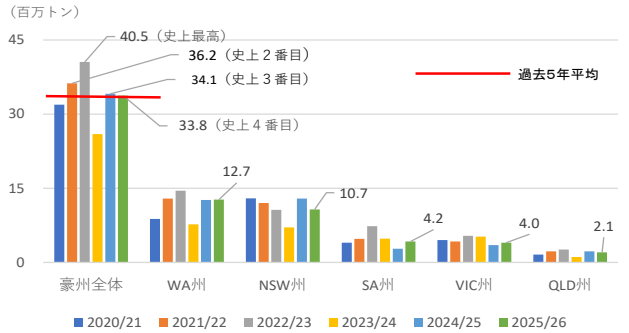
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年10月～26年9月)		
			予測値	前月(前回)予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	26.0	34.1 (34.1)	36.0 (33.8)	1.5 (3.2)	5.5 (▲1.0)
消 費 量	7.8	9.1 (9.0)	9.1 (8.9)	0.4 (0.1)	- (▲0.7)
うち飼料用	4.3	5.6	5.5	0.4	▲1.8
輸 出 量	19.8	23.7 (22.4)	26.0 (24.5)	1.0 (1.5)	9.8 (9.6)
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	-	4.5
期末在庫量	2.9	4.5 (5.7)	5.6 (5.9)	0.3 (1.0)	25.3 (4.6)
期末在庫率	10.5%	13.6% (18.2%)	15.9% (17.8%)	0.3 (2.3)	2.3 (▲0.3)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.37	13.06 (13.06)	12.70 (12.71)	- (0.1)	▲2.8 (▲2.7)
単収(t/ha)	2.10	2.61 (2.61)	2.84 (2.66)	0.1 (0.2)	8.8 (1.7)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、IPS&D(14 November 2025)

ABARES「Australian Crop Report」(2 September 2025) ※()書き。

注:USDAにおける「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

図 豪州の小麦の州別生産量の推移



資料:ABARES「Australian Crop Report」(2025.9.2)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	375.6	19.0	インドネシア	449.8	19.0
インドネシア	323.5	16.3	フィリピン	352.9	14.9
フィリピン	233.7	11.8	タイ	171.0	7.2
イエメン	152.2	7.7	ベトナム	157.6	6.7
韓国	123.5	6.2	韓国	146.5	6.2
日本	120.6	6.1	イエメン	137.6	5.8
その他	651.8	32.9	その他	949.4	40.1
計	1,980.8	100.0	計	2,364.8	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 19.8%増加する見込み(EC)

【生育・生産状況】欧州委員会(EC)「EU Cereals Balance Sheets」(2025.10.30)によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引上げを受け前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、生産量が回復することを受け、主産国で生育期間を通じた降雨過多等により減産となった前年度から 19.8%増、過去5年平均(129.3 百万トン)から 9.5%増の 141.6 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦がポーランド、チェコ等の生産量引上げにより前月予測から上方修正され、フランス、ドイツ、ルーマニア等で生産量が回復することを受け前年度から 20.2%増、過去5年平均(121.8 百万トン)から 9.5%増の 133.4 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、スペイン等の生産量引下げにより前月予測からわずかに下方修正されるものの、前年度から 13.3%増、過去5年平均(7.5 百万トン)から 9.8%増の 8.3 百万トンとなる見込み(図)。EC「JRC MARS Bulletin – Crop monitoring in Europe」(2025.10.27)によれば、2025/26 年度の冬作物は、フランスからポーランド、スカンジナビアからイタリアに至る地域では、好天と良好な圃場条件により適期に作付けられ、良好な出芽と生育になっている。一方、ブルガリアとルーマニアの一部では過剰な降雨により、ポルトガル、スペイン、クロアチア東部及びハンガリーの一部では乾燥により作付けが遅れている。

【貿易情報・その他】EC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量が回復することを受け前年度から 21.8%増の 31.9 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」(2025.10.20)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～8月の輸出量は、前年同期(568.9 万トン)に比べ 5.7%減の 536.2 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 13.1%減の 485.4 万トンとなる一方、デュラム小麦は同 390.6%増の 50.8 万トン(表)。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、ウクライナからの輸入が減少すると見込まれることを受け前年度から 43.2%減の 5.7 百万トンとなる見込み。EU は、ウクライナ産品の輸入に関し、2022 年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきたが、本年6月5日に関税割当制度等の適用を再開した。再開によりウクライナからの小麦の輸入は減少する見込み(詳細については、<ウクライナ>【貿易情報・その他】関税割当制度等の適用再開を参照。)。同「EU trade for cereals」(2025.10.20)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～8月の輸入量は、ウクライナからの輸入が大きく減少したこと等により前年同期(148.2 万トン)に比べ 12.6%減の 129.5 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 19.7%減の 101.9 万トンとなる一方、デュラム小麦は同 30.2%増の 27.6 万トン(表)。

2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度から 41.3%増の 11.7 百万トンとなる見込み。

小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	135.4	122.2 (118.2)	142.3 (141.6)	2.2 (0.7)	16.5 (19.8)
消 費 量	110.5	109.0 (111.2)	113.5 (112.0)	0.5 (0.004)	4.1 (0.7)
うち飼料用	46.5	45.0 (46.2)	49.0 (46.6)	0.5 (-)	8.9 (0.9)
輸 出 量	38.0	27.9 (26.2)	33.0 (31.9)	0.5 (-)	18.4 (21.8)
輸 入 量	12.7	10.7 (10.0)	5.5 (5.7)	- (-)	▲48.4 (▲43.2)
期末在庫量	15.8	11.7 (8.3)	13.0 (11.7)	1.2 (0.1)	11.1 (41.3)
期末在庫率	10.6%	8.6% (6.0%)	8.9% (8.1%)	0.8 (0.1)	0.3 (2.1)

(参考)

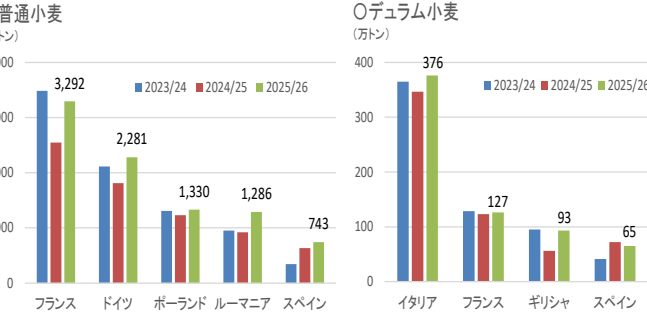
収穫面積(百万ha)	24.32	22.74 (22.48)	23.89 (23.56)	0.04 (▲0.03)	5.0 (4.8)
単収(t/ha)	5.57	5.37 (5.26)	5.96 (6.01)	0.09 (0.04)	11.0 (14.3)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「PS&D」(14 November 2025)

EC「EU Cereals Balance Sheets」(30 October 2025) ※「」書き。

注:USDAにおける「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

図 主要小麦生産国の小麦生産量の推移



資料:EC「EU cereals production, area and yield」(2025.10.30)をもとに農林水産省で作成

表 EUの小麦の輸出量及び輸入量

〇輸出量			〇輸入量								
2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2025/26年度 (2025年7月～8月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2025/26年度 (2025年7月～8月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
モロッコ	343.1	13.2	モロッコ	83.1	15.5	ウクライナ	449.8	45.3	カナダ	44.0	34.0
アルジェリア	335.7	12.9	アルジェリア	72.5	13.5	カナダ	242.6	24.4	ウクライナ	33.6	25.9
ナイジェリア	280.4	10.8	サウジアラビア	42.6	7.9	モルドバ	62.5	6.3	セルビア	12.3	9.5
英国	185.4	7.1	エジプト	35.0	6.5	米国	57.9	5.8	モルドバ	10.6	8.2
エジプト	174.8	6.7	ナイジェリア	27.6	5.2	セルビア	56.7	5.7	英国	9.4	7.2
その他	1,277.3	49.2	その他	275.3	51.3	その他	122.8	12.4	その他	19.5	15.1
合計	2,596.7	100.0	合計	536.2	100.0	合計	992.2	100.0	合計	129.5	100.0

資料:EC「EU trade for cereals」(2025.10.20)をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 6.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、単収の引上げを受け9月予測から 1.5 百万トン上方修正され、霜害と高温乾燥により生産量が減少した前年度から単収が増加することを受け前年度から 6.0%増、過去5年平均(85.1 百万トン)から 1.6%増の 86.5 百万トンとなる見込み(図)。

現地情報会社によれば、11 月 7 日現在、2025/26 年度の実小麦の収穫進捗率は 98%とほぼ終了しており、収穫量は前年度を上回る 9,432 万トンとなっている。また、冬小麦を含む 2026/27 年度の秋播き作物の作付進捗率は、94%と終盤を迎えている。

報道によれば、ロシア南部では 2025/26 年度の実小麦の実産量が減少しており、乾燥の影響もあるものの、生産に対する投資の減少が大きく影響しているとみられる。同地域では、ここ数年の天候不順のほか、高金利や資材・機械のコストの上昇による収益性の低下を背景に、中小農家の廃業が増加している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、低調な輸出を受け9月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、前年度から 2.3%増、過去5年平均(44.1 百万トン)と同水準の 44.0 百万トンとなり、史上3番目の輸出量となる見込み(図)。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～10 月の輸出量は、前年同期(2,034.5 万トン)に比べ 20.4%減の 1,620.3 万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト 334.2 万トン(20.6%)、トルコ 217.3 万トン(13.4%)、バングラデシュ 96.9 万トン(6.0%)の順(表)。10 月の輸出量は、547.0 万トンと、低調だった9月までの輸出(7月 173.7 万トン、8月 439.4 万トン、9月 460.2 万トン)に比べ、比較的好調であり前年度並みとなった。エジプトやトルコの需要が回復したことや、輸出業者の利益率が上がったことが要因とみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ及び輸出量の引下げを受け9月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 15.1%増の 12.2 百万トンとなる見込み。

写真 クラスノダール地方の冬小麦(2025.11.6 撮影)



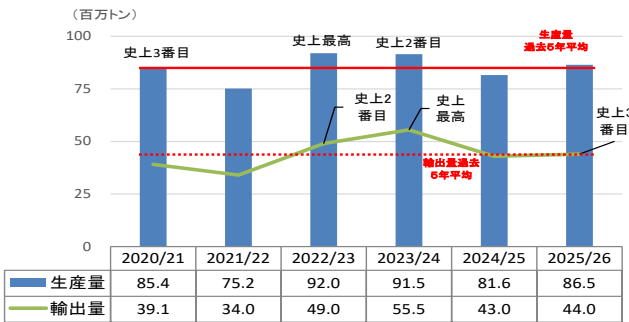
黒海沿岸
のクラスノ
ダール地
方の3葉
期を迎え
た冬小
麦。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	91.5	81.6	86.5 (86.5)	1.5	6.0
消 費 量	39.0	40.0	41.2 (40.5)	1.5	3.0
うち飼料用	16.0	17.0	18.0 (17.0)	1.5	5.9
輸 出 量	55.5	43.0	44.0 (43.6)	▲ 1.0	2.3
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.5)	-	-
期末在庫量	11.7	10.6	12.2 (12.2)	1.0	15.1
期末在庫率	12.4%	12.8%	14.3% (14.5%)	1.1	1.5

(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.83	27.80	26.50 (26.37)	-	▲ 4.7
単収(t/ha)	3.17	2.94	3.26 (3.28)	0.05	10.9
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」(14 November 2025)					
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025)					
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。					

図 ロシアの実小麦の実産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

表 ロシアの実小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年7月～10月)			2025/26年度 (2025年7月～10月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	392.4	19.3	エジプト	334.2	20.6
トルコ	134.6	6.6	トルコ	217.3	13.4
アルジェリア	131.2	6.4	バングラデシュ	96.9	6.0
バングラデシュ	105.4	5.2	リビア	91.1	5.6
サウジアラビア	80.5	4.0	イスラエル	75.9	4.7
その他	1,190.4	58.5	その他	804.9	49.7
合計	2,034.5	100.0	合計	1,620.3	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、9月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から1.7%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、27.9百万トン)から17.6%減の23.0百万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、11月6日現在、2024/25年度の小麦の収穫はほぼ終了しており、収穫量は2,282万トンとなっている。また、11月3日現在、2026/27年度の冬小麦の作付進捗率は、降雨により前年同期(95.9%)に比べ90.2%と若干遅れている。10月末現在、大部分の地域で土壌水分量は適切で、生育は作付期から3葉期となっており、作付けが早かった圃場では分けつ期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26年度の輸出量は、9月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から4.8%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(18.1百万トン)から17.1%減の15.0百万トンとなる見込み。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、2022年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきた。当該措置は2025年6月5日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。その後、6月30日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、EUとウクライナの連合委員会は10月14日に合意を承認し、10月29日に発効となった。これにより、小麦及びメスリン等に対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンに見直された(表1)。

報道によれば、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産農産物に対して、2023年から独自に輸入禁止措置を行っており、10月29日の新たなDCFTA発効後も同措置を維持する意向である。

現地情報会社によれば、2025/26年度のうち2025年7～10月の輸出量は、前年同期(774.0万トン)に比べ19.9%減の619.9万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト183.6万トン(29.6%)、インドネシア114.7万トン(18.5%)、アルジェリア73.9万トン(11.9%)の順(表2)。EUのウクライナ産小麦に対する関税割当制度等の適用再開により、昨年度まで第1位であったスペインへの輸出は大きく減少している。ウクライナ産小麦の輸出先国は、EUからロシアのウクライナ侵攻前の主要輸出先であった北アフリカ、中東及びアジアへシフトするとともに、EUやロシアなどの輸出国との競合も見込まれている。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、9月予測からの変更はなく、前年度から107.5%増の1.9百万トンとなる見込み。

小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	23.0	23.4	23.0 (25.6)	-	▲ 1.7
消 費 量	6.0	8.2	7.1 (8.9)	-	▲ 13.4
うち飼料用	1.5	3.6	2.5 (2.1)	-	▲ 30.6
輸 出 量	18.6	15.8	15.0 (15.5)	-	▲ 4.8
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
期末在庫量	1.4	0.9	1.9 (2.1)	-	107.5
期末在庫率	5.7%	3.9%	8.7% (8.6%)	-	4.8

(参考)
収穫面積(百万ha) 5.01 5.20 5.50 (6.30)
単収(t/ha) 4.59 4.50 4.18 (4.06)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、IPS&D(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025)
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

表1 EUのウクライナ産穀物等に対する関税割当数量

品目	変更前の関税割当数量	新たな関税割当数量
小麦、小麦ペレット	1,000,000	1,300,000
とうもろこし、とうもろこしペレット	650,000	1,000,000
大麦、大麦ペレット	350,000	450,000
小麦粉、大麦粉、とうもろこし粉	各品目の関税割当数量に含む。	各粉30,000

資料:EC 公表資料をもとに農林水産省で作成

表2 ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～10月)			2025/26年度 (2025年7月～10月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
スペイン	326.1	20.9	スペイン	184.4	23.8	エジプト	183.6	29.6
エジプト	211.1	13.5	インドネシア	131.2	17.0	インドネシア	114.7	18.5
アルジェリア	195.1	12.5	ベトナム	70.0	9.0	アルジェリア	73.9	11.9
インドネシア	158.8	10.2	エジプト	65.9	8.5	ベトナム	45.4	7.3
ベトナム	104.7	6.7	タイ	57.2	7.4	イエメン	36.1	5.8
その他	566.5	36.3	その他	265.4	34.3	その他	166.4	26.8
合計	1,562.2	100.0	合計	774.0	100.0	合計	619.9	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26年度の輸入量は前年度から43.9%増加の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、9月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 0.1%減となるものの、過去5年平均(137.1 百万トン)から 2.1%増の 140.0 百万トンとなり、史上最高の前年度に次ぐ生産量となる見込み。

中国中央气象台「全国農業気象月報」(2025.11.5)によれば、10 月は降雨により秋の収穫後の耕起が遅れ、2026/27 年度の冬小麦の作付けは遅れている。10 月末現在の生育状況は、西北地区(新疆ウイグル自治区、甘肅省、陝西省等)では、作付期から3葉期にあり、一部で分けつ期を迎えている。華北(河北省、山西省、内モンゴル自治区等)及び黄淮地区(河南省、安徽省、江蘇省、山東省)では、作付期から出芽期を迎えている。新疆ウイグル自治区北部、西北地区東部、華北及び黄淮地区の大部分で生育が平年より7日以上遅れており、その他の地域は平年並みか平年より早くなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測からの変更はなく、前年度から 1.3%減、過去5年平均(150.9 百万トン)から 1.9%減の 148.0 百万トンとなる見込み。

2025/26 年度の輸入量は、9月予測からの変更はなく、期首在庫量の減少等を受け前年度から 43.9%増となるものの、過去5年平均(10.3 百万トン)から 41.5%減の 6.0 百万トンとなる見込み。

中国国務院関税税則委員会は、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け、8月 12 日から更に 90 日停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表(同第 10 号)した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これにより小麦は 10%の追加関税を課すこととなった。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸入量は、前年同期(145.7 万トン)に比べ 29.1%減の 103.4 万トンとなっている。輸入先国別には、カナダ 77.9 万トン(75.4%)、豪州 19.6 万トン(19.0%)、カザフスタン 3.0 万トン(2.9%)の順となっている(表)。米国からの輸入は 32 トンと大きく減少している。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、9月予測からの変更はなく、前年度から 2.3%減の 124.8 百万トンとなる見込み。

小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.6	140.1	140.0 (140.0)	-	▲ 0.1
消 費 量	153.5	150.0	148.0 (147.3)	-	▲ 1.3
うち飼料用	37.0	33.0	31.0 (28.0)	-	▲ 6.1
輸 出 量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	-	▲ 2.0
輸 入 量	13.6	4.2	6.0 (6.2)	-	43.9
期末在庫量	134.5	127.8	124.8 (134.8)	-	▲ 2.3
期末在庫率	87.1%	84.6%	83.7% (90.8%)	-	▲ 0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.63	23.59	23.60 (23.65)	-	0.1
単収(t/ha)	5.78	5.94	5.93 (5.92)	-	▲ 0.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」(14 November 2025)

IGC「Grain Market Report」(23 October 2025)

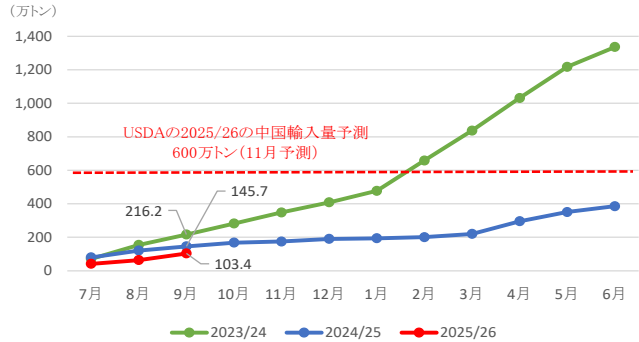
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

表 中国の小麦の輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～9月)			2025/26年度 (2025年7月～9月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
カナダ	185.9	48.2	カナダ	46.3	31.7	カナダ	77.9	75.4
豪州	86.9	22.5	米国	45.1	30.9	豪州	19.6	19.0
米国	46.2	12.0	豪州	18.6	12.8	カザフスタン	3.0	2.9
カザフスタン	30.8	8.0	カザフスタン	17.1	11.7	ロシア	1.3	1.3
ロシア	29.7	7.7	ロシア	17.1	11.7	日本	1.0	0.9
日本	4.9	1.3	日本	1.1	0.8	フランス	0.4	0.4
その他	1.5	0.4	その他	0.5	0.4	その他	0.06	0.1
合計	385.9	100.0	合計	145.7	100.0	合計	103.4	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

図 中国の小麦輸入量の推移(累計)



資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2025/26 年度

「前月比」は 2025 年9月予測との比。

生産量 前年度比  前月比 

・メキシコ、EU等で上方修正されたものの、米国、エジプト等で下方修正され、9月から下方修正された。史上最高の見込み。

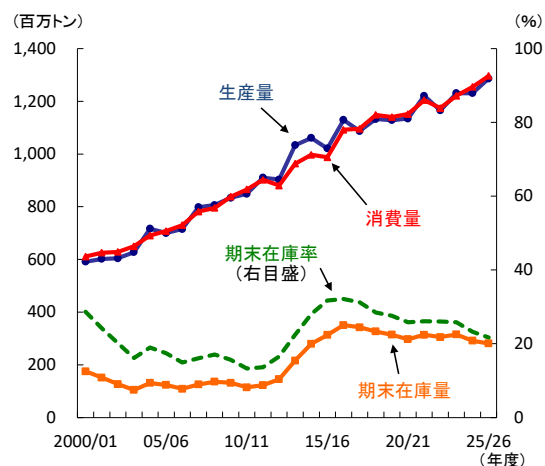
消費量 前年度比  前月比 

・EU等で下方修正されたものの、ブラジル、イラン、アルゼンチン、ウクライナ、メキシコ、ベネズエラ等で上方修正され、9月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・ウクライナで下方修正されたものの、米国等で上方修正され、9月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

◎世界のとうもろこし需給

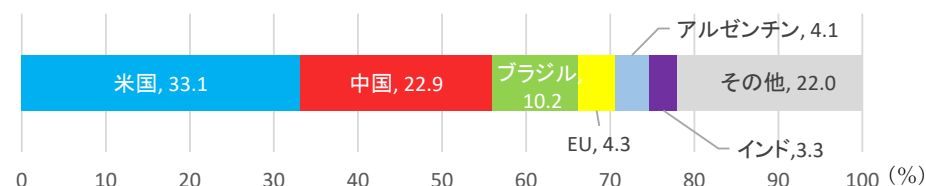
(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率 (%)
生産量	1,231.1	1,230.7	1,286.2	▲ 0.4	4.5
消費量	1,220.9	1,254.6	1,296.5	7.2	3.3
うち飼料用	769.5	786.7	812.6	2.0	3.3
輸出量	192.7	188.5	203.5	1.8	7.9
輸入量	197.4	183.8	191.1	▲ 2.1	4.0
期末在庫量	315.5	291.7	281.3	▲ 0.1	▲ 3.5
期末在庫率	25.8%	23.2%	21.7%	▲ 0.1	▲ 1.5

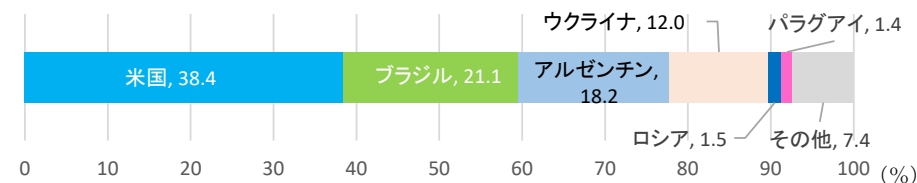
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(14 November 2025)

注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

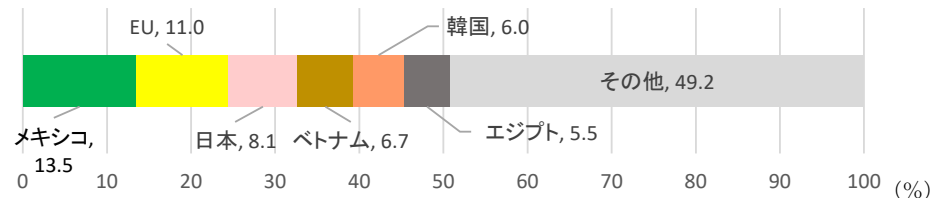
○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,286.2 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの輸出量 (203.5 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの輸入量 (191.1 百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 12.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引下げを受け9月予測から 1.6 百万トン下方修正されたものの、前年度から 12.5%増の 425.5 百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家が大豆から作付けを切り替えたとみられる。

USDA「Crop Progress」(2025.11.17)によれば、11 月 16 日現在、収穫進捗率は 91%と、前年同期(98%)、過去5年平均(94%)を下回った。農業市場情報システム(AMIS)「Market Monitor No.133」(2025.11)によれば、過剰な降雨により収穫が遅延した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加等を受け、前年度から 6.2%増の 332.3 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、好調な輸出を受け9月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度から 8.7%増の 78.1 百万トンと、史上最高の見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年9～10 月の輸出量は、前年同期(747.4 万トン)に比べ 67.3%増の 1,250.1 万トン。輸出先国別には、メキシコ 413.6 万トン(33.1%)、日本 194.7 万トン(15.6%)、コロンビア 133.7 万トン(10.7%)の順となっている(表)。報道情報によれば、競争力のある価格により米国産とうもろこしの需要が増加している。

国際穀物理事会(IGC)によれば、11 月7日現在、米国産の輸出価格は 208ドル/トンと、前月(10 月9日)から7ドル/トン上昇した。ブラジル産は前月から7ドル/トン上昇し 215ドル/トン、アルゼンチン産は前月から5ドル/トン上昇し 205ドル/トンとなった(図)。

米国環境保護庁(EPA)は、製油業者等に対しガソリン及びディーゼルに一定量の再生可能燃料を混合することを義務付けているが、本年 11 月、EPA は、小規模製油所免除(SRE)制度により、小規模製油所の義務免除を求める 14 件の申請を新たに承認した。報道情報によれば、これに対し、バイオ燃料の需要減を危惧する業界団体等から批判の声が上がっている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、9月予測から 1.1 百万トン上方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 40.6%増、過去5年平均(36.9 百万トン)から 48.2%増の 54.7 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 3.2 ポイント増の 13.3%となる見込み。

とうもろこしー米国

(概ね4～5月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月～26年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	389.7	378.3	425.5	▲ 1.6	12.5
消費量	322.9	312.8	332.3	—	6.2
うち飼料用	148.1	139.5	155.0	—	11.1
エタノール用等	139.4	138.1	142.2	—	3.0
輸出量	57.3	71.9	78.1	2.5	8.7
輸入量	0.7	0.5	0.6	—	25.5
期末在庫量	44.8	38.9	54.7	1.1	40.6
期末在庫率	11.8%	10.1%	13.3%	0.2	3.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	35.01	33.61	36.44	—	8.4
単収(t/ha)	11.13	11.26	11.68	▲ 0.04	3.7

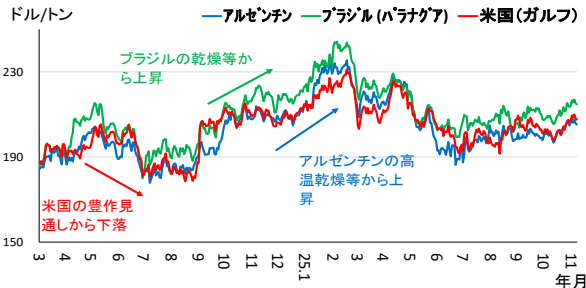
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「PS&D」(14 November 2025)
注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

表 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月～10月)			2025/26年度 (2025年9月～10月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	2,212.2	32.6	メキシコ	373.8	50.0	メキシコ	413.6	33.1
日本	1,344.0	19.8	コロンビア	123.6	16.5	日本	194.7	15.6
コロンビア	743.7	11.0	日本	96.4	12.9	コロンビア	133.7	10.7
韓国	617.4	9.1	スペイン	25.7	3.4	韓国	120.5	9.6
台湾	241.6	3.6	ホンジュラス	17.4	2.3	スペイン	101.2	8.1
その他	1,617.3	23.9	その他	110.4	14.8	その他	286.4	22.9
合計	6,776.2	100.0	合計	747.4	100.0	合計	1,250.1	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

図 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 3.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、9月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 3.7%減となるものの、過去5年平均(119.0 百万トン)から 10.1%増の 131.0 百万トンと、史上3番目の生産量となる見込み。なお、2024/25 年度は、2023/24 年度から 14.3%増の 136.0 百万トンと、史上2番目の生産量となる見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2025.11.13)によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の減少を受け前年度から 1.6%減の 138.8 百万トンの見込み。夏とうもろこし(第1期作)の作付面積は、収益性の向上によりコメや豆からとうもろこしに作付けがシフトすることを受け前年度から 7.1%増の 4.0 百万ヘクタールの見込み。生産量は、前年度から 3.7%増の 25.9 百万トンの見込み。作付進捗率は 11 月8日時点で 47.7%と前年同期及び過去5年平均と同程度となっている。一部地域では低温により発芽及び初期成育が遅れているものの、ほとんどの地域でまとまった降雨に恵まれ、作物は概ね順調に生育している。ただし、11 月上旬に一部地域で豪雨等の被害の報告があり CONAB が調査を行っている。また、冬とうもろこし(第2・3期作)の実産量は、前年度から 2.7%減の 113.0 百万トンの見込み。冬とうもろこしの大部分を占める第2期作の作付作業は 12 月末に開始される予定となっている(図)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測から 1.5 百万トン上方修正され、エタノール向けとうもろこしの国内需要の高まりにより、前年度から 2.1%増の 96.5 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、9月予測からの変更はなく、前年度から 4.9%増の 43.0 百万トンの見込み。また、CONAB によれば、2025/26 年度の輸出量は、十分な生産量に支えられ前年度から 16.3%増の 46.5 百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～10 月の輸出量は、前年同期(2,418.5 万トン)に比べ 2.5%増の 2,478.7 万トン。輸出先国別には、イラン 468.3 万トン(18.9%)、エジプト 412.2 万トン(16.6%)、ベトナム 249.1 万トン(10.1%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、9月予測から 0.1 百万トン上方修正され、生産量の減少及び消費量の増加を受け前年度から 66.2%減、過去5年平均(7.4 百万トン)から 52.5%減の 3.5 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 5.2 ポイント減の 2.5%となる見込み。

とうもろこしーブラジル

(夏とうもろこしは、概ね8～翌年1月に作付けされ、2～6月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1～3月に作付けされ、6～10 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)			
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	119.0	136.0 (141.1)	131.0 (138.8)	- (0.2)	▲3.7	(▲1.6)
消 費 量	84.0	94.5 (90.6)	96.5 (94.6)	1.5 (0.04)	2.1	(4.5)
う ち 飼 料 用	62.5	66.5 …	66.0 …	0.5 …	▲0.8	…
輸 出 量	38.3	41.0 (40.0)	43.0 (46.5)	- (-)	4.9	(16.3)
輸 入 量	1.7	1.6 (1.7)	1.6 (1.7)	- (-)	-	(-)
期 末 在 庫 量	8.3	10.4 (14.1)	3.5 (13.6)	0.1 (0.2)	▲66.2	(▲4.0)
期 末 在 庫 率	6.8%	7.7% (10.8%)	2.5% (9.6%)	0.04 (0.1)	▲5.2	(▲1.2)
(参考)						
収穫面積(百万ha)	21.65	22.30 (21.84)	22.60 (22.72)	- (0.03)	1.3	(4.0)
単収(t/ha)	5.50	6.10 (6.46)	5.80 (6.11)	- (0.001)	▲4.9	(▲5.4)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「PS&D」(14 November 2025)
CONAB「Graos」(13 November 2025) ※()書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。
注:USDAにおける「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

図 ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2025/26年度	2025年				2026年								
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし (リオ・グランデ・ド・スール州等)	作付 4.0 百万ha				収穫 25.9 百万t								
冬とうもろこし (マト・グロソ州、パラナ州等)	作付面積夏冬作計 22.7百万ha				作付 18.7 百万ha								
大豆 (マト・グロソ州、パラナ州等)	作付 49.1 百万ha				収穫 177.6 百万t								

資料:CONAB「Graos」(2025.11.13)をもとに農林水産省で作成

表 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)			2023/24年度 (2024年3月～10月)			2024/25年度 (2025年3月～10月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	601.1	15.7	エジプト	283.4	11.7	イラン	468.3	18.9
イラン	535.7	14.0	ベトナム	276.0	11.4	エジプト	412.2	16.6
ベトナム	450.9	11.8	韓国	229.0	9.5	ベトナム	249.1	10.1
韓国	243.3	6.4	イラン	201.3	8.3	中国	148.4	6.0
日本	214.3	5.6	日本	195.8	8.1	サウジアラビア	136.4	5.5
その他	1,772.8	46.4	その他	1,233.1	51.0	その他	1064.2	42.9
合計	3,818.2	100.0	合計	2,418.5	100.0	合計	2,478.7	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、9月予測からの変更はなく、前年度から 6.0%増、過去5年平均(49.0 百万トン)から 8.2%増の 53.0 百万トンとなる見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害が生産者の作付意欲に負の影響を及ぼしたが、被害の改善により 2025/26 年度は作付面積が回復する見込み。なお、2024/25 年度の実産量は、2023/24 年度から 2.0%減の 50.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2025.11.13)によれば、11 月 13 日現在の作付進捗率は 41%と前年同期(40%)を上回っており、主要生産州では、ブエノス・アイレス州 46%、コルドバ州 40%、サンタフェ州 75%となっている(写真)。エントレ・リオス州の作付けの早かった圃場では、4～10 葉期を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測から 0.8 百万トン上方修正され、飼料用消費の増加を受け前年度から 3.1%増の 16.4 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出货量は、9月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け前年度から 15.6%増の 37.0 百万トンの見込み。なお、2024/25 年度の輸出货量は、2023/24 年度から 11.7%減の 32.0 百万トンとなる見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～10 月の輸出货量は、前年同期(2,638.1 万トン)に比べ 11.8%減の 2,327.9 万トン。輸出先国別には、ベトナム 432.6 万トン(18.6%)、ペルー309.3 万トン(13.3%)、マレーシア 233.8 万トン(10.0%)の順となっている(表)。

アルゼンチン政府は、2025 年9月 22 日、とうもろこしを含む穀物及びその副産物について、輸出税を一時的に撤廃すると発表した。期限は 10 月 31 日又は申告された輸出額が 70 億米ドルに相当する額に達する日(いずれか早い方)までとしていたが、輸出額の上限に達し、9月 25 日から再び輸出税を課すこととなった。報道情報によれば、輸出を加速させることで、低迷するペソ通貨を支えるために必要なドルを調達する狙いがあったとみられる。政府はこれまで、2025 年1月から6月末までとうもろこしの輸出税を 9.5%に引き下げていたが、7月1日からは従来の税率である 12%に引き上げ、8月1日には、再び 9.5%に引き下げていた。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、9月予測から 1.0 百万トン上方修正されたものの、輸出货量の増加等を受け前年度から 8.5%減、過去5年平均(3.4 百万トン)からは 21.3%増の 4.2 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 1.7 ポイント減の 7.8%となる見込み。

とうもろこしーアルゼンチン

(早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね3～8月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	51.0	50.0	53.0 (59.3)	-	6.0
消費量	14.6	15.9	16.4 (20.9)	0.8	3.1
うち飼料用	10.4	11.5	12.0 (15.9)	0.8	4.3
輸 出 量	36.3	32.0	37.0 (38.2)	-	15.6
輸 入 量	0.01	0.01	0.01 (0.001)	-	-
期末在庫量	2.5	4.6	4.2 (1.8)	1.0	▲ 8.5
期末在庫率	4.9%	9.6%	7.8% (3.1%)	1.8	▲ 1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.78	6.90	7.50 (8.24)	-	8.7
単収(t/ha)	6.56	7.25	7.07 (7.20)	-	▲ 2.5

資料:USDA[World Agricultural Supply and Demand Estimates]、
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025)
注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

写真 サンタフェ州の圃場(10 月 29 日撮影)



9月 12 日に作付けされ、8葉期を迎えている圃場。気象条件に恵まれ、作柄は良好。

撮影者:José Daniel Peloni

表 アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出货量

2023/24年度 (2024年 3 月～2025年 2 月)			2023/24年度 (2024年 3 月～2024年10月)			2024/25年度 (2025年 3 月～2025年10月)		
国名	輸出货量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出货量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出货量 (万トン)	シェア (%)
ベトナム	667.8	18.4	ベトナム	531.1	20.1	ベトナム	432.6	18.6
ペルー	433.1	11.9	ペルー	298.2	11.3	ペルー	309.3	13.3
マレーシア	333.6	9.2	韓国	267.3	10.1	マレーシア	233.8	10.0
韓国	282.2	7.8	マレーシア	242.9	9.2	アルジェリア	213.6	9.2
アルジェリア	280.1	7.7	サウジアラビア	192.0	7.3	サウジアラビア	174.4	7.5
その他	1,628.2	44.9	その他	1,106.5	41.9	その他	964.2	41.4
合計	3,624.9	100.0	合計	2,638.1	100.0	合計	2,327.9	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成

＜ ウクライナ ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 19.4%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、9 月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け高温乾燥等の影響により生産量が減少した前年度から 19.4%増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22 年度、33.6 百万トン)から 4.9%減の 32.0 百万トンとなる見込み(図)。

現地情報会社によれば、11 月7日時点の収穫進捗率は 53%と、天候不良により前年同期(83%)に比べ遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9 月予測から 0.6 百万トン上方修正され、飼料用消費の増加を受け前年度から 9.4%増の 7.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、9 月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加等を受け前年度から 22.4%増の 24.5 百万トンとなる見込み。なお、2024/25 年度の輸出量は、2023/24 年度から 32.1%減の 20.0 百万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月の輸出量は、前年同期(191.7 万トン)に比べ 50.9%減の 94.1 万トン。輸出先国別には、イタリア 26.3 万トン(27.9%)、トルコ 16.9 万トン(18.0%)、韓国 10.3 万トン(10.9%)の順となっている(表)。報道情報によれば、収穫の遅れにより、ウクライナ産とうもろこしは EU のシェアを失いつつある。また、EU 市場で競合している米国産とうもろこしの記録的な豊作によりさらに競争が激化すると予想されている。

2022 年6月より適用されてきた EU のウクライナ産品に対する輸入関税と輸入割当の停止措置が 2025 年6月5日に適用期限を迎え失効し、欧州委員会は、6月6日以降、深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)に基づく関税割当を適用している。6月30日には欧州委員会とウクライナが DCFTA の下で新たな貿易措置に合意したことが発表され、とうもろこしの年間の関税割当量は、現行の 65 万トンから 100 万トンに拡大された(小麦＜ウクライナ＞表1参照)。EU とウクライナの連合委員会は 10 月 14 日に上記の合意を承認し、10 月 29 日に発効となった。期限は 2028 年末までとされ、同年に見直しを検討される予定。現地情報会社によれば、とうもろこしについては、EU の関税率は0%であるため、割当量の増減による影響はないとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、9 月予測から 0.4 百万トン上方修正され、生産量の増加により、前年度から 49.0%増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2.5 百万トン)からは 38.2%減の 1.6 百万トンの見込み。2025/26 年度の期末在庫率は、前年度から 1.0 ポイント減の 4.9%となる見込み。

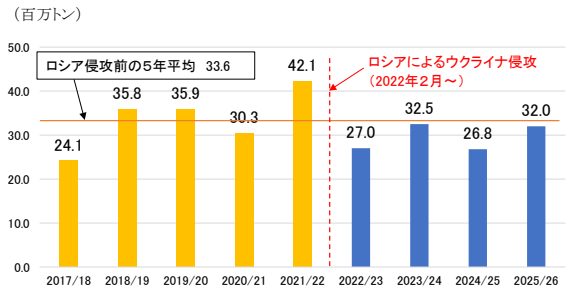
とうもろこしーウクライナ

(概ね4～5月に作付けされ、8～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	32.5	26.8	32.0 (31.5)	-	19.4
消 費 量	5.4	6.4	7.0 (6.1)	0.6	9.4
うち飼料用	4.5	5.4	6.0 (4.7)	0.5	11.1
輸 出 量	29.5	20.0	24.5 (25.5)	▲ 1.0	22.4
輸 入 量	0.01	0.02	0.01 (0.002)	-	▲ 50.0
期末在庫量	0.6	1.0	1.6 (1.0)	0.4	49.0
期末在庫率	1.8%	3.9%	4.9% (3.2%)	1.3	1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	4.20	4.10	4.40 (4.40)	-	7.3
単収(t/ha)	7.74	6.54	7.27 (7.16)	-	11.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025)
注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

図 ウクライナのとうもろこしの生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月)			2025/26年度 (2025年10月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
トルコ	568.8	28.4	トルコ	46.7	24.4	イタリア	26.3	27.9
イタリア	273.6	13.7	イタリア	42.6	22.2	トルコ	16.9	18.0
スペイン	240.7	12.0	スペイン	35.1	18.3	韓国	10.3	10.9
オランダ	199.1	10.0	オランダ	27.0	14.1	オランダ	8.3	8.8
エジプト	162.5	8.1	韓国	12.4	6.5	チェコ	6.0	6.4
その他	556.1	27.8	その他	27.9	14.6	その他	26.3	27.9
合計	2,000.8	100.0	合計	191.7	100.0	合計	94.1	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.03%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、9月予測からの変更はなく、単収の増加を受け前年度から 0.03%増、過去5年平均(278.8 百万トン)から 5.8%増の 295.0 百万トンと、史上最高の見込み。

中国中央気象台「全国農業気象月報」(2025.11.5)によれば、10 月の東北部は概ね晴天に恵まれ、降水量が平年に比べ3～9割少なかったことで、収穫作業が進展した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.6%増の 321.0 百万トンと、史上最高の見込み。ただし、中国農業農村部「中国農業展望報告(2025－2034)」(2025.4)によれば、飼料用需要は、今後、畜産物単位当たりの飼料消費量の減少に伴い、減少に転じる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、9月予測から 2.0 百万トン下方修正されたものの、前年度から 339.6%増の 8.0 百万トンとなる見込み。なお、2024/25 年度の輸入量は、報復関税などの貿易政策の変更や国内農家の利益を守るための輸入抑制により、2023/24 年度から 92.2%減の 1.8 百万トンとなる見込み(図)。

中国海関統計によれば、2024/25 年度(2024 年 10 月～2025 年9月)の輸入量は、前年度(2,332.9 万トン)に比べ 92.2%減の 182.3 万トン。輸入先国別には、ブラジル 72.4 万トン(39.7%)、ウクライナ 37.6 万トン(20.6%)、ロシア 36.8 万トン(20.2%)の順となっている(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年9月号」によれば、9月の国内価格は、新穀の市場出荷量が増加するとともに需要も低調であったことから前月(2,380 元/トン)から下落し 2,360 元/トン。

中国国務院関税税則委員会は、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け、8月 12 日から更に 90 日間停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表(同第 10 号)した。また、11 月 10 日から同第 2号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これによりとうもろこしは 10%の追加関税を課すこととなった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、9月予測から 3.2 百万トン下方修正され、消費量の増加を受け前年度から 9.4%減、過去5年平均(204.8 百万トン)から 15.1%減の 173.9 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 6.6 ポイント減の 54.2%となる見込み。

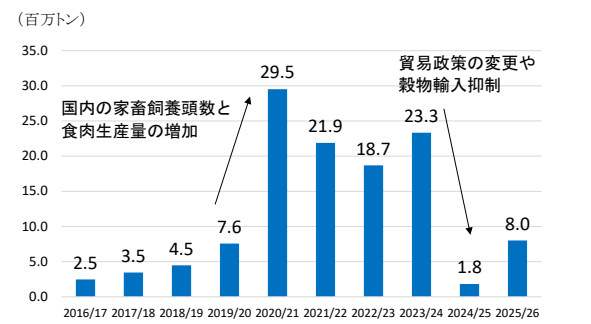
とうもろこしー中国

(春とうもろこしは、概ね2～4月に作付けされ、7～9月に収穫される。夏とうもろこしは、概ね4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	288.8	294.9	295.0 (299.5)	-	0.03
消 費 量	307.0	316.0	321.0 (312.2)	-	1.6
うち飼料用	225.0	234.0	239.0 (210.0)	-	2.1
輸 出 量	0.0	0.0	0.02 (0.1)	-	-
輸 入 量	23.3	1.8	8.0 (6.0)	▲ 2.0	339.6
期末在庫量	211.2	191.9	173.9 (178.2)	▲ 3.2	▲ 9.4
期末在庫率	68.8%	60.7%	54.2% (57.1%)	▲ 1.0	▲ 6.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	44.22	44.74	44.30 (44.90)	-	▲ 1.0
単収(t/ha)	6.53	6.59	6.66 (6.67)	-	1.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025)
注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

図 中国のとうもろこしの輸入量の推移



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

表 中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2023/24 年度 (2023年10月～2024年 9 月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年 9 月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	1,502.3	64.4	ブラジル	72.4	39.7
ウクライナ	456.5	19.6	ウクライナ	37.6	20.6
米国	298.8	12.8	ロシア	36.8	20.2
ミャンマー	19.8	0.8	ミャンマー	22.8	12.5
ブルガリア	18.2	0.8	ラオス	6.4	3.5
ロシア	15.6	0.7	米国	3.9	2.1
その他	21.8	0.9	その他	2.3	1.3
計	2,332.9	100.0	計	182.3	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

「前月比」は2025年9月予測との比。

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・フィリピン、エジプト等で上方修正されたものの、パキスタン、セネガル等で下方修正され、9月から下方修正された。

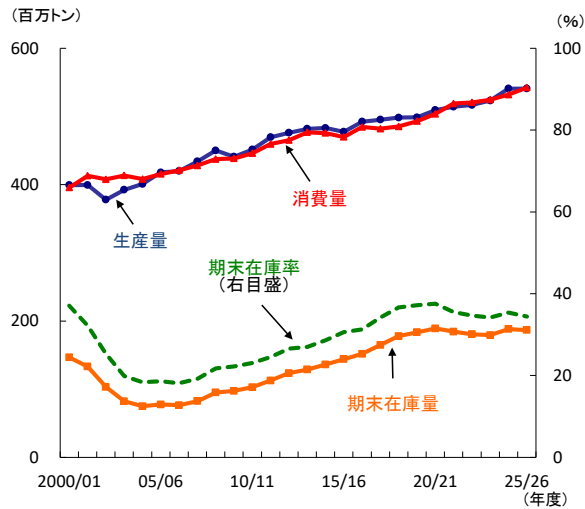
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・セネガル等で下方修正されたものの、ナイジェリア、エジプト等で上方修正され、9月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・タイ、中国、パキスタン、ブラジルで上方修正され、9月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省にて作成

◎世界のコメ需給

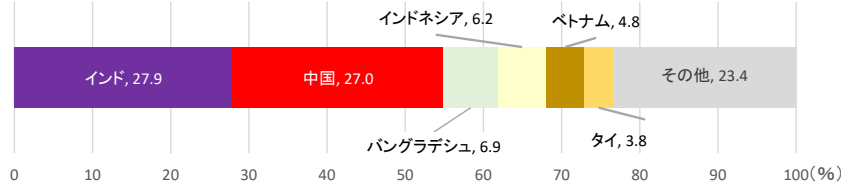
(単位:百万精米トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	523.4	540.9	540.9	▲ 0.2	▲ 0.01
消 費 量	524.7	532.1	542.4	0.2	1.9
輸 出 量	56.8	60.90	62.9	0.8	3.3
輸 入 量	53.4	58.0	59.3	0.5	2.2
期末在庫量	179.4	188.2	186.7	▲ 0.6	▲ 0.8
期末在庫率	34.2%	35.4%	34.4%	▲ 0.1	▲ 0.9

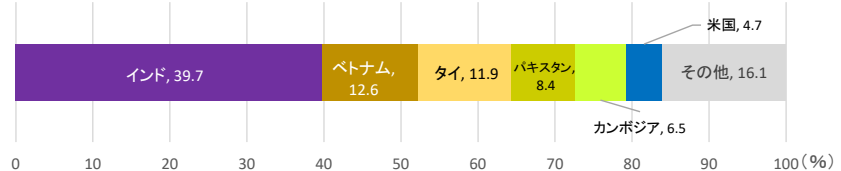
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(14 November 2025)

注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

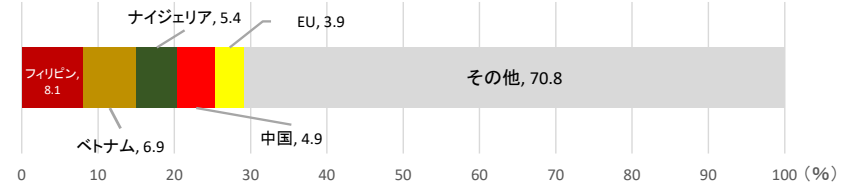
○ 2025/26年度 世界のコメの生産量(540.9百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸出量(62.9百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸入量(59.3百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< タイ > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、9 月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度から8万ヘクタール減少(前年度比 0.7%減)することを前年度から 0.7%減の 20.4 百万トンの見込み。単収は過去最高の 2.86 トン/ヘクタールを維持する見込み。

タイ農業協同組合農業経済局「農業経済」(2025.10)によれば、2024/25 年度の乾季米(2024 年 11 月～2025 年4月作付け)は収穫作業が終了し、生産量は作付面積の増加に伴い、前年度から 31%増の 859 万トン(粳米ベース)と予測されている。また 2025/26 年度の雨季米(2025 年5～10 月作付け)の実産量は、作付面積が微減するものの、気象条件が良く、単収が前年度から 1.2%増の 2.75 トン/ヘクタールと見込まれ、前年度から 0.8%増の 2,723 万トン(粳米ベース)となる見込み。

アセアン食料安全保障情報システム(2025.10)によれば、雨季米は現在、登熟期にある。9～10 月にかけて発生した強力な南西モンスーンと複数の台風(20 号ブアローイ、21 号マツウモ)により、大規模な洪水が発生し、複数地域に影響を与え、被害を受けた総稲作面積は約6万ヘクタールと予測されている。この局所的な影響に関わらず、十分な降雨量と日射量が稲の生長を支え、分けつが順調に進み、作物の全体的な生育は良好となった。しかし、主に作付面積の減少により、コメの総生産量は減少が見込まれている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正されたものの、インドの低価格米の市場復帰やインドネシアやフィリピン等の主要輸出先国の需要減退が要因となり、前年度から 1.3%減の 7.5 百万トンの見込み。

タイ関税局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年1～9月の輸出量は、前年同期に比べ 23%減の 579.9 万トンで、輸出先国別には、イラク 76.4 万トン(14.6%)、南アフリカ 63.2 万トン(11.4%)、米国 60.4 万トン(9.6%)の順となっている(表)。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシア向けの輸出量は8万トンと大幅に減少し前年同期に比べ 93%減となった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.7 百万トン下方修正されたものの、政府の大規模備蓄計画を受け前年度から 11.1%増の 3.0 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 1.5 ポイント増の 14.9%となる見込み。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年1月～26年12月)			
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	20.0	20.6	20.4 (20.4)	-	▲ 0.7	
消 費 量	12.3	12.5	12.7 (12.6)	-	1.2	
輸 出 量	9.9	7.6	7.5 (7.8)	0.3	▲ 1.3	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.02)	-	-	
期末在庫量	2.2	2.7	3.0 (2.7)	▲ 0.7	11.1	
期末在庫率	10.0%	13.5%	14.9% (13.4%)	▲ 3.8	1.5	

(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.65	10.88	10.80 (10.80)	-	▲ 0.7	
単収(トン/ha)	2.85	2.86	2.86 (1.89)	-	-	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025) (単収は精米t/ha)
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

写真 タイ北部の圃場(10 月 29 日撮影)



8 月 4 日に作付けを行った品種 RD79(白米)の圃場。生育は順調

表 タイのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2023/24年度 (2024年1月～9月)			2024/25年度 (2025年1月～9月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	133.3	13.3	インドネシア	111.8	14.8	イラク	76.4	13.2
イラク	99.7	10.0	イラク	90.8	12.0	南アフリカ	63.2	10.9
米国	84.8	8.5	米国	60.9	8.1	米国	60.4	10.4
南アフリカ	83.3	8.3	南アフリカ	58.1	7.7	中国	52.4	9.0
フィリピン	61.8	6.2	セネガル	41.8	5.5	セネガル	25.7	4.4
セネガル	46.2	4.6	フィリピン	40.5	5.4	日本	18.0	3.1
その他	489.6	49.0	その他	349.8	46.4	その他	283.9	49.0
計	998.7	100.0	計	753.8	100.0	計	579.9	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の実産量は、9月予測から0.1百万トン下方修正され、単収の減少を受け前年度から6.7%減の6.6百万トンの見込み。種類別では、長粒種は4.8百万トンと前年度から11%減の見込み。これは米国最大の長粒種生産地域であるミシシッピ・デルタ地域における4～5月にかけての異常な豪雨と、それに続く洪水により、作付面積が減少したことによる。一方、中・短粒種は1.7百万トンと、前年度から9.1%増の見込み。これは、中・短粒種の主要生産地であるカリフォルニア州における作付面積の拡大による。

同「Crop Production」(2025.11.14)によれば、2025/26年度の実穫面積は、1.12百万ヘクタールで、前年に比べ3.7%減。州別の実穫面積は、長粒種の主要生産地であるアーカンソー州で12.6%減の0.51百万ヘクタール。中・短粒種の主要生産地であるカリフォルニア州で14.2%増の0.21百万ヘクタール、ルイジアナ州で3.1%増の0.19百万ヘクタールの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の実輸入量は、9月予測から変更はなく、引き続きタイからのジャスミン米やインド、パキスタンからのバスマティ米の輸入継続が予測され、前年度から2.5%増の1.6百万トンと史上最高の見込み。

USDAによれば、2025/26年度の実輸出量は、9月予測から変更はなく、前年度から4.2%増の3.0百万トンの見込み。同「Rice Outlook」(2025.9.16)によれば、北東アジア及びイラク向け輸出増が予測されている。

同「Exports Sales Query System」によれば、2025/26年度のうち2025年8～9月の実輸出量は27.8万トンで、輸出先国別には、ハイチ5.8万トン(20.9%)、メキシコ5.7万トン(20.5%)、日本3.7万トン(13.1%)の順(表)。種類別には、長粒種は、実輸出量18.9万トンで、輸出先国別には、ハイチ5.8万トン(国別シェア30.7%)、メキシコ4.6万トン(同24.4%)、ホンジュラス2.6万トン(同13.6%)。中・短粒種は、実輸出量8.9万トンで、輸出先国別には、日本3.7万トン(国別シェア41.1%)、韓国3.1万トン(同35.3%)、メキシコ1.1万トン(同12.0%)。

国際穀物理事会(IGC)によれば、米国産米(長粒種、4%碎米混入)の11月7日の価格は、前月(10月9日)から40ドル/トン下落し566ドル/トンとなった(図)。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、9月予測から0.04百万トン下方修正されたことを受け前年度から3.5%減の1.7百万トンの見込み。

コメー米国

長粒種の生産量は7割、中・短粒種の生産量は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予 測 値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.9	7.1	6.6	▲ 0.1	▲ 6.7
消 費 量	4.9	5.3	5.3	—	▲ 0.6
輸 出 量	3.2	2.9	3.0	—	4.2
輸 入 量	1.4	1.6	1.6	—	2.5
期末在庫量	1.3	1.7	1.7	▲ 0.04	▲ 3.5
期末在庫率	15.8%	20.9%	20.0%	▲ 0.5	▲ 1.0

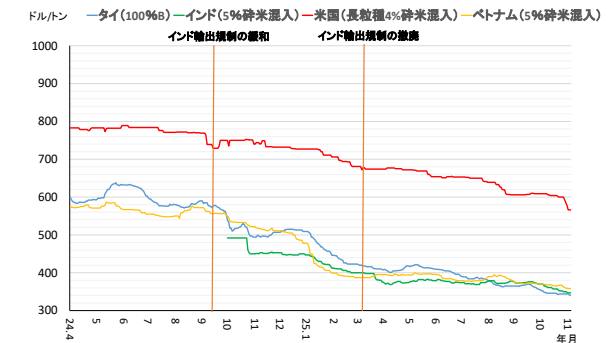
(参考)
収穫面積(百万ha) 1.16 1.16 1.12
単収(粒t/ha) 8.56 8.69 8.41
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「PS&D」(14 November 2025)
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

表 米国のコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～9月)			2025/26年度 (2025年8月～9月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	68.6	23.5	メキシコ	8.4	20.2	ハイチ	5.8	20.9
日本	39.4	13.5	韓国	6.5	15.6	メキシコ	5.7	20.5
ハイチ	28.6	9.8	ニカラグア	3.5	8.5	日本	3.7	13.1
ホンジュラス	27.4	9.4	ハイチ	3.5	8.3	韓国	3.1	11.3
イラク	22.0	7.6	日本	2.9	7.0	ホンジュラス	2.6	9.2
韓国	13.4	4.6	トルコ	2.9	6.8	サウジアラビア	2.0	7.3
その他	91.9	31.6	その他	14.1	33.7	その他	4.9	17.7
計	291.2	100.0	計	41.8	100.0	計	27.8	100.0

資料:USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

図 米国、タイ、ベトナム、インドのコメ輸出価格(FOB)の推移



< 中国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.5%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、9月予測からの変更はなく、農作物の生産性向上との政府計画に沿って、作付面積が安定し、単収が増加するとの予測を受け前年度から 0.5%増の 146.0 百万トン(精米ベース)となる見込み。

内モンゴル自治区食糧・物資備蓄局「2025 年 11 月 11 日国内米相場」によれば、10 月末現在、江南・華南の晩稲は広範囲で収穫期を迎えており、湖南省、江西省ではほぼ終了、浙江省では約3割、広西(コワンシー)壮族自治区では5割以上収穫が進んでいる。気象条件は総体的に南部の晩稲の乳熟、成熟に有利であり、収穫が進められている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測からの変更はなく、飼料及び工業用への古米在庫の放出増を要因として前年度から 0.5%増の 146.7 百万トンとなる見込み。

2025/26 年度の輸入量は、9月予測から 0.3 百万トン上方修正され、国際市場におけるコメ価格の下落と国内コメ価格の高止まりによりミャンマーからの輸入が増加するとの予測を受け前年度から 23.9%増の 2.9 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸入量は、前年同期(24.2 万トン)に比べ 248.0%増の 84.3 万トンとなっている。輸入先国別には、ミャンマー35.3 万トン(41.9%)、タイ 20.0 万トン(23.7%)、ベトナム 15.7 万トン(18.6%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、9月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度から 4.3%増の 1.2 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～9月の輸出量は、前年同期(23.4 万トン)に比べ 69.6%増の 39.6 万トンとなっている。輸出先国別には、トルコ 6.5 万トン(5.7%)、ベナン 4.2 万トン(3.7%)、エジプト 3.5 万トン(3.0%)の順となっている。

2025/26 年度の期末在庫量は、9月予測からの変更はなく、生産量の増加予測や政府の備蓄プログラム等を受け前年度から 1.0%増の 104.5 百万トンの見込み(図)。期末在庫率は前年度から 0.3 ポイント増の 70.7%となる見込み。

コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域(華南、華中、西南高原地域)で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)			
			予測値、〇はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	144.6	145.3	146.0 (146.0)	-	0.5	
消 費 量	148.1	146.0	146.7 (145.6)	-	0.5	
輸 出 量	1.6	1.2	1.2 (1.9)	0.3	4.3	
輸 入 量	1.5	2.3	2.9 (2.5)	0.3	23.9	
期末在庫量	103.0	103.5	104.5 (103.2)	-	1.0	
期末在庫率	68.8%	70.4%	70.7% (70.0%)	▲ 0.1	0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	28.95	29.01	29.00 (29.00)	-	▲ 0.02	
単収(kg/ha)	7.14	7.16	7.19 (5.03)	-	0.4	

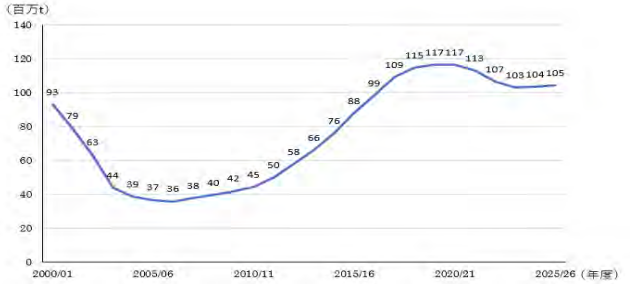
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025) (単収は精米t/ha)
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

表 中国のコメの輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～9月)			2025/26年度 (2025年7月～9月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ミャンマー	67.4	28.9	ミャンマー	13.4	55.1	ミャンマー	35.3	41.9
タイ	56.1	24.0	タイ	5.4	22.2	タイ	20.0	23.7
ベトナム	49.6	21.3	ベトナム	3.3	13.7	ベトナム	15.7	18.6
インド	24.1	10.3	パキスタン	1.8	7.3	インド	7.7	9.1
パキスタン	20.7	8.9	インド	0.2	0.6	カンボジア	2.9	3.4
カンボジア	11.7	5.0	カンボジア	0.1	0.5	パキスタン	2.3	2.8
その他	3.8	1.6	その他	0.1	0.4	その他	0.4	0.5
合計	233.5	100.0	合計	24.2	100.0	合計	84.3	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

図 中国のコメの期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

< インド > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、9月予測からの変更はなく、前年度から 0.7%増、過去5年平均(135.5 百万トン)から 11.5%増の 151.0 百万トンと史上最高の見込み。

インド農業・農民福祉省によれば、2025/26 年度のカリフ米の作付面積は、10 月3日時点で前年度から 1.34%増の 44.2 百万ヘクタールとなっており、南西モンスーンの早期到来及び範囲拡大が増加要因となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測からの変更はなく、インド政府が国内市場及びエタノール製造業者向けに補助価格で過剰米の在庫処分を進めることによる需要増が見込まれ、前年度から 3.5%増の 127.0 百万トンと予測されている。また、生産量の増加により、政府は食料安全保障法に基づく公的食料配給制度(PDS)の継続実施が可能となっている。政府は PDS により市場からコメ等を調達し、低所得世帯(8.14 億人以上)に無償又は低価格で配給している。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、9月予測からの変更はなく、前年度から 9.5%増の 25.0 百万トンの見込み。

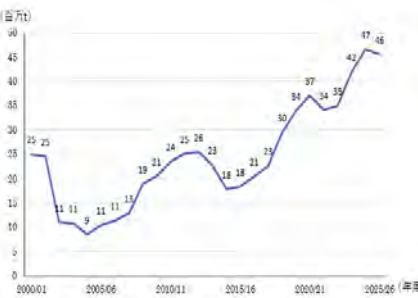
報道情報によれば、直近四半期のコメ輸出は堅調で、インドの「最も信頼される供給国としての地位」が強化されているとのこと。また、10 月末から 11 月初旬にかけて民間及び政府機関共催で開催された「バーラド国際コメ会議(Bharat International Rice Conference: BIRC)」では、多数のインド・海外機関間でコメ輸出促進に関する覚書(MOU)が締結された。

インド輸出入統計によれば、2024/25 年度のうち 2024 年 10 月～2025 年8月の輸出量は、2,117.1 万トンと前年同期(1,357.2 万トン)に比べ 56%増となっている。輸出先国別には、ベナン 203.5 万トン(9.6%)、サウジアラビア 131.6 万トン(6.2%)、バングラデシュ 127.5 万トン(6.0%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、9月予測からの変更はなく、政府備蓄米放出等により前年度から 2.2%減の 45.5 百万トンとなるが、政府が望む在庫水準(10.25 百万トン)は大幅に上回る見込み(図)。

インド食品公社(Food Cooperation India)によれば、2025 年 10 月時点の期末在庫量は、35.6 百万トン(精米)と前年同期に比べ 13.9%増の見込み。

図 インドのコメの期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

コメーインド

カリフ米:雨季/モンスーン期(5～10 月)に栽培。

ラビ米:冬季の 11 月～翌3月に栽培。

夏季米:3～6月に栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予 測 値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	137.8	150.0	151.0 (151.0)	-	0.7	
消 費 量	116.4	122.7	127.0 (124.2)	-	3.5	
輸 出 量	14.4	22.8	25.0 (23.8)	-	9.5	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	42.0	46.5	45.5 (50.4)	-	▲ 2.2	
期末在庫率	32.1%	32.0%	29.9% (34.1%)	-	▲ 2.0	

(参考)

収穫面積(百万ha)	47.83	51.42	51.50 (51.50)	-	0.1
単収(kg/ha)	4.32	4.38	4.40 (2.93)	-	0.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025) (単収は精米/kg/ha)
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

写真 西ベンガル州の圃場(11 月2日撮影)



収穫後の圃場(手前)と完熟期の圃場(奥)。11 月第1週に収穫が開始された。

表 インドのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2023/24年度 (2023年10月～2024年8月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年8月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
サウジアラビア	136.7	9.4	サウジアラビア	129.0	9.5	ベナン	203.5	9.6
ベナン	125.0	8.6	ベナン	115.9	8.5	サウジアラビア	131.6	6.2
イラク	90.2	6.2	イラク	84.3	6.2	バングラデシュ	127.5	6.0
ギニア	84.5	5.8	ギニア	83.2	6.1	コートジボワール	103.9	4.9
イラン	74.0	5.1	イラン	73.4	5.4	ギニア	102.4	4.8
コートジボワール	71.8	4.9	コートジボワール	67.9	5.0	トーゴ	100.3	4.7
その他	872.1	60.0	その他	803.5	59.2	その他	1,347.9	63.7
計	1,454.2	100.0	計	1,357.2	100.0	計	2,117.1	100.0

資料:インド農業・加工食品輸出振興局(APEDA)「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

< ベトナム > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、9月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から2.8%減の26.0百万トンの見込み。

ベトナム総統計局(2025.11.6)によれば、2025年(USDA:2024/25年度)の夏秋作(ムア米)の全国作付面積は、10月20日時点で、前年同期に比べ0.99万ヘクタール減の152.13万ヘクタールの見込み。うち北部の作付面積は、土地転用等により、前年同期に比べ1.72万ヘクタール減の98.08万ヘクタールとなっている。南部の作付面積は、塩害の影響が軽減されたことから、前年同期に比べ0.73万ヘクタール増の54.05万ヘクタールとなっている。夏秋作(夏秋米)の作付面積は、前年同期に比べ1.09万ヘクタール減の189.83万ヘクタールとなっている。また、秋冬作(秋冬米)は、前年同期に比べ97.6%の69.92万ヘクタールが作付けされ、生育は順調(図)。

アセアン食料安全保障情報システム(2025.10)によれば、北部では雨季米(夏秋作)が登熟期を迎え、一部地域では収穫作業が始まっている。北部では9月下旬の台風20号ブアローイ、21号マットウモにより10万ヘクタール以上の水田が被害を受けた。被害状況は現在調査中であるが、単収の減少が懸念されている。南部では、雨季米(夏秋作)の収穫が完了し、平均単収は前年度並みの約6トン/ヘクタールと予測されている。その他雨季米(秋冬作)は登熟期から収穫期を迎え、稲の生長にとって良好な天候状態が続くと予測されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の輸入量は、9月予測からの変更はなく、カンボジアからの粳米(国内精米用)の大量輸入継続により、前年度から2.5%増の4.1百万トンと、過去最高となる見込み。国内のコメ供給はカンボジアからの玄米輸入で補われており、2025 年上半年にベトナムはカンボジアから約170 万トン輸入し、前年同期に比べ77%増となった。

USDAによれば、2025/26年度の輸出量は、9月予測からの変更はなく、インドやタイといった輸出国との競争激化が予測され前年度から3.7%減の7.9百万トンとなる見込み。ベトナム税関総局によれば、2024/25年度のうち2025年1～10月の輸出量は、716.0万トンと前年同期(778.0万トン)に比べ8%減。輸出先国別には、フィリピン296.4万トン(41.4%)、コートジボワール91.7万トン(12.8%)、ガーナ83.4万トン(11.7%)の順(表)。

国際穀物理事会(IGC)によれば、ベトナム産米(長粒種、5%碎米混入)の11月7日の価格は、前月(10月9日)から12ドル/トン下落し356ドル/トンとなった(<米国>図 米国、タイ、ベトナム、インドのコメ輸出価格(FOB)の推移参照)。

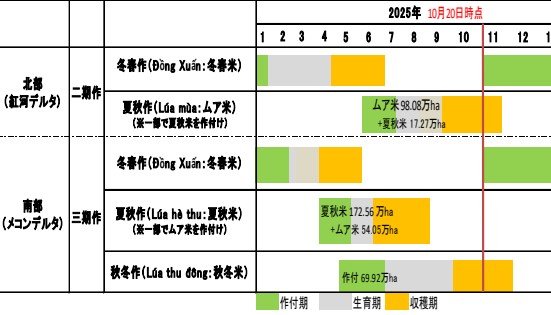
コメベトナム

北部で概ね二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(26年1月～26年12月)			
			2025/26(26年1月～26年12月)		対前年度 増減率(%)	
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更		
生 産 量	27.2	26.8	26.0 (28.3)	-	▲ 2.8	
消 費 量	22.5	22.6	22.7 (23.0)	-	0.4	
輸 出 量	9.0	8.2	7.9 (8.6)	-	▲ 3.7	
輸 入 量	3.7	4.0	4.1 (3.4)	-	2.5	
期末在庫量	3.0	2.9	2.4 (3.1)	-	▲ 17.0	
期末在庫率	9.5%	9.5%	8.0% (9.8%)	-	▲ 1.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.11	6.95	6.80 (7.12)	-	▲ 2.2	
単収(噸/ha)	6.12	6.16	6.12 (3.97)	-	▲ 0.6	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025) (単収は精米/ha)
注:「前月予測からの変更」は、2025年9月予測との差。

図 ベトナムのクロップカレンダー(北部と南部)



資料:ベトナム国家統計局のデータをもとに農林水産省で作成

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2023/24年度 (2024年1月～10月)			2024/25年度 (2025年1月～10月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
フィリピン	422.1	46.7	フィリピン	363.6	46.7	フィリピン	296.4	41.4
インドネシア	125.7	13.9	インドネシア	108.5	13.9	コートジボワール	91.7	12.8
マレーシア	71.9	8.0	マレーシア	66.9	8.6	ガーナ	83.4	11.7
ガーナ	61.3	6.8	ガーナ	52.2	6.7	中国	63.0	8.8
コートジボワール	48.3	5.3	コートジボワール	39.2	5.0	マレーシア	41.0	5.7
中国	28.5	3.2	中国	25.0	3.2	セネガル	16.6	2.3
その他	145.5	16.1	その他	122.5	15.7	その他	123.9	17.3
計	903.4	100.0	計	778.0	100.0	計	716.0	100.0

資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2025/26 年度

「前月比」は 2025 年9月予測との比。

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・南アフリカ等で上方修正されたものの、インド、ウクライナ、米国で下方修正され、9月から下方修正された。

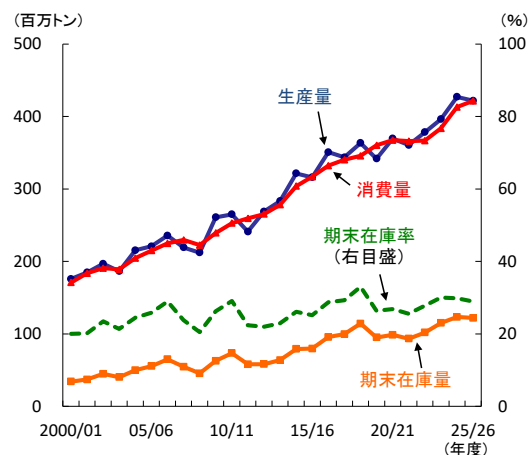
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル等で上方修正されたものの、アルゼンチン、インド等で下方修正され、9月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、ウクライナで下方修正されたものの、アルゼンチン、ブラジルで上方修正され、9月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2025.11.14)をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	396.4	427.1	421.8	▲ 4.1	▲ 1.3
消費量	383.6	413.0	421.5	▲ 2.4	2.1
うち搾油用	331.2	357.8	365.0	▲ 1.7	2.0
輸出量	177.8	185.0	188.0	0.2	1.6
輸入量	178.3	179.1	186.4	0.2	4.1
期末在庫量	115.1	123.3	122.0	▲ 2.0	▲ 1.1
期末在庫率	30.0%	29.9%	28.9%	▲ 0.3	▲ 0.9

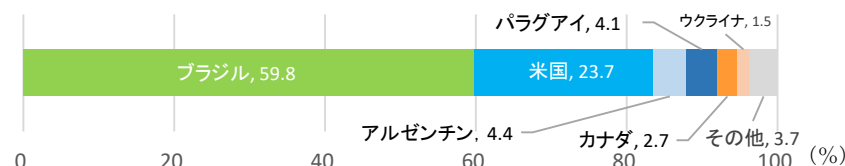
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(14 November 2025)

注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

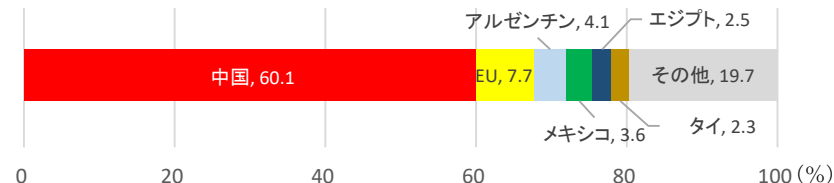
○ 2025/26 年度 世界の大豆の生産量(421.8 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界の大豆の輸出量(188.0 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界の大豆の輸入量(186.4 百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引下げを受け9月予測から 1.3 百万トン下方修正され、収穫面積の減少を受け前年度から 2.8%減の 115.8 百万トンの見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家がとうもろこしに作付けを切り替えたとみられる。

同「Crop Progress」(2025.11.17)によれば、11 月 16 日現在、収穫進捗率は 95%と、前年同期(98%)及び過去5年平均(96%)を下回っている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測から 0.01 百万トン下方修正され、搾油用需要の増加を受け前年度から 4.4%増の 72.5 百万トンと史上最高の見込み。米国環境保護庁(EPA)は、6月 13 日、再生可能燃料基準制度(RFS)について、2026～2027 年の混合基準量案を公表した。バイオディーゼルに関しては、2025 年の 33 億 5,000 万ガロンに対して、2026 年は 56 億 1,000 万ガロン、2027 年は 58 億 6,000 万ガロンと過去最高の数量を設定している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、ブラジル及びアルゼンチンの輸出拡大等を受け9月予測から 1.4 百万トン下方修正され、搾油用需要の増加等を受け前年度から 12.8%減の 44.5 百万トンの見込み。

国際穀物理事会(IGC)によれば、11 月7日現在、米国産の輸出価格は、448 ドル/トンと、前月(10 月9日)から 43 ドル/トン上昇した。ブラジル産は前月から6ドル/トン上昇し 448 ドル/トン、アルゼンチン産は前月から 24 ドル/トン上昇し 431 ドル/トンとなった(図)。業界情報誌「OIL WORLD Weekly」(2025.11.7)によれば、11 月6日時点でブラジル産及び米国産大豆の輸出価格(FOB)はほぼ同額である。しかし、中国は米国産大豆に 13%の輸入関税を課しているため価格面で不利となっており、中国が米国産を大量購入する可能性は低いと見込まれている。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2025 年 9～10 月の輸出量は、前年同期(1,295.7 万トン)に比べ 37.6%減の 808.7 万トン。輸出先国別には、メキシコ 120.4 万トン(14.9%)、エジプト 113.1 万トン(14.0%)、バングラデシュ 64.0 万トン(7.9%)の順(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引下げ等を受け9月予測から 0.3 百万トン下方修正され、搾油用需要の増加等を受け前年度から 8.4%減、過去5年平均(7.9 百万トン)から 0.4%減の 7.9 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 0.4 ポイント減の 6.7%となる見込み。

大豆－米国

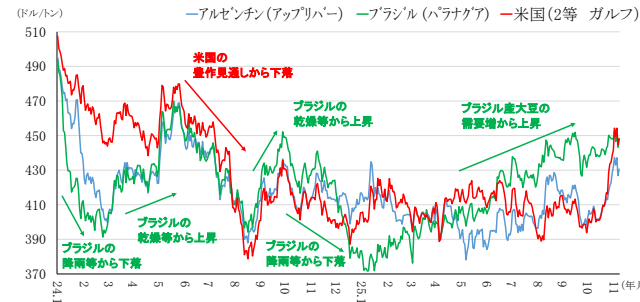
(概ね5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月～26年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	113.3	119.1	115.8	▲ 1.3	▲ 2.8
消 費 量	65.4	69.5	72.5	▲ 0.01	4.4
うち搾油用	62.2	66.5	69.5	－	4.5
輸 出 量	46.3	51.0	44.5	▲ 1.4	▲ 12.8
輸 入 量	0.6	0.7	0.5	－	▲ 27.0
期末在庫量	9.3	8.6	7.9	▲ 0.3	▲ 8.4
期末在庫率	8.3%	7.1%	6.7%	▲ 0.2	▲ 0.4

(参考)
収穫面積(百万ha) 33.29 34.89 32.50 ー ▲ 6.8
単収(t/ha) 3.40 3.41 3.56 ▲ 0.04 4.4
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「PS&D」(14 November 2025)

注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

図 米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格 (FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

表 米国大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月～10月)			2025/26年度 (2025年9月～10月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	2,232.5	44.7	中国	739.6	57.1	メキシコ	120.4	14.9
メキシコ	498.5	10.0	メキシコ	99.0	7.6	エジプト	113.1	14.0
エジプト	369.2	7.4	ドイツ	69.6	5.4	バングラデシュ	64.0	7.9
ドイツ	273.1	5.5	エジプト	56.2	4.3	イタリア	62.0	7.7
イタリア	210.0	4.2	イタリア	39.4	3.0	パキスタン	59.5	7.4
その他	1,415.2	28.3	その他	291.9	22.5	その他	389.7	48.2
合計	4,998.7	100.0	合計	1,295.7	100.0	合計	808.7	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」のデータをもとに農林水産省で作成

< ブラジル > 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、9月予測からの変更はなく、収穫面積が史上最高となることを受け前年度から 2.0%増の 175.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2025.11.13)によれば、2025/26 年度の実産量は、コメなどの他作物から収益性が高い大豆に作付けがシフトすること等による作付面積の増加を受け前年度から 3.6%増の 177.6 百万トンと史上最高の見込み。11 月8日現在、作付進捗率は、58.4%と平年並みのペースで進行している。主要生産地のうちマツト・グロッソ州、マツト・グロッソ・ド・スール州、パラナ州では作付けはほぼ完了しているものの、降雨不足であった 10 月初旬に作付けされた地域では、初期生育に影響があり、マツト・グロッソ州では再作付けされた圃場も報告されている。

10 月初旬は降雨が不足していたものの、10 月末の降雨によって作付作業が進展した(写真)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、搾油用需要の引上げを受け9月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 2.1%増の 63.3 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル政府は、大豆油のインフレ懸念により 14%からの引上げが延期されていたバイオディーゼル混合率について、2025 年8月1日から 15%へ引き上げた。これにより化石燃料輸入量の減少、脱炭素化、農家の所得向上等が期待されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、9月予測から 0.5 百万トン上方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 9.1%増の 112.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月の実輸出量は、前年度(471.0 万トン)に比べ 42.8%増の 672.8 万トン。輸出先国別には、中国 616.6 万トン(91.7%)、タイ 28.7 万トン(4.3%)、イラン 14.4 万トン(2.1%)の順となっている(表)(輸出量の推移については P9注目情報図9を参照)。

報道情報(2025.11.3)によれば、米中貿易協議での合意により、中国への米国産大豆販売再開の期待が高まる中、南米産の価格が(米国産の価格に比べ)軟化したことを受け、中国の輸入業者はブラジル産大豆の購入を加速させている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、搾油用需要の引上げ等を受け9月予測から 0.9 百万トン下方修正され、輸出量の増加等を受け前年度から 1.2%減、過去5年平均(32.0 百万トン)から 13.5%増の 36.4 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.6 ポイント減の 20.7%となる見込み。

大豆—ブラジル

(概ね9～12 月に作付けされ、1～4月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値	前月予測 からの差	前年度 増減率(%)
生 産 量	154.5	171.5 (171.5)	175.0 (177.6)	(▲0.04)	2.0 (3.6)
消 費 量	58.3	62.0 (62.2)	63.3 (63.1)	1.0 (▲0.2)	2.1 (1.5)
うち搾油用	54.4	58.0 ---	59.0 ---	1.0 ---	1.7 ---
輸 出 量	104.2	103.1 (106.7)	112.5 (112.1)	0.5 (▲0.01)	9.1 (5.1)
輸 入 量	0.9	0.7 (0.9)	0.4 (0.5)	- (-)	▲52.1 (▲44.4)
期末在庫量	29.7	36.8 (10.7)	36.4 (13.6)	▲0.9 (0.2)	▲1.2 (26.5)
期末在庫率	18.3%	22.3% (6.4%)	20.7% (7.8%)	▲0.7 (0.1)	▲1.6 (1.4)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	46.15	47.40 (47.35)	48.80 (49.06)	- (▲0.01)	3.0 (3.6)
単収(t/ha)	3.35	3.62 (3.62)	3.59 (3.62)	- (-)	▲0.8 (▲0.1)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「PS&D」(14 November 2025)
CONAB「Grãos」(13 November 2025)※() 書き、なお、CONABの収穫面積は作付面積である。
注:USDAにおける「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

写真 マツト・グロッソ州の大豆圃場 (2025.10.29 撮影)



撮影者: Rafael Rohenkohl

当圃場では、降雨が記録された後、良好な土壌水分量の中で作付けが行われた。収穫は2月末に予定されている。

表 ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月)			2025/26年度 (2025年10月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	7,968.8	77.3	中国	352.2	74.8	中国	616.6	91.7
スペイン	396.3	3.8	タイ	36.5	7.8	タイ	28.7	4.3
タイ	365.5	3.5	スペイン	28.3	6.0	イラン	14.4	2.1
トルコ	184.8	1.8	ロシア	19.9	4.2	オランダ	8.6	1.3
イラン	146.3	1.4	イラン	16.3	3.5	日本	3.1	0.5
その他	1,252.1	12.1	その他	17.6	3.7	その他	1.3	0.2
合計	10,313.8	100.0	合計	471.0	100.0	合計	672.8	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

< カナダ > 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.7%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2025.11.24)によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測から変更はなく、単収が前年度から減少することを受け前年度から 5.7%減の 7.1 百万トンの見込み。

カナダ統計局「Model-based Principal field crop estimates, August 2025」(2025.9.17)によれば、2025/26 年度の実産量は、前年度から 5.7%減の 7.1 百万トンの見込み。州別には、マニトバ州では前年度から 2.9%増の 1.7 百万トンとなるものの、オンタリオ州では前年度から 8.8%減の 4.0 百万トン、ケベック州では前年度から 7.8%減の 1.3 百万トンで各州とも単収が前年度を下回る見込み。カナダ東部(オンタリオ州及びケベック州等)では生育期を通じて高温乾燥に見舞われていた。

AAFC「Canadian Drought Monitor」(2025.9.30)によれば、主要生産地のオンタリオ州及びケベック州では、9月に入り乾燥型の天候により収穫作業が進展した。

オンタリオ州穀物生産者協会によれば、主要生産地のオンタリオ州では、10 月中旬にかけて収穫に適した天候(図)により収穫が進展し、10 月 29 日現在の収穫進捗率は 99%とほぼ完了している。

【需要状況】AAFC によれば、2025/26 年度の実消費量は、前月予測から変更はなく、飼料用需要等の減少を受け前年度から 9.0%減の 2.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 1.3%減の 5.4 百万トンの見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 6.4%減となるものの、過去5年平均(4.7 百万トン)から 9.1%増の 5.1 百万トンの見込み。

カナダ統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8月の輸出量は、前年同期(19.2 万トン)に比べ 14.0%減の 16.5 万トン。輸出先国別には、米国 3.8 万トン(23.1%)、日本 3.2 万トン(19.1%)、インドネシア 2.9 万トン(17.4%)の順となっている(表)。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.0%減の 0.5 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 0.2 ポイント増の 6.6%となる見込み。

大豆－カナダ

(概ね5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

(単位:百万トン)

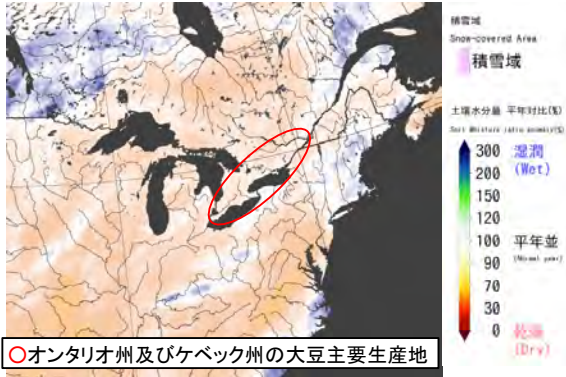
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	7.0	7.6 (7.6)	7.0 (7.1)	- (-)	▲7.5	(▲5.7)
消 費 量	2.3	2.4 (2.5)	2.3 (2.2)	- (-)	▲6.3	(▲9.0)
うち搾油用	1.7	1.6 (1.7)	1.6 (1.7)	- (-)	-	(1.3)
輸 出 量	4.9	5.4 (5.4)	5.1 (5.4)	- (-)	▲6.4	(▲1.3)
輸 入 量	0.3	0.2 (0.3)	0.4 (0.5)	- (-)	44.6	(68.5)
期末在庫量	0.6	0.5 (0.5)	0.5 (0.5)	- (-)	1.9	(▲1.0)
期末在庫率	7.9%	6.8% (6.4%)	7.4% (6.6%)	- (-)	0.6	(0.2)
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.26	2.29 (2.29)	2.30 (2.32)	- (-)	0.4	(1.3)
単収(t/ha)	3.09	3.31 (3.31)	3.04 (3.07)	- (-)	▲8.2	(▲7.3)

資料:「PS&D」(14 November 2025)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(24 November 2025)※()書き

注:USDAにおける「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

図 オンタリオ州、ケベック州の大豆主要生産地の降水量平年対差
(2025 年 10 月 1 日～15 日)



資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月)			2025/26年度 (2025年8月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	104.3	19.2	アルジェリア	4.4	23.0	米国	3.8	23.1
イラン	76.5	14.1	米国	4.4	22.8	日本	3.2	19.1
アルジェリア	54.9	10.1	日本	2.6	13.6	インドネシア	2.9	17.4
米国	43.2	7.9	インドネシア	2.0	10.5	中国	1.8	11.0
日本	40.0	7.4	マレーシア	1.3	6.7	ノルウェー	1.0	6.0
インドネシア	31.8	5.8	ベルギー	1.3	6.7	ベトナム	0.8	5.1
その他	193.5	35.6	その他	3.2	16.7	その他	3.0	18.3
合計	544.2	100.0	合計	19.2	100.0	合計	16.5	100.0

資料:カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

大豆－中国

(概ね4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.8	20.7	21.0 (21.1)	-	1.7
消 費 量	121.8	127.4	133.0 (134.6)	-	4.4
うち搾油用	99.0	103.5	108.0 (110.9)	-	4.3
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
輸 入 量	112.0	108.0	112.0 (113.0)	-	3.7
期末在庫量	43.3	44.5	44.4 (49.9)	1.0	▲ 0.2
期末在庫率	35.5%	34.9%	33.4% (37.1%)	0.8	▲ 1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.47	10.33	10.50 (10.42)	-	1.6
単収(t/ha)	1.99	2.00	2.00 (2.02)	-	-

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「PS&D」(14 November 2025)
IGC「Grain Market Report」(23 October 2025)
注:「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

表 中国の大豆の輸入先国と輸入量

2023/24年度 (2023年10月～2024年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	7,732.1	73.8	ブラジル	7,610.9	69.6
米国	2,091.6	20.0	米国	2,438.9	22.3
アルゼンチン	267.7	2.6	アルゼンチン	476.6	4.4
カナダ	151.9	1.5	ウルグアイ	244.3	2.2
ウルグアイ	102.7	1.0	カナダ	118.6	1.1
ロシア	79.8	0.8	ロシア	45.0	0.4
その他	48.8	0.5	その他	2.1	0.0
合計	10,474.7	100.0	合計	10,936.3	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

図 中国の大豆の期末在庫量の推移



< 中国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26 年度の生産量は、9月予測からの変更はなく、収穫面積の増加を受け前年度から 1.7%増の 21.0 百万トンとなり、史上最高の見込み。

中国中央气象台「全国秋収秋種気象服務」(2025.11.7)によれば、9月以降主要生産地の東北部の大部分では気温が高く、大豆の成熟及び収穫に適した気候により収穫は順調に進行した。

中国農業農村部(2025.11.10)によれば、同国の大豆の収穫はほぼ完了している。

【需要状況】USDAによれば、2025/26 年度の消費量は、9月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 4.4%増の 133.0 百万トンと史上最高の見込み。

中国農業農村部「中国農業展望報告(2025-2034)」(2025.4)によれば、2025 年は豚肉生産量の増加に伴い短期的には飼料用需要の増加が見込まれるものの 2034 年までの見通しでは、養豚施設の大規模化等により飼料用需要は今後安定的に推移する見込み。一方、飼料用大豆粕減量の取組が進み大豆粕需要は徐々に減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26 年度の輸入量は、9月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 3.7%増の 112.0 百万トンと、2023/24 年度と並び史上最高の見込み。

中国海関統計によれば、2024/25 年度の輸入量は、前年度(10,474.7 万トン)に比べ 4.4%増の 10,936.3 万トン。輸入先国別には、ブラジル 7,610.9 万トン(69.6%)、米国 2,438.9 万トン(22.3%)、アルゼンチン 476.6 万トン(4.4%)の順(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年9月号」によれば、端境期によって市場供給が限定的であるものの、食品加工業者の仕入れ水準が例年を下回っていること等により、9月の国内価格は 4,660 元/トンと、前月(4,680 元/トン)からほぼ横ばいで推移している。

中国国務院関税税則委員会は、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け8月 12 日から更に 90 日間停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表(同第 10 号)した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 10%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これにより大豆は 10%の追加関税を課すこととなった。

USDAによれば、2025/26 年度の期末在庫量は、期首在庫の引上げを受け9月予測から 1.0 百万トン上方修正され、搾油用需要の増加等を受け前年度から 0.2%減、過去5年平均(34.8 百万トン)から 27.4%増の 44.4 百万トンと、史上2番目の見込み(図)。期末在庫率は、前年度から 1.6 ポイント減の 33.4%となる見込み。

< アルゼンチン > 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、9月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度から 5.1%減の 48.5 百万トン（図）の見込み（図）。前年度は病害虫のヨコバイによる被害によりとうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26 年度は被害の改善により大豆からとうもろこしに作付けがシフトする見込み。

アルゼンチン農牧漁業庁（SAGyP）の週報（2025.11.13）によれば、11 月 13 日の作付進捗率は 15%と前年同期（25%）を下回っている。州別には、主要生産州のブエノスアイレス州が 12%（前年同期 27%）、コルドバ州 19%（同 33%）、サンタフェ州 25%（同 30%）。降雨により一部地域で作付けが遅れているものの、すでに作付けが完了した圃場での初期生育は良好とみられる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、搾油用需要の引下げ等により9月予測から 1.4 百万トン下方修正され、前年度から 4.6%減の 48.2 百万トン（図）の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、9月予測から 0.5 百万トン上方修正され、同国への大豆主要供給国であるパラグアイの実生産量増加等を受け前年度から 21.8%増の 7.7 百万トン（図）の見込み。

2025/26 年度の輸出量は、9月予測から 2.3 百万トン上方修正され、大幅に輸出量が増加した前年度から 4.8%増の 8.3 百万トン（図）の見込み。

アルゼンチン政府は、2025 年9月 22 日、穀物（大豆含む）及び副産物について、23 日から輸出税を一時的に撤廃することを発表した。期限は、10 月 31 日又は申告された輸出額が 70 億米ドルに相当する額に達する日（いずれか早い方）までとしていたが、輸出額の上限に達し、9月 25 日から再び輸出税を課すこととなった。報道情報によれば、輸出を加速させることで、低迷するペソ通貨を支えるために必要なドルを調達する狙いがあったとみられる。政府はこれまで、1月から6月末まで大豆の輸出税を 26%、大豆油及び大豆粕の輸出税を 24.5%に引き下げていたが、7月1日からは従来の税率である大豆 33%、大豆油及び大豆粕 31%に引き上げ、8月1日には、再び大豆 26%、大豆油及び大豆粕 24.5%に引き下げていた。

業界情報誌「OIL WORLD Weekly」（2025.10.10）によれば、輸出税の一時撤廃を受け、9月の輸出量は前年から 1.7 百万トン増の 2.0 百万トンとなっており、うち 97%が中国向けの輸出となっている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け 1.0 百万トン下方修正され、生産量の減少等を受け前年度から 1.1%減、過去5年平均（22.5 百万トン）から 1.4%増の 22.9 百万トン（図）の見込み。期末在庫率は前年度から 0.9 ポイント増の 40.5%となる見込み。

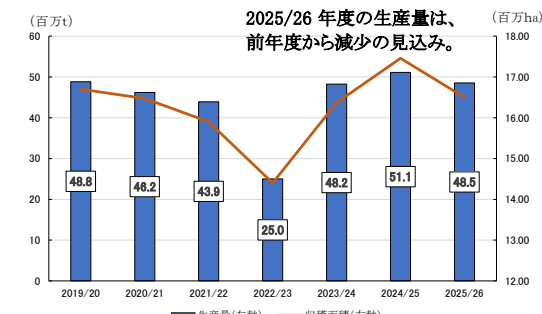
大豆－アルゼンチン

（早植え大豆は、概ね 10～11 月に作付けされ、3～7 月に収穫され、
遅植え大豆は、概ね 10～1 月に作付けされ、4～7 月に収穫される。）

年 度	2023/24	2024/25 （見込み）	2025/26（25年10月～26年9月）		
			予測値、（）はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）
生 産 量	48.2	51.1	48.5	（48.5）	▲ 5.1
消 費 量	43.8	50.5	48.2	（50.0）	▲ 4.6
うち搾油用	36.6	43.2	41.0	（43.5）	▲ 5.1
輸 出 量	5.1	7.9	8.3	（5.6）	4.8
輸 入 量	7.8	6.3	7.7	（6.8）	21.8
期末在庫量	24.1	23.1	22.9	（5.0）	▲ 1.1
期末在庫率	49.1%	39.6%	40.5%	（8.9%）	▲ 2.2

（参考）
収穫面積（百万ha） 16.37 17.46 16.50（17.05）
単収（t/ha） 2.95 2.93 2.94（2.84）
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「PS&D」（14 November 2025）
IGC「Grain Market Report」（23 October 2025）
注：「前月予測からの変更」は2025年9月予測との差。

図 アルゼンチン大豆の生産量と収穫面積の推移



資料：USDA「PS&D」（2025.11.14）をもとに農林水産省で作成

写真 サンタフェ州の大豆種子保管（2025.10.23 撮影）



サンタフェ州の農協倉庫に保管される大豆種子。11月上旬の作付開始まで保管される。なお、重量は1袋約 800kg となっている。

撮影者：José Daniel Peloni

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について（2025/26年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	25年6月～26年5月	25年9月～26年8月	25年8月～26年7月	25年9月～26年8月
カナダ	25年8月～26年7月			25年8月～26年7月
豪州	25年10月～26年9月		26年3月～27年2月	
EU	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
中国	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月
ロシア	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		25年9月～26年8月
ウクライナ	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
ブラジル		26年3月～27年2月	26年4月～27年3月	25年10月～26年9月
アルゼンチン	25年12月～26年11月	26年3月～27年2月		25年10月～26年9月
タイ			26年1月～12月	
インド	25年4月～26年3月		25年10月～26年9月	
ベトナム			26年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2025/26年度は、米国の小麦では2025年6月～2026年5月、ブラジルのとうもろこしでは2026年3月～2027年2月です。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel （ブッシェル） （穀物により異なる）	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

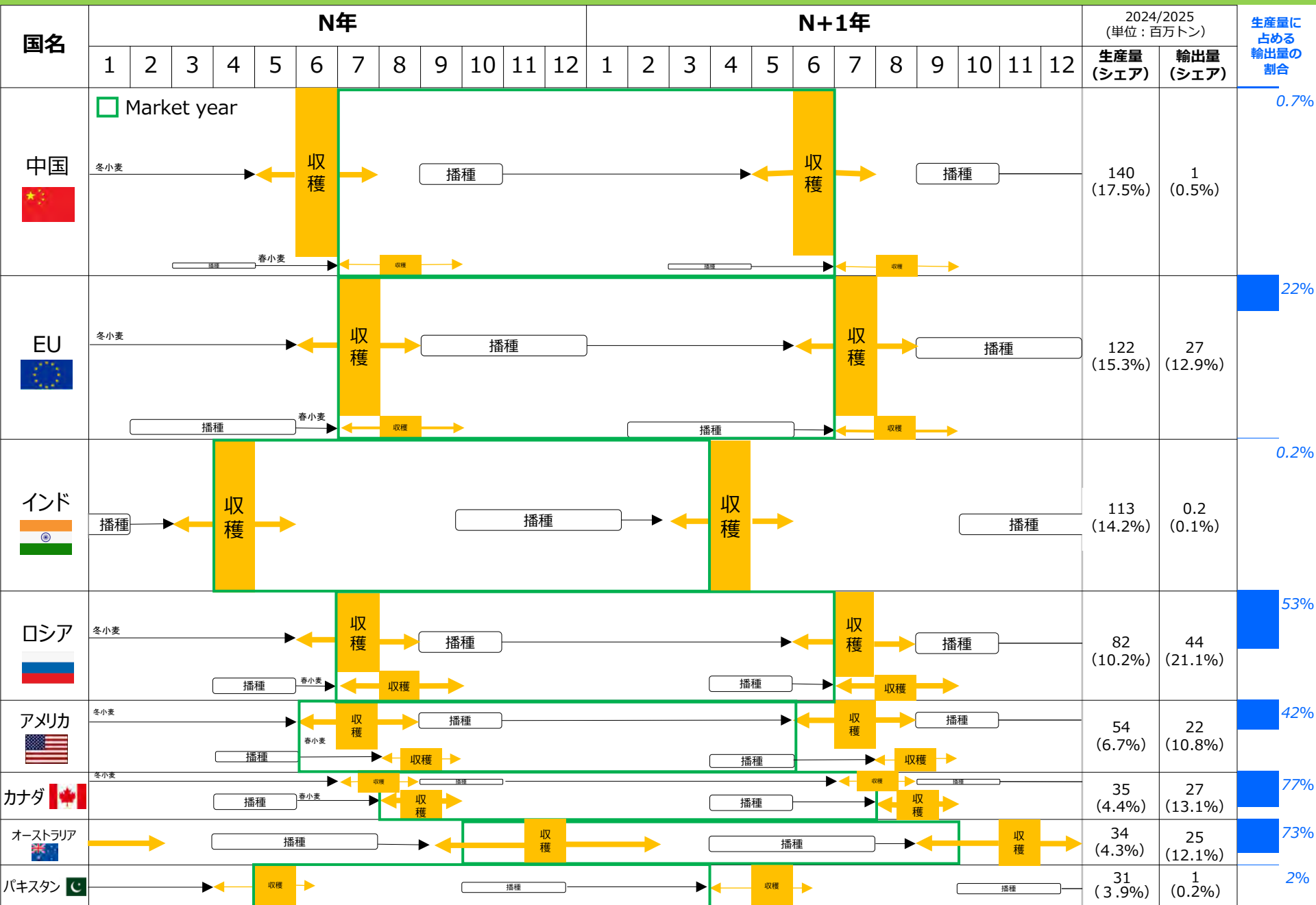
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロップカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



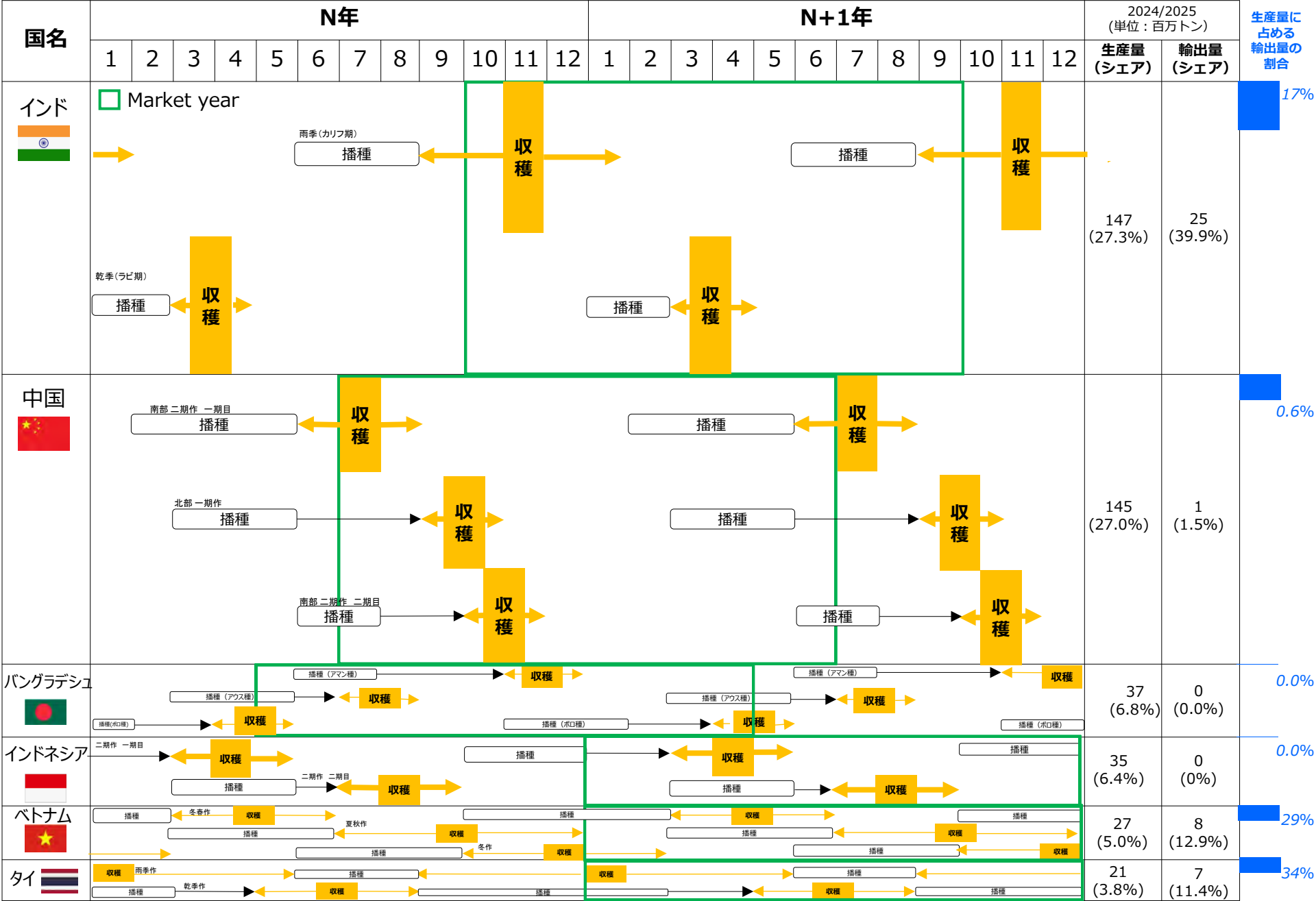
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「Crop Calendars」、「PS&D」(2025.5)

注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他：188
(23.6%) 60
(29.2%)

主要生産国のクロップカレンダー(米)

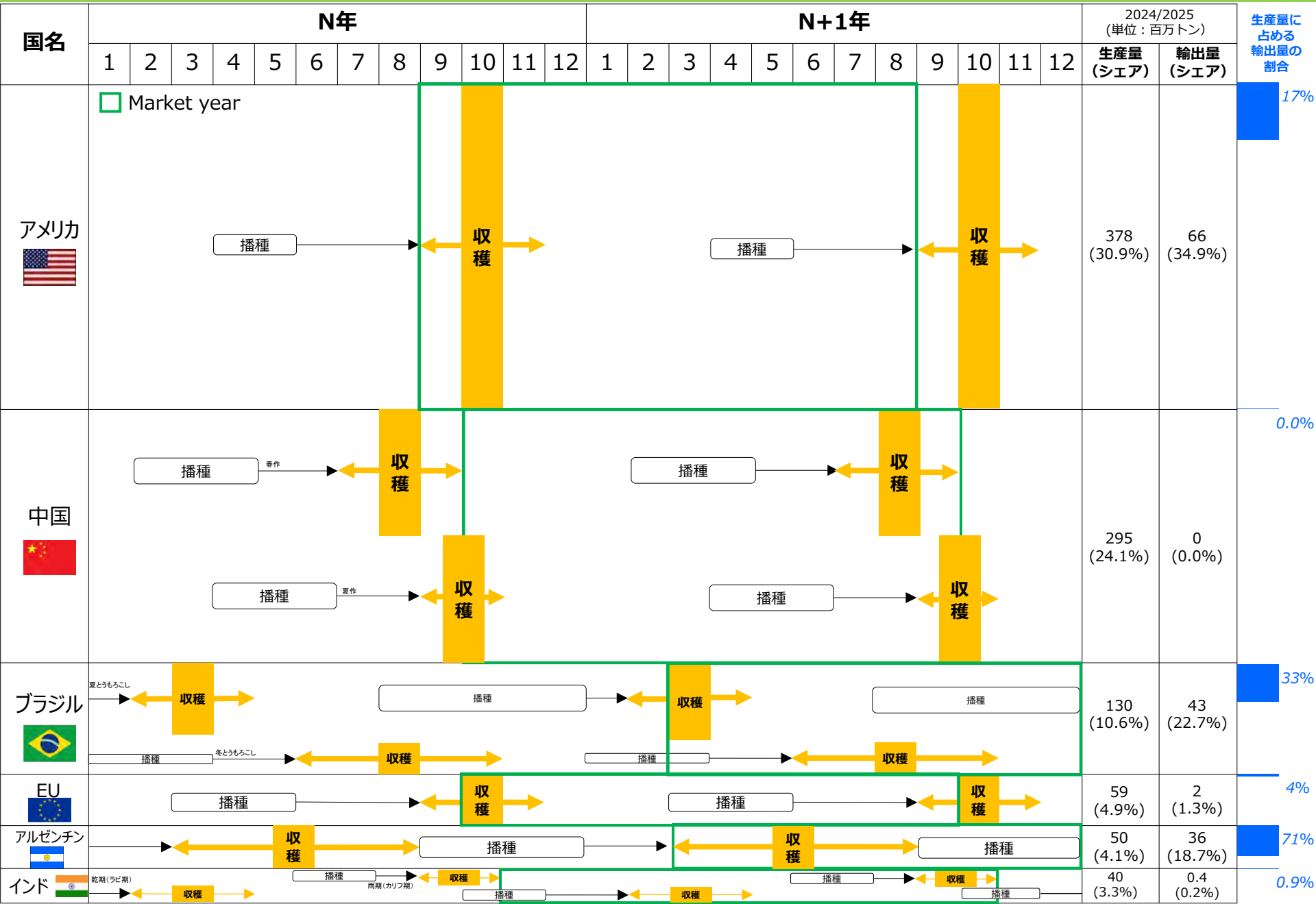
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「Crop Calendar」、PS&D（2025.5） 注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：127 (23.6%) 21 (34.4%)

主要生産国のクロップカレンダー(とうもろこし)

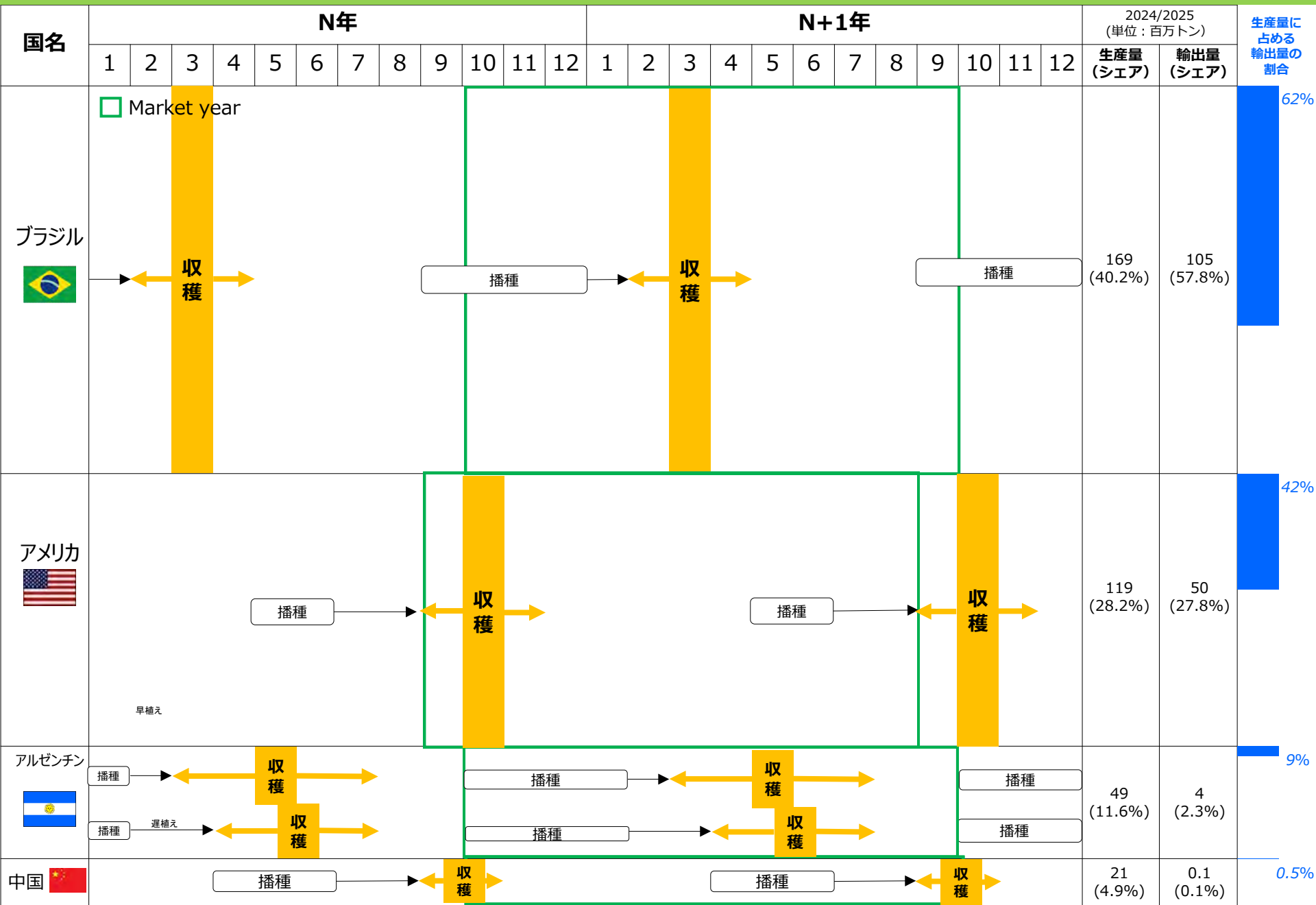
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：269 (22.1%) 42 (22.2%)

主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



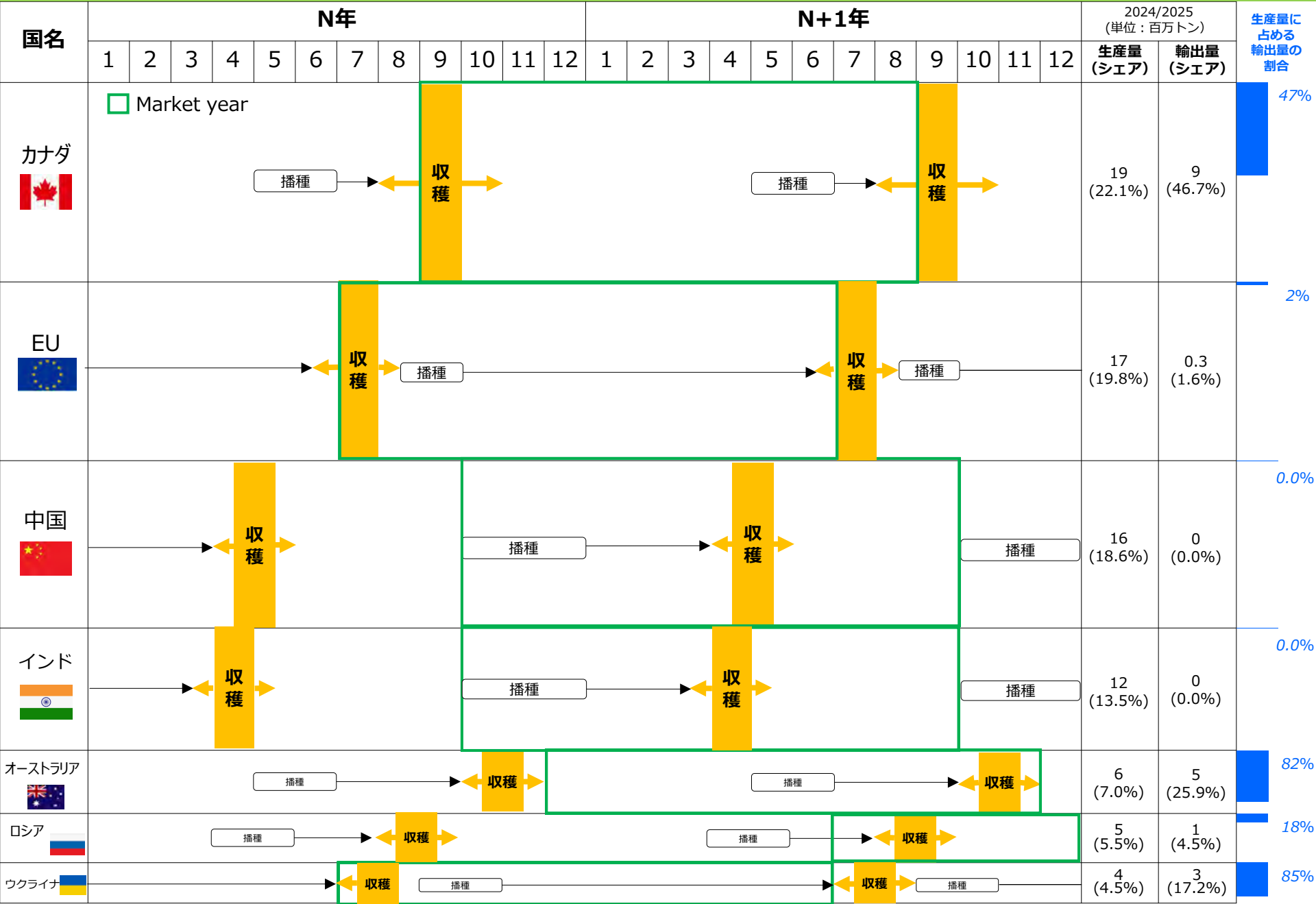
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：

63
(15.1%)

22
(12.0%)

主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：USDA「Crop Calendar」、「PS&D」（2025.5）

注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他：⁸(9.1%) ¹(4.1%)

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2025 年 11 月中旬までに発表した情報を引用しています（最新年度 2025/26 年度です）。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表：<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>

・食品の価格動向：<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>

・米に関するマンスリーレポート：<https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>

・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>

・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関(FAO): <https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会(IGC): <https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構(OECD)(農業・水産業分野): <https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html>
- ・農業市場情報システム(AMIS): <http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省(USDA): <https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社(CONAB): <https://www.gov.br/conab/pt-br>
- ・カナダ農務農産食品省(AAFC): <https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局(ABARES): <http://www.agriculture.gov.au/abares>

- データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注:同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

○ 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○ 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL:03-6744-2368(直通)

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

